

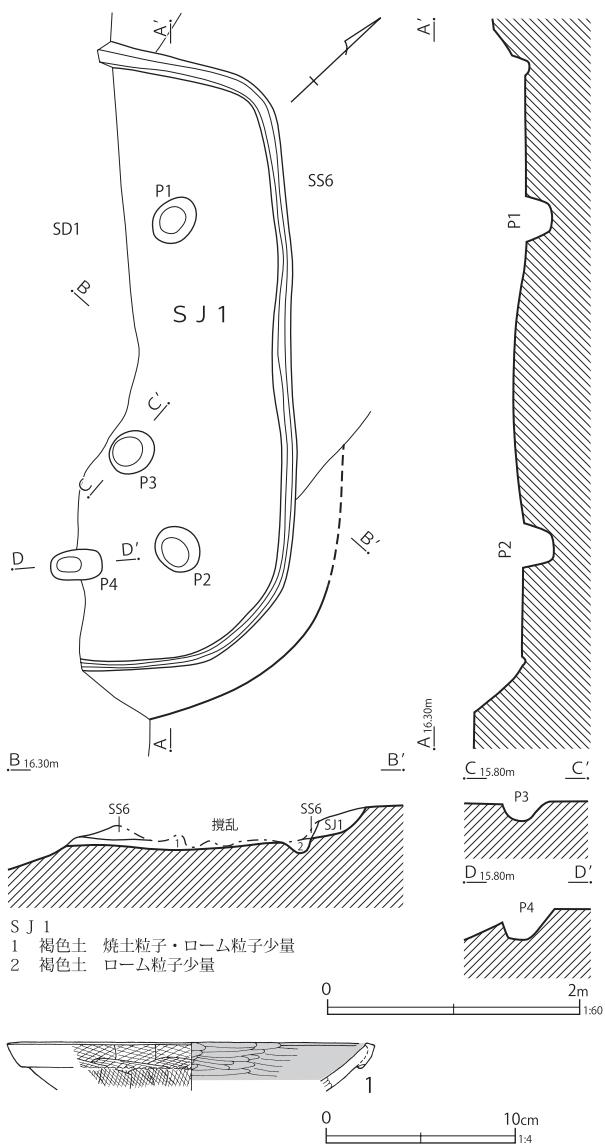
3. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、住居跡 12 軒、古墳跡 1 基、溝跡 1 条、土壙 2 基が検出された。遺構は調査区北側を除いて全域に分布していた。

(1) 住居跡

第 1 号住居跡（第 72 図）

調査区東側の H - 9・10 グリッドに位置する。確認面では大半が古墳跡の周溝および第 1 号溝跡と重複するが、周溝による掘削は床面まで達さず、床面と壁溝の約半分が残存した。壁の立ち上がり



第 72 図 第 1 号住居跡・出土遺物

第 4 表 第 1 号住居跡出土遺物観察表（第 72 図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(18.2)	[2.5]	—	ACEHIK	15	良好	にぶい黄橙	内面赤彩 内面煤付着	22-1

は、東側の一部に残存する。平面形態は方形で、残存する部分の長軸方位は N - 48° - W である。長軸方向の長さは 5.37 m と推定され、直交軸方向には 1.9 m が残存する。壁高は 0.37 m を測る。残存した覆土は薄く、堆積の状況は推定できない。

ピットは 4 基検出され、うち P 1・2 が主柱穴と見られる。

壁溝は幅 0.08 ~ 0.17 m、深さは 0.08 m を測る。出土遺物から、時期は古墳時代前期である。

図示し得る遺物は僅少であるが、壺の口縁部片が出土した。口縁部は緩やかに立ち上がり、貼り付けで段をつくる。貼付口縁部には横位に、以下には縦位に、また口縁端部にも横位に網目状の文様が施されている。これは網目状撚糸文と通称されるものであるが、撚りが観察されず、撚糸原体の単位が確認できないことから、網目状撚糸文を模して櫛状工具痕を交差させた文様と判断し、図示した。口縁部は二段施文され、上半に施文後に下半が施文される。貼付口縁下端には木口状工具によるキザミが右方向から施される。内面は横位のヘラミガキ後、赤彩される。

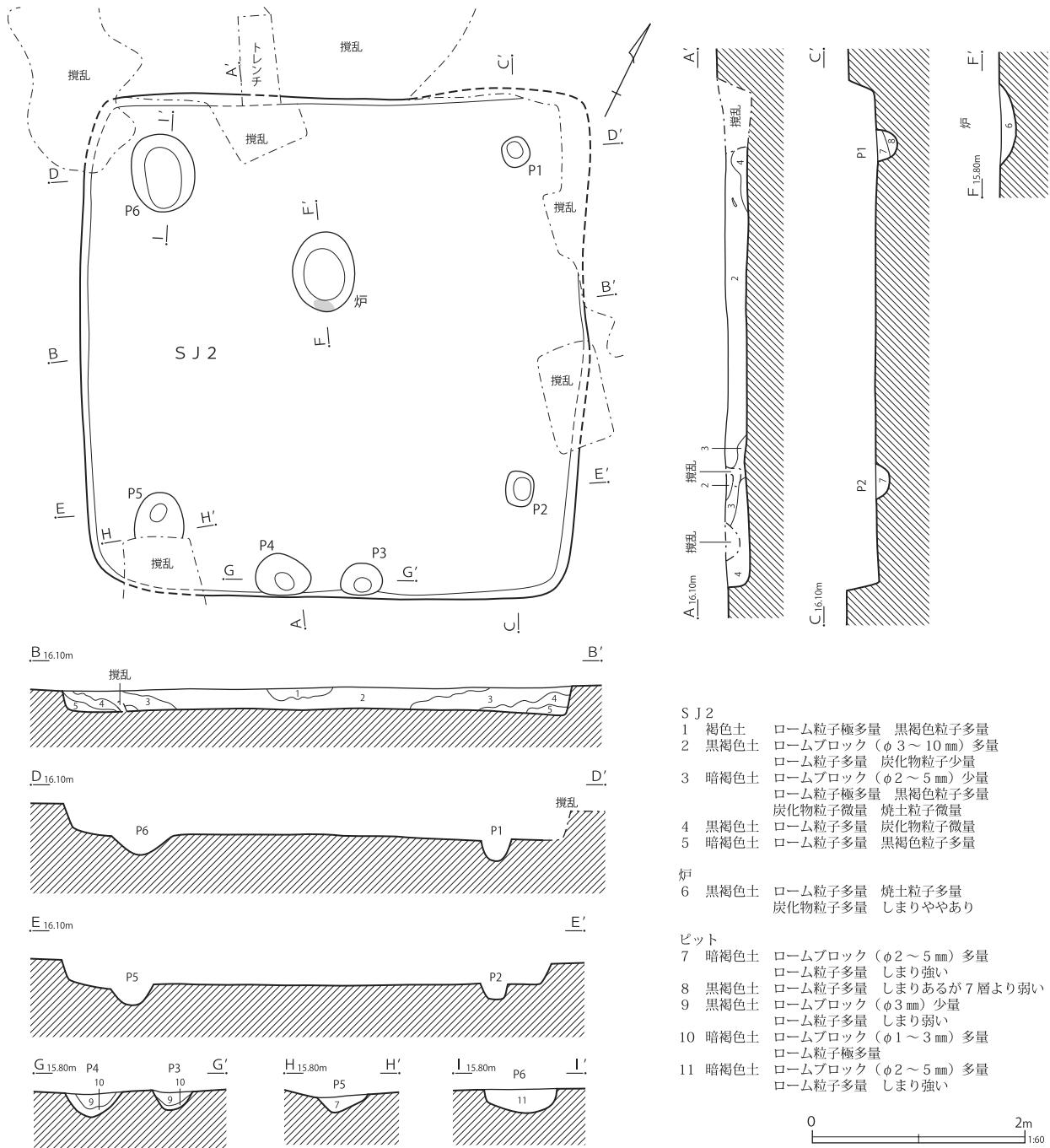
図示した他に、甕の細片 1 点が出土した。

第 2 号住居跡（第 73 図）

調査区南側の J - 9 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は方形で、主軸方位は N - 25° - W である。主軸方向、直交軸方向とも長さ 4.8 m、壁高は 0.2 m を測る。覆土は壁際から順に、斜めに堆積しており、自然堆積の様相を示している。

ピットは 6 基検出され、P 1・2・5・6 の 4 基が主柱穴である。P 3・4 は入口施設（梯子穴）と考えられる。

炉跡は中央からやや北西寄りに検出された。主軸方向に長軸をもつ橢円形である。長軸 0.75 m、



第73図 第2号住居跡

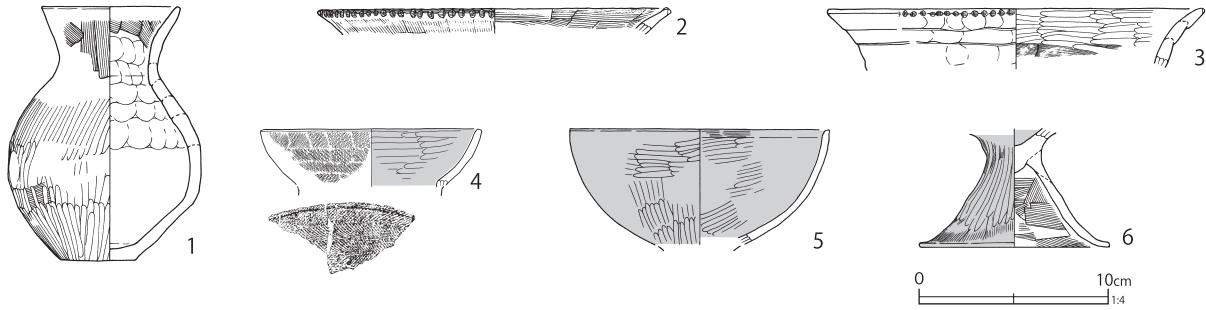
幅0.6m、深さ0.14mを測る。覆土に炭化物と焼土粒子を多く含むが、底面で焼土化しているのは南東側壁面の一部のみである。炉跡周辺の木根によって搅乱され、火床面が失われたと思われる。時期は出土遺物から、古墳時代前期である。

出土遺物を第74図に示した。

1は小型壺である。口縁部は直線的に開き、胴部中位に最大径を持ち、底部まではやや直線的に

窄まる。外面は、胴部に横位の目の細かいハケ後、縦位に4段のヘラミガキが施される。底部から胴部までの内面は風化し、調整は不明瞭である。肩部以上は輪積み痕に指オサエが施され、口縁内面は目の細かいハケである。

2は甕の口縁部である。端部に木口状工具によるキザミが右から施される。外面は縦位のハケ後、軽くナデられる。内面は横位のハケ後、最上部に



第74図 第2号住居跡出土遺物

第5表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(7.2)	13.4	3.9	AEHIKL	90	普通	にぶい褐	炉跡 底面・外面底部煤付着	22-2
2	土師器	甕	(18.0)	[1.3]	—	EHIK	25	普通	黒褐	炉跡 外面煤付着	22-3
3	土師器	甕	(19.4)	[3.1]	—	AEHIK	15	普通	にぶい橙	外面煤付着	22-4
4	土師器	小型壺	(11.2)	[3.0]	—	AEHIK	5	普通	明褐	P3 内面赤彩	22-5
5	土師器	高坏	(13.4)	[6.0]	—	AEHIKL	45	普通	浅黄	内外面赤彩	22-6
6	土師器	高坏	—	[6.2]	(9.9)	ACEHIK	55	普通	にぶい褐	坏部内面赤彩 脚部外面赤彩	22-7

ナデが施される。

3は甕の口縁部である。類例から台付甕と思われる。端部に木口状工具によるキザミが右から施される。口縁部外面は指オサエが施され、輪積み痕が少なくとも2段見られる。内面は横位のハケ後、横位のヘラミガキが施される。

4は小型壺の口縁部である。若干内湾しながら開き、頸部は屈曲するが、大部分が失われている。端部には面を持ち、単節LRの縄文が施されている。外面には細かな縄文が4段、横羽状に施文されており、1・3・4段目は単節LR、2段目はRLである。1段目と2段目、2段目と3段目の境界にはS字状の結束文（端末結束）が認められるが、原体の撚糸が細く、文様が極小のため図示し得ない。内面は横位のヘラミガキ後、赤彩が施されている。

5は高坏の坏部である。半球状の坏部を持つタイプで、端部を摘んで横位にナデすることで、内面に稜がつくられている。外面は下部に縦位のヘラミガキ、上部に横位のヘラミガキ、内面は下部に斜位のヘラミガキ、上部に横位のヘラミガキが施され、両面とも赤彩されている。

6は高坏の脚部である。坏部は剥離し、柄結合の痕跡が確認できる。脚は接合部から大きく外反

する。外面は縦位のハケ後、縦位にヘラミガキが施され、赤彩される。脚部内面は横位のハケが施される。

図示した他に、壺20点、甕32点、高坏2点がそれぞれ細片で出土した。

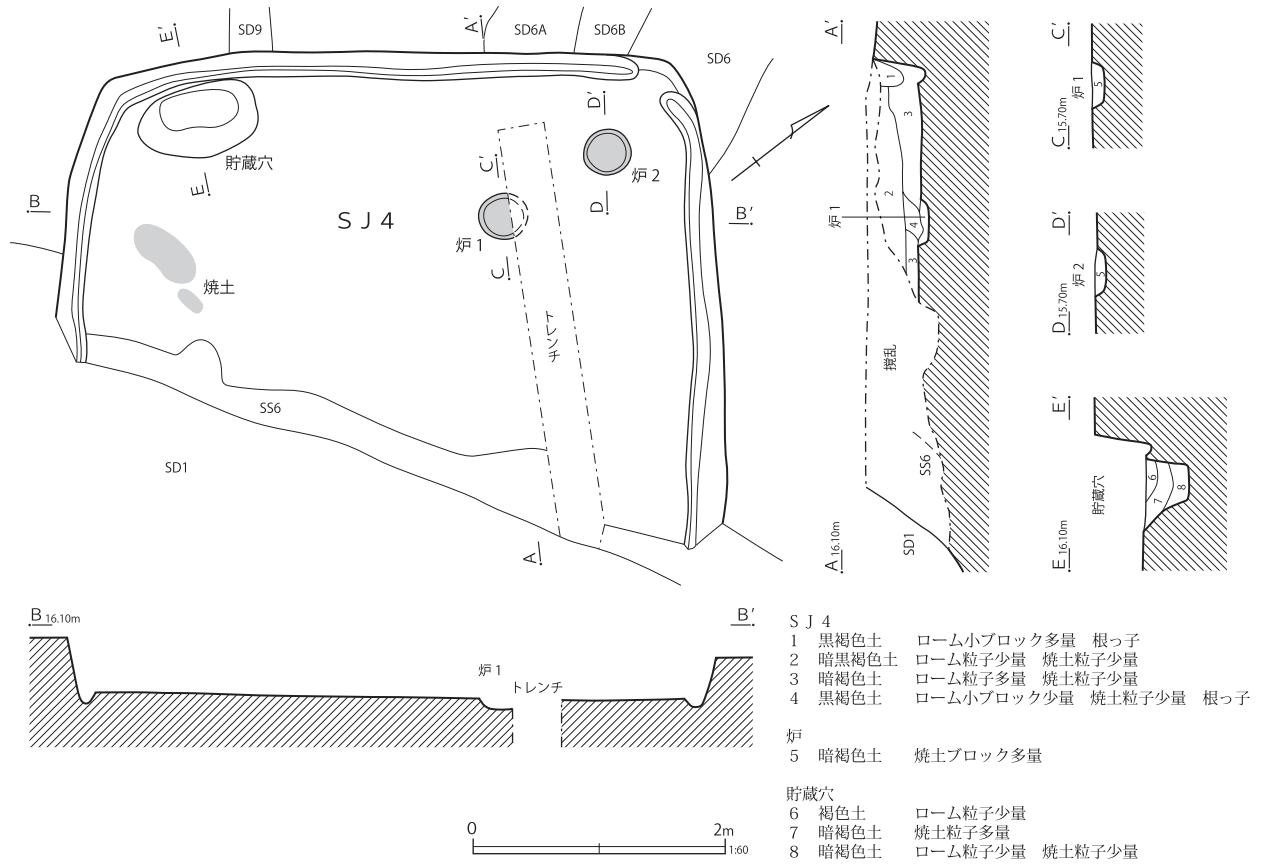
第4号住居跡 (第75図)

調査区中央のG-8グリッドに位置する。確認面では大半が古墳跡の周溝・第1・6・9号溝跡に重複する。第6・9号溝跡による掘削は住居跡の床面に達さず、床面と壁溝の半分以上が残存した。平面形態は方形で、主軸方位はN-53°-Wである。主軸方向の長さは残存長で3.97m、北西側の壁溝から、直交軸方向の長さは5.25m、壁高は0.3~0.4mを測る。覆土全体に焼土粒子が認められ、床面の一部には被熱による焼土化が見られるため、焼失住居の可能性があるが、炭化材等は検出されていない。

柱穴は検出されなかった。

壁溝は幅0.1~0.3m、深さは0.1mを測る。北側のコーナー部で途切れている箇所が見られる。

炉跡は北側2箇所から検出され、いずれも径0.4mの円形である。炉跡1は深さ0.09mを測る。炉跡2は北側コーナー部に位置し、深さ0.08mを測る。いずれも火床面はほぼ床面に近い。



第 75 図 第 4 号住居跡

北西隅に貯蔵穴が確認された。確認面では住居跡の主軸と直交する方向に長軸を持つ橢円形である。下場の形状から、掘削時には方形を意識したと思われる。長軸 0.95 m、幅 0.57 m、深さ 0.35 m を測る。

出土遺物から、時期は古墳時代前期である。

出土遺物を第 76 図に示した。

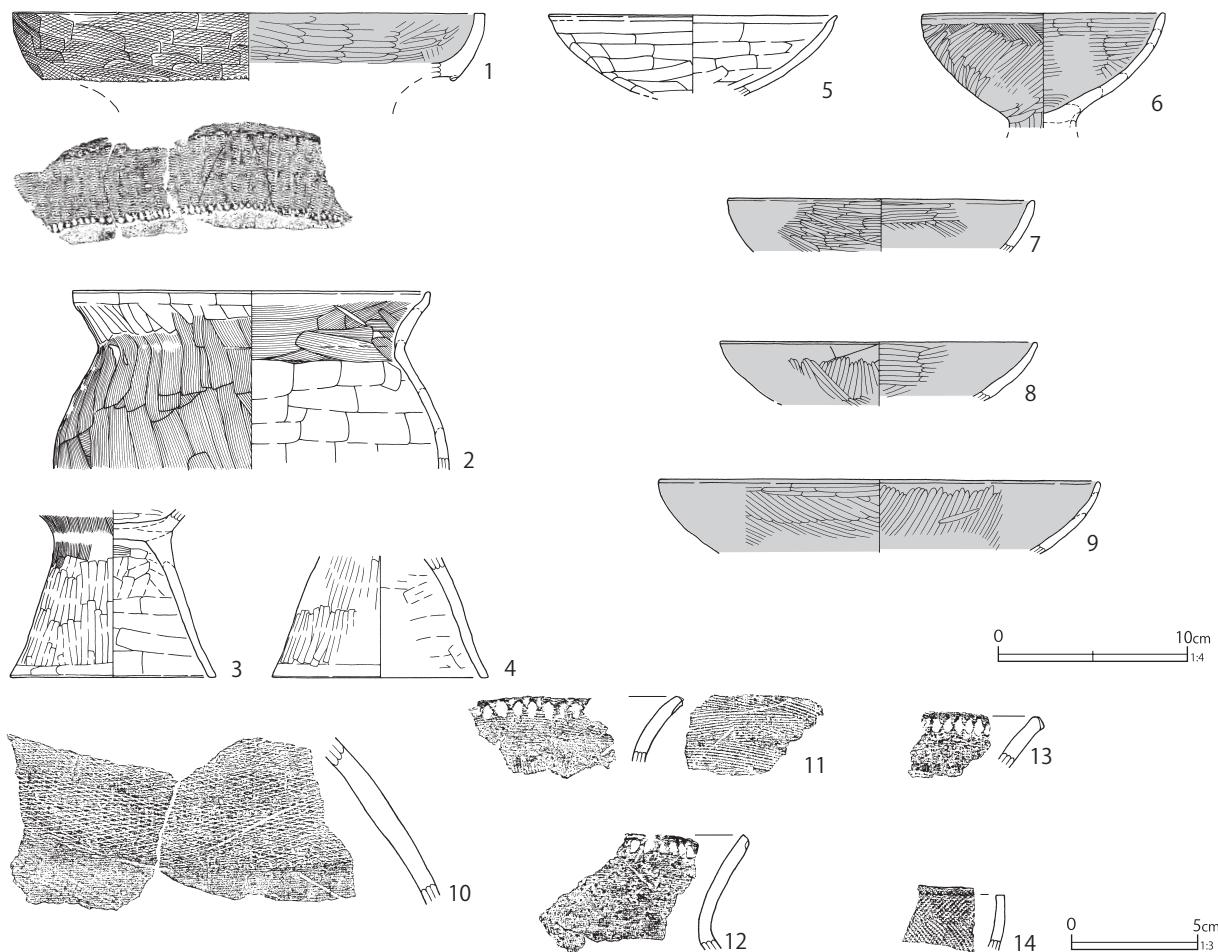
1 は壺の口縁部である。若干内湾気味に開く受口状口縁壺である。口縁部外面には網目状撚糸文を模して櫛状工具による交差文が施される。口縁上端面にも同様の文様が施され、口縁下端には木口状工具による右方向からのキザミが見られる。内面はヘラミガキが横位に施され、赤彩される。図示し得なかつたがキザミ以下の口縁部にも縦位にヘラミガキが施されており、赤彩されている。

2 は甕である。頸部は緩やかに「く」の字状に屈曲し、口縁端部がわずかに立ち上がる。外面は全体に縦位のハケ後、口縁部と胴部の接着面を覆

うように化粧土をかけ、さらにその後、再び縦位のハケが施される。端部は指先でつまむように横位にナデられている。内面は口縁と胴部の接合部を中心に横位のハケが施されており、胴部は横位にナデられている。また口縁部内面には、ハケ後に棒状の工具が触れた痕跡が見られる。

3・4 は台付甕の脚台部である。わずかに外反する。接合部外面に縦位のハケ、脚台部に細いヘラナデが縦位に施される。3 はその後、端部が横位にナデされる。脚台部内面は接合部付近のみハケ、以下は横位のナデである。2 点は同一個体の可能性もあるが、接合しなかつた。

5～9 は高坏の坏部である。坏部は全体的に浅手である。5～7 は口唇部を摘むように横位にナデ、内面に稜がつくられる。6～9 は内外面とも赤彩される。5 は口縁端部がわずかに外反し、内外面ともに横位のナデのみが施される。6 は半球状の坏部を持つタイプである。外面は斜位のハケ



第76図 第4号住居跡出土遺物

第6表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(24.7)	[3.5]	—	AEHIKL	25	普通	灰	内面赤彩	22-8
2	土師器	甕	(18.6)	[9.4]	—	EHIK	30	普通	灰褐	内外面煤付着	22-9
3	土師器	台付甕	—	[8.8]	(10.6)	ADEHIK	30	普通	灰黄褐	脚部外面煤付着	22-10
4	土師器	台付甕	—	[6.1]	(11.4)	AEHIKL	20	普通	にぶい橙	外面煤付着	22-11
5	土師器	高环	(15.0)	[4.2]	—	ADEHIK	20	普通	橙	G-8 内面一部煤付着	22-12
6	土師器	高环	12.6	[6.0]	—	ACHIK	60	普通	浅黄	内外面赤彩 内面煤付着	22-13
7	土師器	高环	(16.0)	[2.8]	—	AEI	10	普通	灰黄褐	貯藏穴 内外面赤彩	22-14
8	土師器	高环	(16.5)	[3.1]	—	AEHIK	10	普通	褐灰	内外面赤彩	22-15
9	土師器	高环	(23.0)	[3.8]	—	ADEH-IK	15	普通	明赤褐	内外面赤彩	22-16
10	土師器	壺	—	[6.6]	—	ACEHIK	5	普通	にぶい黄橙	外面赤彩	23-1
11	土師器	甕	—	[2.5]	—	ACEHIKL	5	普通	にぶい黄橙		23-2
12	土師器	甕	—	[4.5]	—	ACIK	5	良好	灰黄		23-3
13	土師器	甕	—	[2.0]	—	AEHIK	5	普通	黑褐		23-4
14	土師器	鉢	—	[2.2]	—	AEHIK	5	普通	にぶい赤褐	内面赤彩	23-5

後、ハケ目と直交する方向にヘラミガキされる。脚部とは柄結合で、結合部外面に縦位のハケが施される。7の外面は横位、内面は斜位のち横位に、細いヘラミガキが施される。8の外面は斜位のナデ後、縦位～斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキが施される。9は内外面とも斜位にヘラ

ミガキされる。外面はその後、上部が横位にヘラミガキされる。

10は壺の肩部である。外面に網目状撲糸文が1単位約2cm幅で少なくとも4段施文され、文様より下部は横位のヘラミガキ後、赤彩される。施文される網目状撲糸文は、非常に細い無節Rの撲

り糸原体が使用されており、1本の撚り糸の太さは0.5mmに満たない。最下段は水平に施文することを企図して、3段目の一部が横位にナデ消されている。

11～13は甕の口縁部である。緩やかに「く」の字状に開き、外反する。口縁端部には面を持ち、右から木口状工具によるキザミを入れる。11は内面に横位のハケが施される。12・13は内外面とも横位のハケが施され、軽くナデられる。

14は鉢の口縁部である。わずかに内湾する。端部には面を持ち、単節LR縄文が施文される。外面には細かな縄文が4段横羽状に施文されており、1・3・4段目は単節LR、2段目は単節RLである。内面は横位のヘラミガキ後、赤彩される。口径が推定できず、鉢としたが、高坏の可能性もある。

図示した他に、壺2点、甕1点、高坏1点が、それぞれ細片で出土した。

第5号住居跡（第77図）

調査区南東隅のI・J-12グリッドに位置する。重複する第11号住居跡や第35・41号土壙に後続する。平面形態は方形で、カマドを北壁に設置する。主軸方位はN-26°-W、主軸方向の長さ6.0m、直交軸方向の長さ4.63m、壁高は0.3mを測る。床面には、ローム質粒子を多く含み、しまりの強い暗褐色土を薄く敷いて踏み固めた貼床が施される。覆土の堆積は壁際から順に自然堆積した様相を示す。

ピットは4基検出された。すべて主柱穴である。P3・4については土層断面から、住居廃絶時にも柱根は残っていたと思われるが、P2には同様の堆積は認められず、廃絶時に柱が抜き取られた可能性がある。

壁溝はカマドと南壁中央を除いた範囲に検出された。幅は0.15～0.3m、深さは0.1mを測る。カマドと対峙する。壁溝が途切れた南壁中央攪乱内には、出入口施設が設けられたと思われる。

カマドは北壁の中央に構築されていた。燃焼部が検出され、煙道部は削平されている。燃焼部は先端が壁外に張り出している。カマドは長さ1.3m、袖部を含む幅1.4m、内幅0.75mを測る。底面は、焚口部で床面から約5cm下がり、中央やや手前からさらに約5cm下がる。袖部は掘り残した地山を芯に、灰白色粘土（第26層）が覆っている。この灰白色粘土を多量に含む第26層土を用いて、カマドが構築されたと思われる。また、同様の粘土塊がカマド左袖南から検出されている。これはカマド構築（ないし修復）材、もしくは出土した土玉の原料と考えられる。カマドは崩落しており、内部には被熱による焼土化があまり見られないが、左袖内面の一部に焼土が見られた。覆土中の第21・22層が崩落した天井部と考えられる。第23層は火床面直上に堆積した焼土層であろう。また燃焼部西側の火床面からは、土玉が31点まとまって出土した。

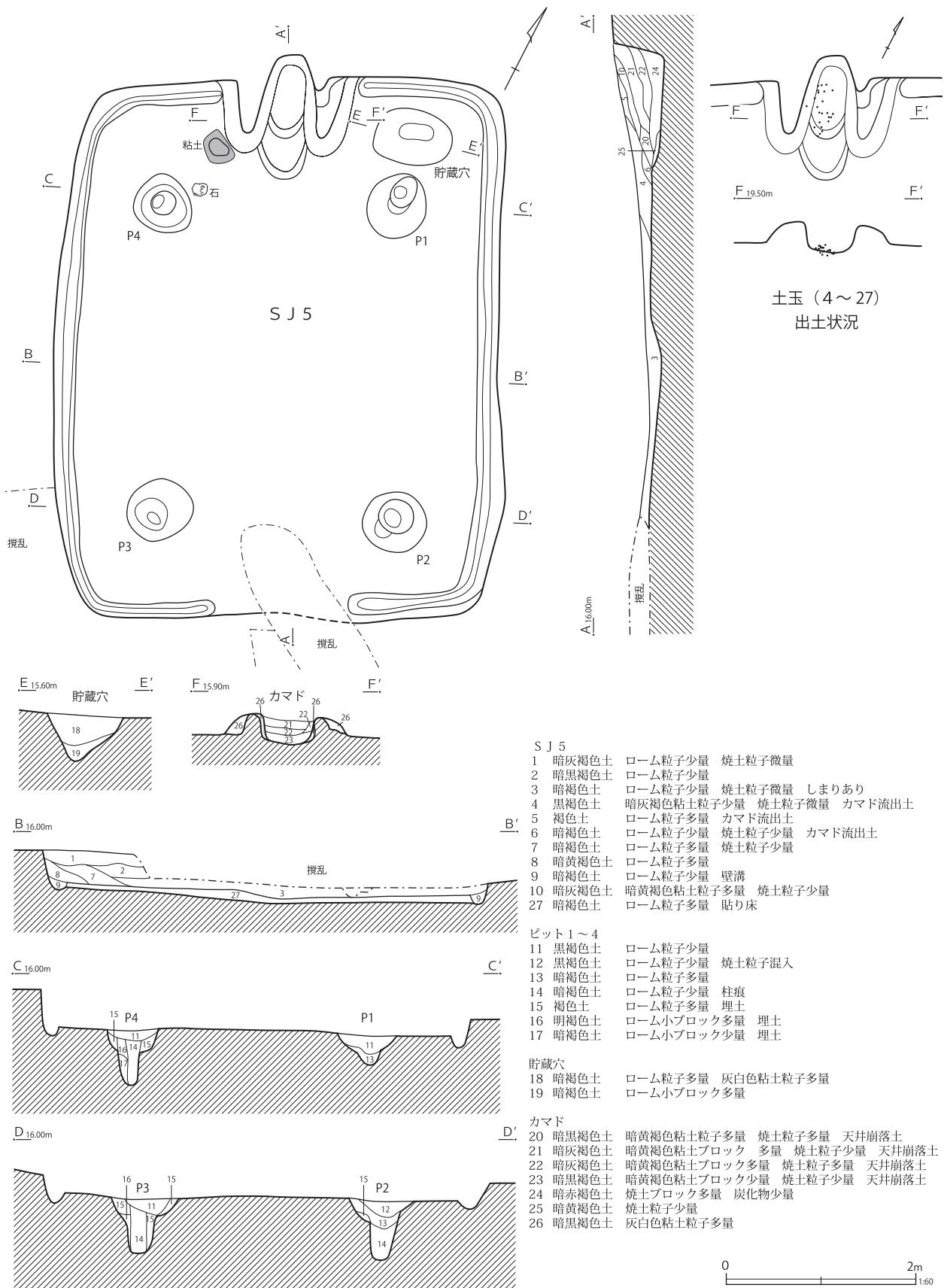
カマド右脇の、住居跡北側隅に貯蔵穴が1基検出された。東西方向に長軸を持つ隅丸方形である。長軸0.8m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。

時期は出土遺物から、古墳時代後期と思われる。出土遺物を第78図に示した。

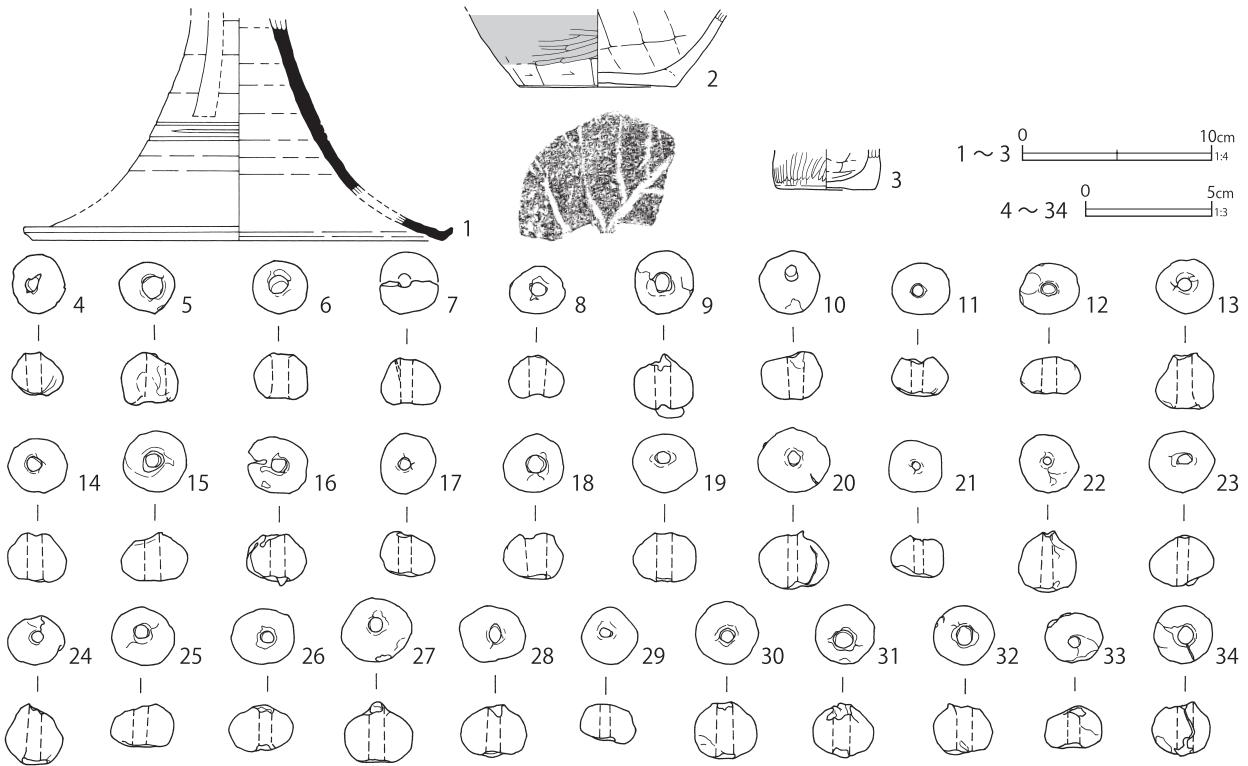
1は須恵器の、長脚の高坏の脚部と思われる。透かしは少なくとも1段、また三方透かしと推定されるが、孔の大きさは不明である。透かしの直下には3条の沈線が見られ、2条目の沈線は途中で途切れている。2片は接合しないが、胎土および器形から同一個体と判断し、図示した。南比企産である。

2は壺の底部である。外面は横位のナデ後に横位～斜位にヘラミガキされ、底面から1cmほどを残して赤彩される。内面には斜位のナデが施される。底部には木葉痕が認められる。

3はミニチュア土器の底部である。底部からやや膨らんで立ち上がる。外面に縦位のヘラミガキ、内面に横位のナデが施される。



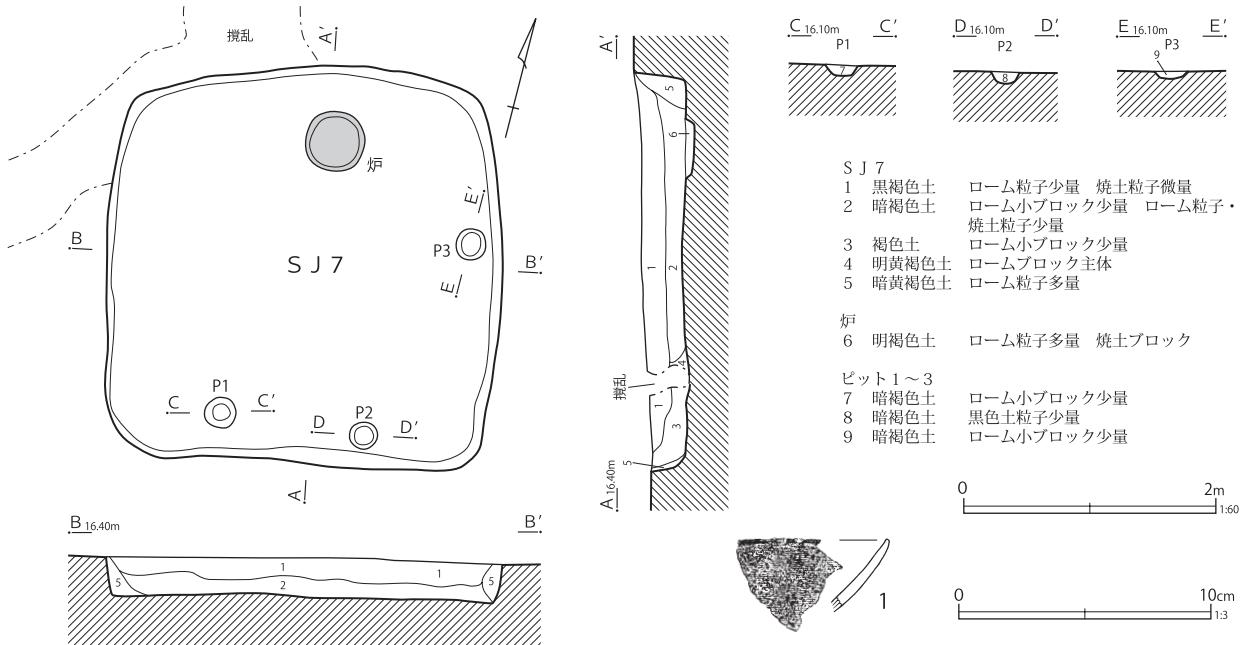
第 77 図 第 5 号住居跡



第78図 第5号住居跡出土遺物

第7表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第78図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高壺	—	[11.6]	(21.4)	ADIK	5	良好	暗青灰	内面降灰付着	23-8
2	土師器	壺	—	[4.0]	(8.0)	ACEHIK	25	普通	明褐	外側赤彩	23-6
3	土師器	ミニチュア土器	—	[2.1]	(5.0)	ACEHIK	40	普通	にぶい黄橙		23-7
番号	種別	器種	最大径/cm	最大高/cm	孔径/cm	残存	重さ/g		備考		図版
4	土製品	土玉	2.0×2.3	1.7	0.5~0.6	100	5.6				23-9
5	土製品	土玉	2.0×2.2	2.0	0.8×0.9	100	5.7				23-9
6	土製品	土玉	—	2.1	1.8	0.8	100	5.0			23-9
7	土製品	土玉	(2.3)×2.3	1.8	0.5	50	4.0				23-9
8	土製品	土玉	1.9×2.2	1.7	0.6	100	4.3				23-9
9	土製品	土玉	2.3×2.4	2.5	0.6	100	8.1				23-9
10	土製品	土玉	2.4×2.5	1.9	0.6	100	7.7				23-9
11	土製品	土玉	2.0×2.3	1.5	0.5	100	4.9				23-9
12	土製品	土玉	2.1×2.3	1.4	0.6	100	6.0				23-9
13	土製品	土玉	2.1×2.2	2.1	0.5	100	6.2				23-9
14	土製品	土玉	2.1×2.3	1.9	0.6	100	6.5				23-9
15	土製品	土玉	2.3×2.4	1.9	0.5	100	8.7				23-9
16	土製品	土玉	2.2×2.3	2.0	0.5	90	7.1				23-9
17	土製品	土玉	2.1×2.3	1.7	0.4	100	6.3				23-9
18	土製品	土玉	2.3×2.4	1.8	0.7	100	6.4				23-9
19	土製品	土玉	2.2×2.5	1.9	0.6	100	8.2				23-9
20	土製品	土玉	2.4×2.7	2.1	0.6	100	11.1				23-9
21	土製品	土玉	2.0×2.1	1.6	0.4	100	5.8				23-9
22	土製品	土玉	2.1×2.2	2.4	0.5	90	8.1				23-9
23	土製品	土玉	2.4×2.5	1.9	0.6	100	8.3				23-9
24	土製品	土玉	1.9×2.2	2.4	0.6	100	5.9				23-9
25	土製品	土玉	2.3×2.4	1.7	0.6	100	7.4				23-9
26	土製品	土玉	2.1×2.4	1.8	0.5	100	7.8				23-9
27	土製品	土玉	2.5×2.7	2.3	0.6	100	10.8				23-9
28	土製品	土玉	2.1×2.5	1.9	0.5	100	8.5				23-9
29	土製品	土玉	2.1×2.2	1.4	0.5	100	5.7				23-9
30	土製品	土玉	2.4	2.2	0.6	100	9.0				23-9
31	土製品	土玉	—	2.1	0.7	100	6.7				23-9
32	土製品	土玉	2.3	1.9	0.6	100	7.1				23-9
33	土製品	土玉	1.9×2.1	1.6	0.5	100	5.5				23-9
34	土製品	土玉	—	2.3	0.7	90	7.1				23-9



第79図 第7号住居跡・出土遺物

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第79図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	—	[2.8]	—	ACEHIK	5	普通	橙	P2	23-10

4～34は土玉である。31点すべてがカマド内から出土した。土玉は不定形な球形で、焼成前に棒状工具によって下部から上部へ穿孔されている。5の下孔部には段がつき、結縄等との密着を想定させる。7は半部を欠損する漁網の錘、あるいはカマド祭祀に伴う可能性等が考えられる。また、土玉がカマドで一括焼成されたと考えれば、カマド南西の粘土塊は土玉の原料としても捉えられる。

図示した他に、壺20点、甕8点がそれぞれ細片で出土した。またカマド内からも甕の胴部片2点が細片で出土した。

第7号住居跡 (第79図)

調査区北東のG-10・11グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は方形で、南側を出入り口とすれば主軸方位はN-11°-Wである。主軸方向の長さは3.16m、直交軸方向の長さは3.14m、壁高は0.4mを測る。覆土は、壁際以外は平坦な堆積で、壁の崩落以降は自然に堆積した様相を示す。

ピットは3基検出され、主柱穴と思われるもの

はない。P1・2は炉跡の対面である南壁の中央に位置しており、入口施設の可能性がある。

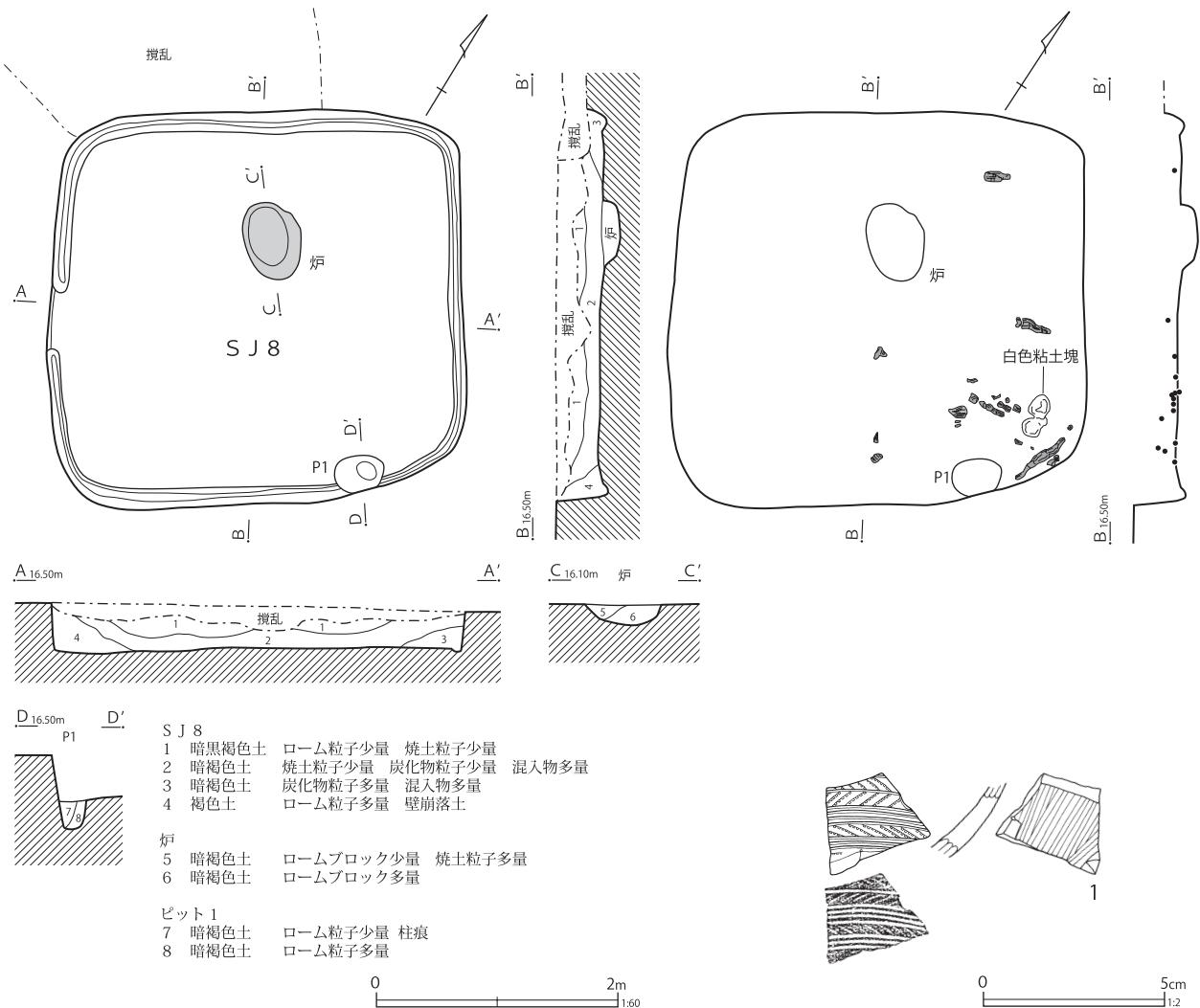
炉跡は北側の壁寄りに検出された。径0.46mの円形である。火床面は床面に近く、掘り方は深さ0.09mを測る。

出土遺物から、時期は古墳時代前期と思われる。図示し得る遺物は僅少であるが、高坏の口縁部が出土している。内外面とも横位のナデが施される。外面はナデ後に縦位にヘラミガキされる。

図示した他には、壺の胴部細片14点、甕の胴部細片9点と、炉跡から台付甕の胴部片が1点出土した。外面は縦位のハケ、内面は横位のナデが施される。

第8号住居跡 (第80図)

調査区北東のF・G-10グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は方形で、炉の位置から主軸方位はN-29°-Wである。主軸方向の長さは3.3m、直交軸方向の長さは3.42m、壁高は0.3mを測る。床面には、東側隅を中心にして15点の炭化材と白化した粘土塊が検出された



第80図 第8号住居跡・出土遺物

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第80図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	—	[2.3]	—	CEIK	5	良好	橙	パレス文	23-11

(第80図)。覆土の堆積は、壁面の崩落を示しており、比較的上層まで焼土が含まれるため、焼失に伴う住居の廃絶を示す可能性がある。

ピットは東壁際から検出された。柱痕に似た堆積を示すが、対応する柱穴は検出されていない。

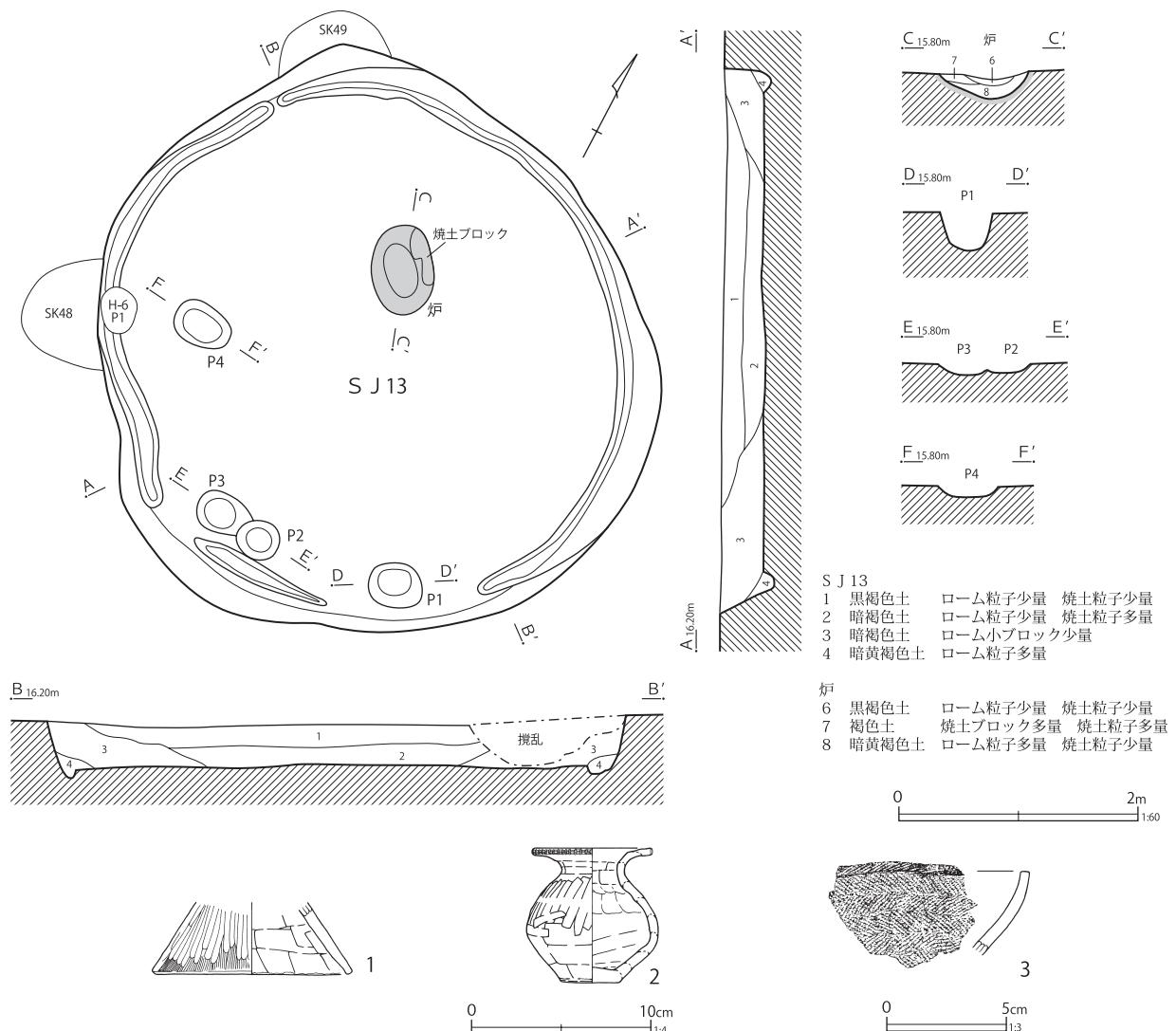
壁溝は南西側壁面の中央を除いた範囲に検出された。幅は0.08～0.2m、深さは0.01～0.05mを測る。南西壁中央に出入口施設が設けられたと思われる。

炉跡はやや北西寄りに検出された。主軸方位に長軸を持つ橢円形である。長軸0.65m、幅0.48m、

深さ0.18mを測る。火床面は第5層下面と思われる。

出土遺物から、時代は古墳時代前期と思われる。

図示し得る遺物は僅少であるが、高坏の坏部片が出土している。外面にはパレス文様が施文されている。(1) + 1 + 4 + 3本の沈線が横位に施され、その間に貝殻の端部を押し付けて列点文状にした文様が充填される。貝殻はサルボウやアカガイ等、小さく放射肋の細かなものを使用していると思われ、貝殻文は上下で互い違いになるよう向きを変えられている。内面は斜位～縦位の細いヘラミガキが左方向に施されている。



第81図 第13号住居跡・出土遺物

第10表 第13号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	—	[4.0]	(10, 5)	ACEHIJ	15	普通	にぶい黄褐		23-12
2	土師器	ミニチュア土器	(6.3)	7.4	3.2	AEHJK	80	普通	赤褐		24-1
3	土師器	壺	—	[3.5]	—	ACEHIKL	10	普通	にぶい褐	外面胴部一部煤付着 内面赤彩	24-2

図示した他に、甕の胴部9点、壺の胴部3点、高杯の脚部1点がそれぞれ細片で出土した。

第13号住居跡（第81図）

調査区西側のH-6・7グリッドに位置する。縄文時代の第48・49号土壙と重複する。平面形態は不整円形で、主軸方位はN-27°-Wである。主軸方向、直交軸方向ともに長さ4.8m、壁高は0.4mを測る。住居内の覆土は壁際から順に自然堆積している様子が観察できた。

ピットは4基検出された。P1以外は非常に浅

い。P1・3の周辺では壁溝が途切れ、出入口施設に伴うピットの可能性がある。

壁溝は南側の一部を除いた範囲で検出された。幅は0.21~0.36m、深さは0.07~0.1mを測る。

炉跡は中央やや北西寄りに検出された。長軸を北西-南東方位に持つ不整円形である。長軸0.73m、幅0.5m、深さ0.22mを測る。火床面は第7層下面、掘り方は第8層下面である。

出土遺物から、時期は古墳時代前期と思われる。出土遺物を第81図に示した。

1は台付甕の脚台部である。外面は縦位のハケ後、縦位にヘラミガキされる。内面は横位のナデである。製作時に接地状態であったためか、内面底部に微細な突起（バリ）が認められる。

2はミニチュア土器の壺である。外面は横位のナデ後、肩部から胴部最大径付近まで細く丁寧にヘラナデされる。口縁は強く外反し、端部には木口状工具で左方向からキザミが施される。内面は斜位のナデ後、肩～頸部付近に指オサエされる。

3は小型壺の口縁部である。やや内湾しながら立ち上がり、端部に平坦な面を持つ。外面には少なくとも5段にわたり、細かな縄文が横羽状に施文されている。1・3・4段目は単節RL、2・5段目は単節LRである。口唇端部にも単節LR縄文が施文される。内面は横位にヘラミガキが施され、赤彩される。口径は推定できないが、類似個体の第74図4よりも大振りである。なお、器種は小型壺としたが、高坏の可能性もある。

図示した他に、壺の胴部4点、小型壺の口縁部3点、台付甕の口縁部1点、胴部20点、脚台部1点、高坏の坏部2点、脚部7点が、それぞれ細片で出土した。

第14号住居跡（第82図）

調査区西側のG-6グリッドに位置する。他遺構との重複はない。平面形態は方形で、南側に入り口とすれば、主軸方位はN-41°-Eである。主軸方向の長さは5.65m、直交軸方向の長さは5.05m、壁高は0.68mを測る。主に西側の床面には、ローム質土ブロックを多量に含む暗褐色土（第6層）が薄く敷かれた貼床が施される。覆土の堆積は壁面の崩落を示す。その後、焼土・炭化物を含む層が堆積することから、火災後の埋め戻し等の可能性がある。

ピットは6基が検出され、うちP1～4は主柱穴と考えられる。

炉跡は住居跡の中央北東寄りに検出された。主軸方向に長軸を持つ橢円形である。長軸0.57m、

幅0.42m、深さは0.15mを測る。火床面は第10層下面であり、全面的に被熱している。

土壙が1基検出された。東西に長軸を持つ方形で、長軸0.7m、幅0.63m、深さ0.17mを測る。

出土遺物から、時代は古墳時代前期と思われる。出土遺物を第82図に示した。

1は甕の口縁部である。口縁は軽く外反する。端部に面を持たせるために、摘むようにナデられた結果、端部内面はわずかに上向いている。端部の面には、木口状工具によって左方向からキザミが施されている。外面は縦位のハケ後、口縁部に横位のナデが施される。また内面は斜位～横位のハケ後、口縁部に横位のハケが施される。

2は高坏の坏部である。端部には面を持つ。内外面とも、縦位ヘラミガキの後に口縁部に横位ヘラミガキを施す。内外面とも赤彩される。

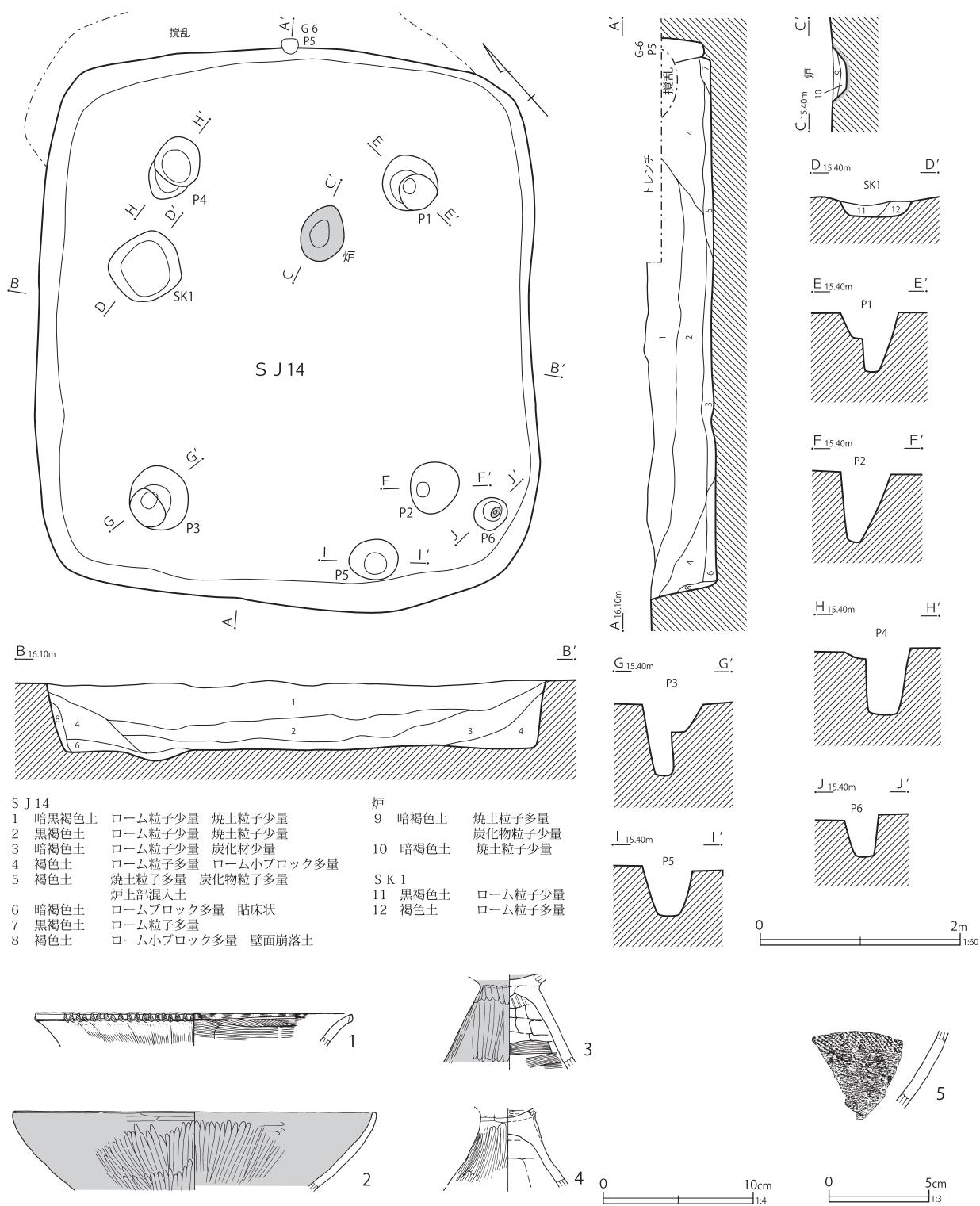
3・4は高坏の脚部である。3は坏部とは柄結合で、脚部はやや膨らみながら広がる。坏部は内外面とも赤彩される。脚部外面は縦位のヘラミガキ後、赤彩が施される。脚部内面は横位のナデ後、下半部に横位のハケが施される。4の坏部との結合は柄結合でなく、器台の技法（柿沼 1989）による。脚部は山裾状に広がる。脚部の外面は縦位に細いヘラミガキが施されている。内面は横位のち縦位のナデである。

5は高坏の坏部片である。内外面とも赤彩されるが、外面は上部に単節RL縄文が施文され、文様以下のみ赤彩される。

図示した他に、壺の胴部16点、底部2点、甕の口縁部1点、胴部15点、高坏3点がそれぞれ細片で出土した。壺の胴部はすべて外面赤彩されていたが、内面が煤けたものが散見された。

第15号住居跡（第83図）

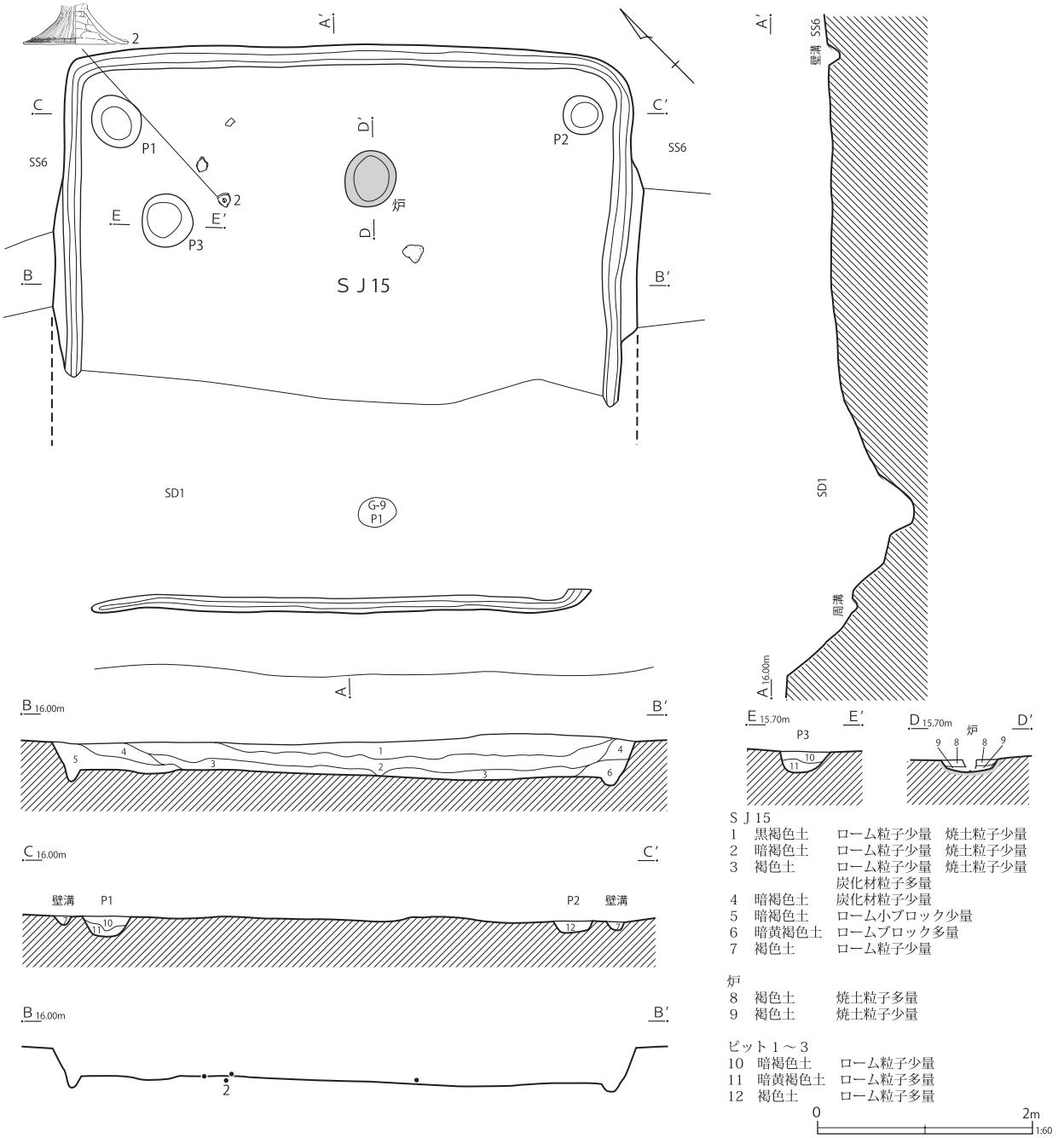
調査区中央のG-H-9グリッドに位置する。確認面では、第15号住居跡の大半が古墳跡の周溝及び第1号溝跡と重複していた。しかし、周溝の掘削は住居跡の床面まで達しておらず、南西側の壁



第82図 第14号住居跡・出土遺物

第11表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(20.7)	[2.2]	—	AEHIK	15	普通	暗褐	内外面煤付着	24-3
2	土師器	高坏	(23.8)	[5.2]	—	ADEHIK	15	普通	にぶい褐	内外面赤彩	24-4
3	土師器	高坏	—	[6.3]	—	AEHIK	90	普通	にぶい黄褐	坏部内面赤彩 脚部外面赤彩	24-5
4	土師器	高坏	—	[5.3]	—	ACEHIK	60	普通	にぶい黄褐		24-6
5	土師器	高坏	—	[3.8]	—	AEHIK	5	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	24-7



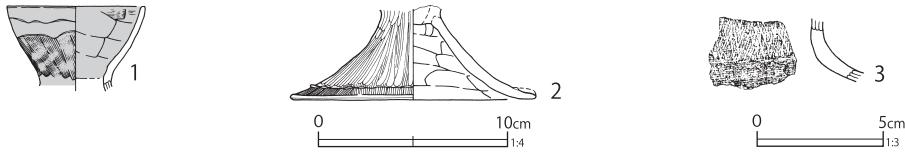
第83図 第15号住居跡

溝は第1号溝跡の掘削を免れたため、床面と壁溝の半分以上が残存した。立ち上がりは、北西側・南東側に残存する。平面形態は方形で、炉の位置から南側を取り囲むとすれば、主軸方位はN-44°-Eである。推定される主軸方向の長さは約5.4m、直交軸方向の長さは5.44m、壁高は0.4mを測る。覆土は壁際から順に自然堆積する様相を示すが、上層は焼土粒子や炭化物を含有し、火災等に被災した後の埋め戻しの可能性も考えられる。

ピットは3基が検出され、このうちP1・2は主柱穴の可能性がある。

壁溝は残存した壁に沿って検出された。幅は 0.15 ~ 0.21 m、深さは 0.07 ~ 0.12 m である。

炉跡は住居跡の中央北東寄りに検出された。主軸方向に長軸を持つ楕円形である。長軸 0.53 m、幅 0.46 m、火床面までの深さ 0.06 m、掘り方までは深さ 0.12 m を測る。炉跡の周辺には硬化面が見られた。



第84図 第15号住居跡出土遺物

第12表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(7.0)	[4.5]	—	HICK	40	普通	にぶい褐	内外面赤彩	24-8
2	土師器	高壺	—	[5.0]	(12.8)	AHICK	80	普通	赤褐	No. 3 内外面一部煤付着	24-9
3	土師器	壺	—	[2.4]	—	AEHICK	5	普通	にぶい黄橙	外面赤彩	24-10

出土遺物から、時代は古墳時代前期と思われる。

出土遺物を第84図に示した。

1は小型壺の口縁部である。頸部から緩やかに膨らむように口縁が立ち上がる。瓢形壺である。口縁端部に面を持つ。口縁外面には輪積み痕が少なくとも1段残されている。外面は口縁から頸部にかけて縦位のハケ後、赤彩される。内面は横位ナデ後、屈曲部まで赤彩される。

2は高壺の脚部である。柄結合の接合部から裾状に開く。端部には貼付文があったと思われるが、剥離痕だけが残存している。外面は縦位のハケ後、細いヘラミガキが縦位に施される。端部の貼付はハケの後、ヘラミガキの前に行われる。内面は横位のナデで、底面に近づくほど丁寧である。

3は壺の頸部である。縦位に網目状撲糸文が施される。撲糸は無節L、太さ0.5mm前後の細いもので、約1.5cmで段を改めている。施文後、下部に横位のナデを施して文様の水平を整え、縦位のヘラミガキを施し、施文部分以外を赤彩する。

図示した他に、壺の胴部片6点、小型壺の肩部片2点、甕の胴部片4点、高壺の口縁部片1点が、それぞれ細片で出土した。

第17号住居跡 (第85図)

調査区西部のI・J-7グリッドに位置する。重複する第11号溝跡に先行する。平面形態は方形で、炉の位置から主軸方位はN-42°-Eである。主軸方向の長さは6.45m、直交軸方向の長さは5.72m、壁高は0.31mを測る。東側隅には約10cmのL字状の高まりが見られた。覆土は

壁際から順に自然堆積する様相を示すが、炉跡の周辺のみは粘土を含む第5層が薄く堆積しており、住居廃絶時に炉跡を埋め戻した可能性がある。

ピットは5基検出され、うちP2・3・4は支柱穴である。近接するP1・5は支柱穴ないし建て替えの可能性を示唆する。

炉跡は北東寄りに検出された。主軸方向に長軸を持つ楕円形である。長軸0.55m、幅0.45m、深さは0.09mを測る。火床面は第7層下面である。

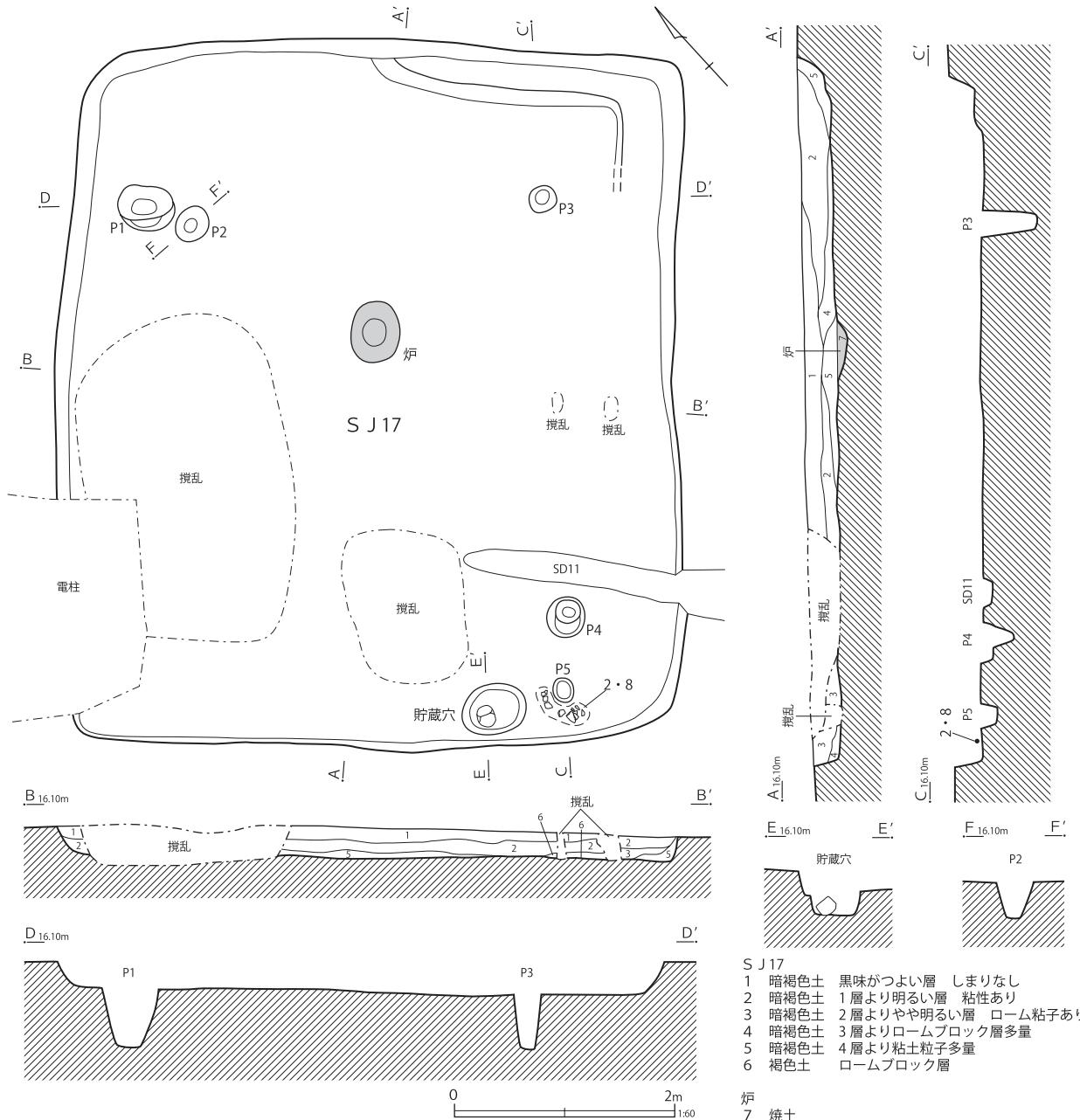
貯蔵穴は、南西壁中央からやや南東側にずれた壁際に検出された。直交軸方向に長軸を持つ楕円形である。長軸0.58m、幅0.45m、深さ0.25mを測る。貯蔵穴底面からは礫が1点検出された。

出土遺物から、時代は古墳時代前期である。

出土遺物を第86図に示した。

1は甕の口縁部である。端部は棒状工具によるキザミが左方向から施された影響で、わずかに上向いている。外面は縦位のハケ調整後、調整痕を消すように横位にナデが施される。内面は胴部との接合部分を中心に斜位～横位のハケ目が認められ、その後、横位にヘラミガキが施される。

2は台付甕の胴部である。1よりも小振りである。外面頸部は縦位、胴部は横位～斜位、脚台部付近では再び縦位にハケが施される。組み合わせ成形による接合痕を消すためと思われる。また、胴部下半に指頭痕が散見され、脚台部付近のハケ目が胴部調整後に見られるることは、脚台部の接合を複数回試みた証左であろう。出土位置から8と同一個体の可能性があるが、接合しなかった。



第 85 図 第 17 号住居跡

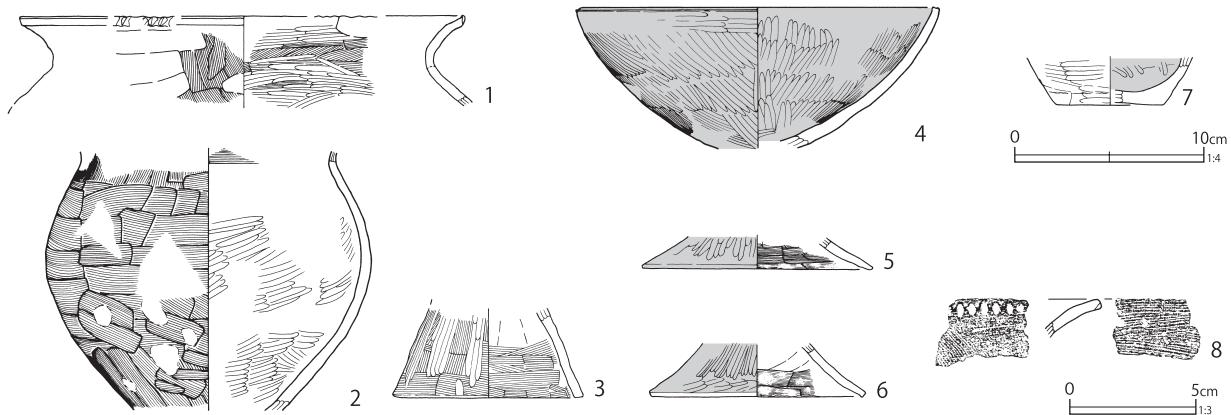
3 は台付甕の脚台部である。胎土が異なるため 1・2 とは別個体と思われる。外面は、縦位のハケ後、端部に横位のハケが施される。その後、4 ~ 5 回 1 単位となる縦位のヘラミガキが約 1 cm の間隔を空けながら施される。内面は縦位のナデ後、下半部に横位のハケが施される。内面端部にはわずかに面取りの痕が見られる。

4 は高坏の坏部である。端部を摘んで成形したため、わずかに皺が寄っている。外面は縦位に 3 段ヘラミガキされ、口縁部のみ横位にヘラミガキ

される。内面は風化しているが、縦位に 4 段ヘラミガキされる。内外面赤彩される。

5・6 は高坏の脚部である。外面に縦位のヘラミガキ後、赤彩が施される。5 は内面に横位のハケが施される。6 はヘラミガキ後、端部に斜位のヘラミガキが施される。内面は斜位のナデ後、下半部に横位のハケが施される。

7 は鉢の底部である。外面は斜位のナデ後、横位のヘラミガキ。内面は風化しているが、斜位のヘラミガキが施されている。内外面赤彩される。



第86図 第17号住居跡出土遺物

第13表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(23.2)	[4.8]	—	AEHKL	5	普通	にぶい黄褐	外面煤付着	24-11
2	土師器	台付甕	—	[3.6]	—	AEBHI	65	良好	にぶい黄褐	No. 2	24-12
3	土師器	台付甕	—	[4.7]	(10.0)	AEHIK	30	普通	明赤褐	下端部内外面煤 全体二次被熱	24-13
4	土師器	高壺	(19.6)	[7.4]	—	EHIK	50	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	24-14
5	土師器	高壺	—	[1.6]	(12.1)	CEHIKL	15	普通	橙	外面赤彩	24-15
6	土師器	高壺	—	[2.8]	(11.0)	EHIK	15	普通	にぶい黄褐	外面赤彩	24-16
7	土師器	鉢	—	[2.5]	(5.6)	ACHI	20	普通	にぶい黄褐	内面赤彩	24-17
8	土師器	甕	—	[1.5]	—	ACDHI	5	普通	にぶい褐	No. 2 内外面煤付着	24-18

8は甕の口縁部である。端部に木口状工具によるキザミが左方向から施される。外面は縦位のハケ、内面は横位のハケである。

図示した他に、壺胴部9点、甕胴部5点、高壺部8点が、それぞれ細片で出土した。

第19号住居跡 (第87図)

調査区南側のK・L-8・9グリッドに位置する。縄文時代の第3号住居跡と重複している。当初は溝跡と考えたが、第3号住居跡覆土から古墳時代の土器が出土したことから、住居跡の南西側の壁溝と判断し、同時代の第2号住居跡を参考に、住居跡の規模を推定した。平面形態は方形と思われ、南西壁の方位はN-47°-Wである。一辺の長さは4.8mと推定される。

壁溝は南西壁の中央付近で途切れる。幅0.16~0.21m、深さ0.05~0.08cmを測る。

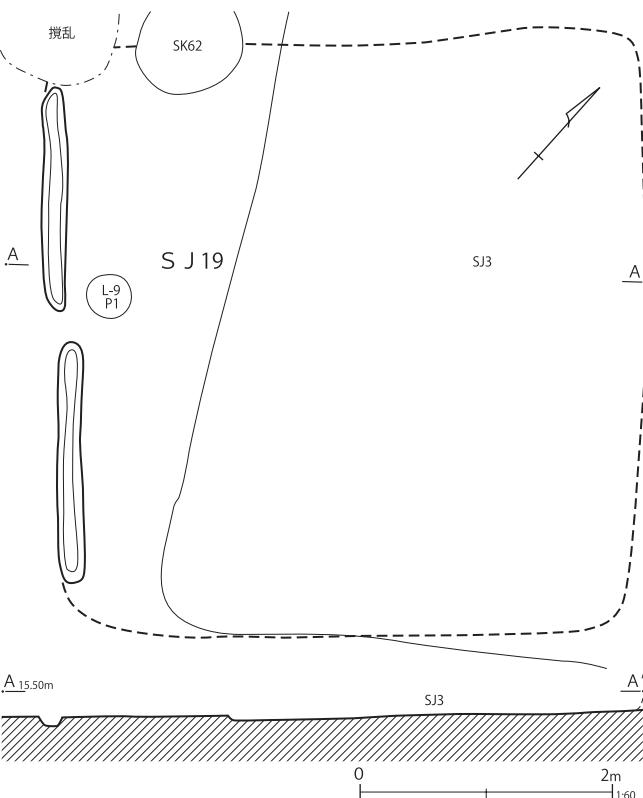
出土遺物から、時代は古墳時代前期と思われる。

出土遺物を第88図に示した。

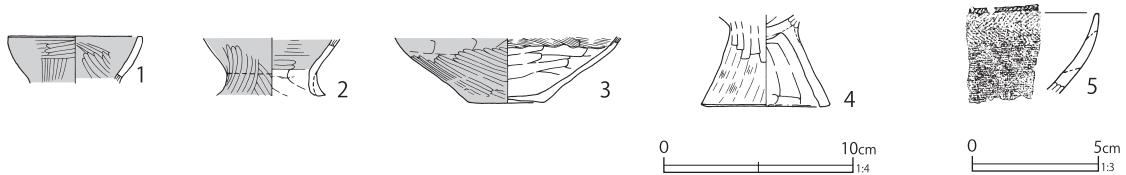
1は小型壺の口縁部である。やや膨らみながら立ち上がる。成形時に端部を強く揃んだため、上面に皺状の溝が生じている。外面は縦位のハケ後、斜位にナデが施され、のち頸部は縦位に、口縁部

は横位にヘラミガキされる。内面は斜位のヘラミガキが施される。内外面とも赤彩される。

2は小型壺の頸部である。緩やかに外反する。外面は斜位のヘラミガキ後、赤彩される。内面は



第87図 第19号住居跡



第 88 図 第 19 号住居跡出土遺物

第 14 表 第 19 号住居跡出土遺物観察表 (第 88 図)

番号	種別	器種	口径 / cm	器高 / cm	底径 / cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(6.8)	[2.4]	—	ACEHIK	15	普通	にぶい褐	内外面赤彩	25-1
2	土師器	小型壺	—	[3.0]	—	ACEHIK15	15	普通	黄褐		25-1
3	土師器	壺	—	[3.4]	(4.0)	ADEHIK	30	普通	にぶい黄橙	対面赤彩	25-1
4	土師器	台付甕	—	[4.8]	(6.7)	AEHIKL	65	普通	赤褐	外面煤付着	25-1
5	土師器	小型壺	—	[3.1]	—	ACEHIK	5	普通	橙	内外面赤彩	25-1

屈曲部に斜位のナデ後、上半部が横位にヘラミガキされ、屈曲部まで赤彩される。

3は壺の底部である。外面は横位のナデ後、斜位にヘラミガキされる。煤や器面の劣化で不明瞭であるが、赤彩されている。内面は横位～斜位のハケ後、化粧土をかけ、横位にナデが施される。

4は台付甕の脚台部である。胴部とは柄結合している。外面は縦位のハケ後、化粧土を施し、ナデつけられる。その後胴部との接合部分を中心に細い工具によるヘラナデが施される。内面は縦位のナデ後、下端部が横位にナデされる。製作時に接地状態であったためか、内面底部に微細な突起(バリ)が認められる。端部は面取りされている。胴部内面はヘラナデされている。

5は小型壺の口縁部と思われる。器厚は薄く、高壊の可能性もある。外面口縁部に横羽状に縄文が施文されている。1段目は単節LR、2段目は単節RLである。2段目以下は器面の摩耗が著しく文様の有無は不明であるが、一部に赤彩が見られる。端部上面にも単節RL縄文が施文されている。内面は横位のヘラミガキ後、赤彩される。

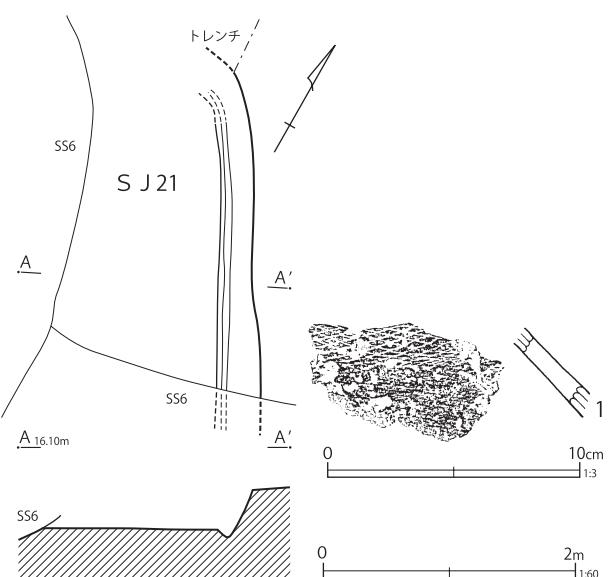
第 21 号住居跡 (第 89 図)

調査区中央の I - 9 グリッドに位置する。第 21 号住居跡は、大半が古墳跡の周溝および前庭部と重複していたため、検出されたのは住居跡北

側の、床面と壁溝の一部のみである。形態は方形、北東壁の方位は N - 30° - W と思われる。規模は不明であるが、長軸 2.5 m、短軸 1.6 m の範囲が残存した。覆土の堆積状況等も不明である。壁溝は北東壁に沿って検出された。幅 0.26 ~ 0.35 m、深さは 0.07 m を測る。

出土遺物から、時期は古墳時代前期と思われる。

図示した遺物は、壺の肩部である。網目状撚糸文が横位に施され、その下は赤彩される。施文されている網目状撚糸文は、非常に細い無節 R の原体が使用されており、1本の撚り糸の太さは 0.5 mm に満たない。



第 89 図 第 21 号住居跡・出土遺物

第 15 表 第 21 号住居跡出土遺物観察表 (第 89 図)

番号	種別	器種	口径 / cm	器高 / cm	底径 / cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[2.7]	—	ACHIK	5	普通	橙	外面赤彩	25-1

(2) 古墳跡 (第 90 ~ 97 図)

古墳跡は、『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』の中で、桶川市川田谷 556 所在の樋詰^{ひのつめ}6 号墳と名称が付されている（埼玉県教育委員会 1994）。地元では以前から横穴式石室の所在は知られていたが、墳形や規模は不明であると記されている。

川田谷古墳群の中では、最も南に位置する樋詰支群に含まれ、江川と荒川の合流点からやや内陸に入った場所にあたる。周辺には前期古墳として著名な熊野神社古墳が、直線距離にして約 500 m 南西に所在するほか、円筒埴輪を出土した樋詰 8 号墳が南西約 200 m に隣接している。

古墳の周囲は、調査前に宅地の一部として既に墳丘が削平されており、古墳として認識できる状態になかった。無論、石室も大半が破壊され、その所在すら確認できなかった。

位置・周溝

調査区中央の G ~ I - 7 ~ 10 グリッドに位置する。江川の谷を南に望む台地縁辺部に立地し、標高 16 m 前後である。南に開口する複室構造の切石積横穴式石室（以下、石室）を内蔵する円墳である。近世の第 1 号溝跡によって墳丘南東裾部から北西側周溝にかけて大きく削平を受け、墳丘南西側も、第 10 号溝跡や近世土壌によって、墳丘や周溝の一部が壊されていた。台地肩部から 30 m 程内側で、南に向かってなだらかに傾斜する平坦な地形を選んで古墳の占地がなされている。墳丘下や周溝には古墳が造られる以前の、縄文時代や古墳時代前期の住居跡が数軒見つかっている。

調査区南側から重機による表土掘削を開始し始めたところ、調査区西側において弧状に巡る黒色土の落ち込みが検出され、古墳の周溝であると判断された。さらに、墳丘の中央から石材が顔を出しあじめ、古墳跡の存在が確定した。

周溝は、第 1 号溝跡や住居跡によって不明瞭な部分もあるが、墳丘を全周するように掘削されていたものと推定される。

西側周溝は断面レンズ形で、幅 3.35 m、深さ 0.35 m である。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がっている。北側周溝は断面逆台形で、幅 2.91 m、深さ 0.75 ~ 0.82 m とやや幅を狭めている。周溝の外側壁面は急角度に掘り込んでいるのに対し、周溝の内側壁面は緩やかに立ち上がる。東側周溝は、第 1 号溝跡によって墳丘側の立ち上がりが壊されている。幅約 3.70 m、深さ 0.67 m の断面逆台形を呈し、平坦な底面である。古墳の正面にあたる南側周溝は、視覚的効果をねらったためか、ほかの周溝よりも幅が広く、墳丘側を直線的に掘り込んでいる。浅く平坦な底面が広がり、幅約 4.0 m、深さ 0.16 m である。

墳丘

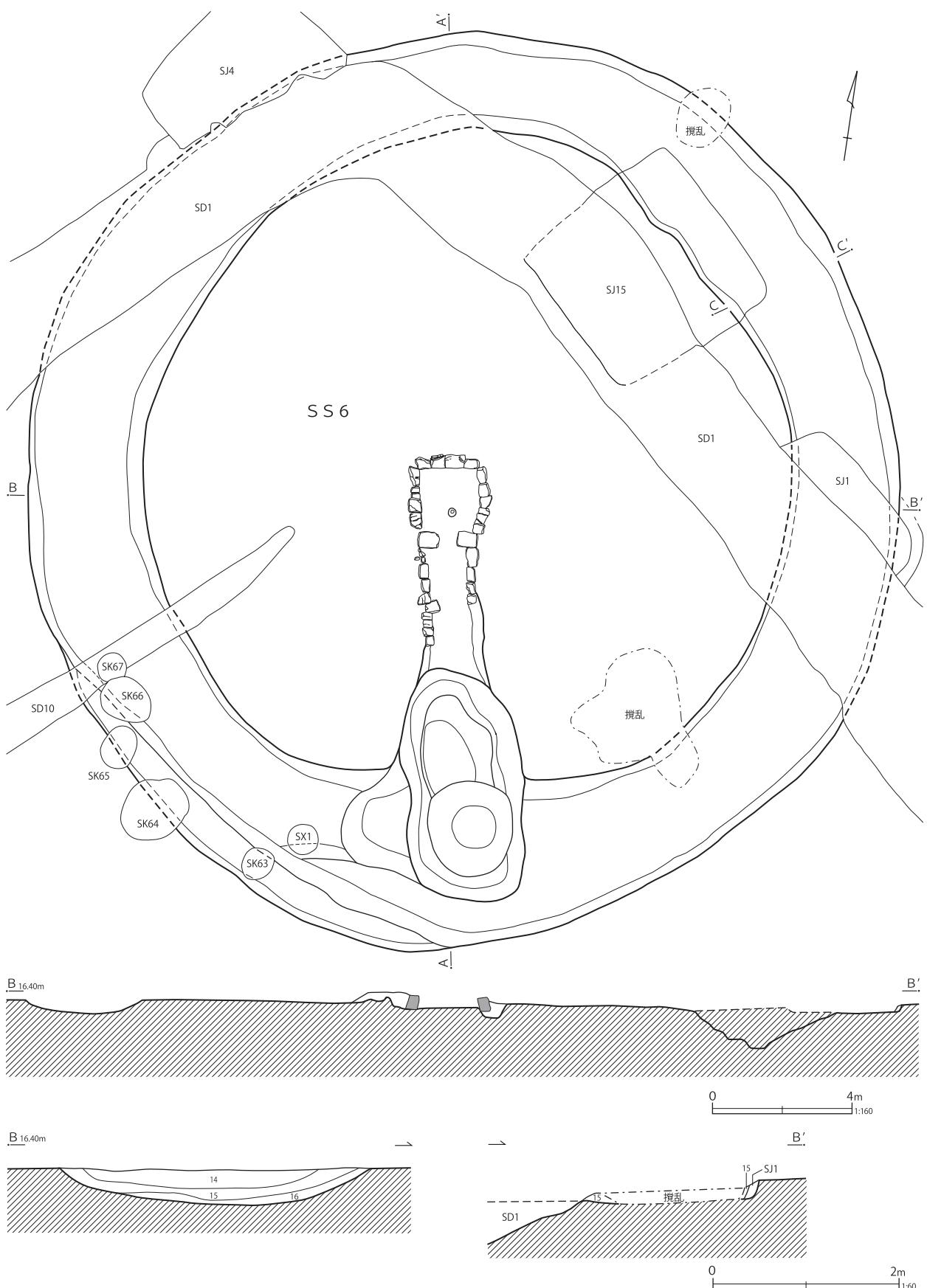
墳丘規模は、周溝内側で南北 18.80 m × 東西 18.16 m、周溝を含めると南北 26.08 m × 東西 24.56 m である。桶川市域の円墳では、西台 2 号墳（36 m）、西台 7 号墳（30 m）、原山 9 号墳（31 m）など、周溝内側で 30 m 台の古墳が規模の大きなもので、20 m 前後のものはこれらに次ぐ大きさである。氷川神社裏古墳（19 m）などが同規模の古墳として挙げられる（藤沼ほか 2007）。

墳丘の規模を図上復元すると、後述するように石室の玄室中央付近の床面から検出されたピット（H-8 グリッド P 3）を墳丘中心点として仮定した場合、墳丘径は周溝内側立ち上がりで 19.20 m、周溝径 25.6 m に復元される（第 91 図）。

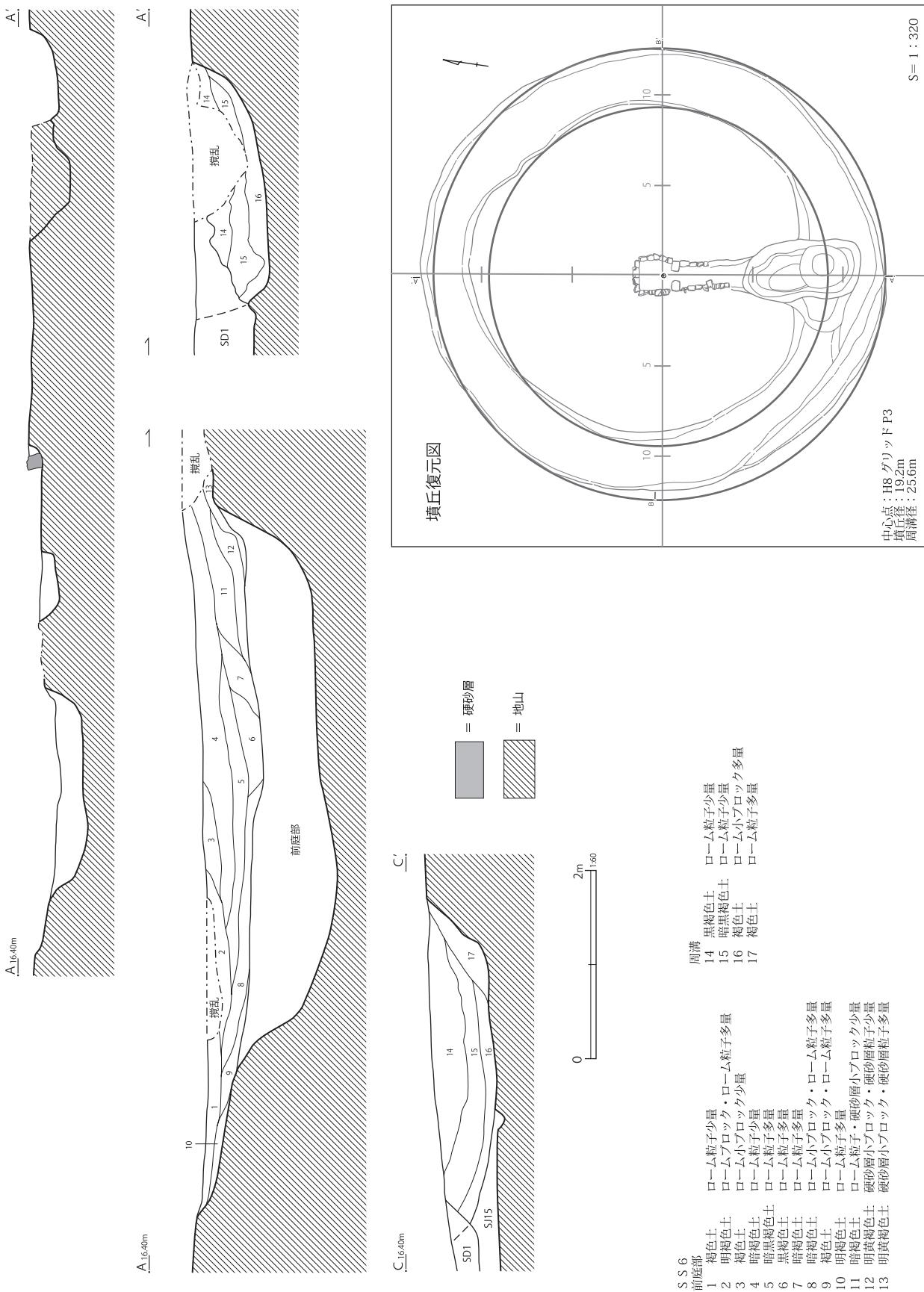
墳丘は、ローム面まで深く搅乱がおよんでいたため、石室周辺にローム漸移層がわずかに残っていたにすぎない。そのため、旧表土や墳丘盛土を確認することができず、墳丘の構造については不明である。なお、葺石や外護列石などの存在を示唆するような石材は認められなかった。

埋葬施設

墳丘中央から半地下式に構築された石室が検出された。平面形態は、玄室・前室・羨道からなる複室構造で、立柱石によって各部位を区画した両



第90図 古墳跡（1）



第 91 図 古墳跡 (2)

袖型石室である。石室の主軸方位は、N – 6° – W でほぼ南に開口する。石室の構築石材は、大宮台地の関東ローム層の下位に堆積する硬砂層をブロック状に加工した、いわゆる切石を主体的に用いている。後世の墳丘削平に伴い石室上半部は壊滅的な破壊を被り、石室掘り方内部に石室の壁体基底部のみが残存していた。

玄室は概ね基底石が残存し、かろうじて2段目まで残る部分が見られた。前室は、搅乱が広範囲におよび、西側壁は基底石のみ、東側壁は2段目までが残っていた。また、東側前門立柱石は壁面より内側に突出する部分が大きく抉られていた。

羨道は、西側壁の基底石のみが残存し、小型の切石3石が置かれていた。東側壁は搅乱によって壊され、掘り方内の崩落石材には、小型の切石が目に付く。おそらく玄室や前室よりも小振りの切石が積み上げられていたのであろう。

奥壁から入り口部までの石室全長は5.15 m、残存高は西側壁（玄室）で最大0.50 m、東側壁（前室）で最大0.68 mを測る。玄室は奥行き1.97 m、奥壁幅1.72 m、前壁幅1.68 mの長方形を呈する。前室は奥行き1.57 m、幅1.35 mの長方形で、幅・長さともに玄室よりも一回り縮小している。羨道は現存部から復元すると、奥行き0.91 m、幅約1.22 mで、幅は前室とほぼ同じである。

玄門奥行きは0.38～0.47 m、前門奥行きは0.32～0.36 mである。玄門幅は0.64 mで、前門幅もほぼ同じであったと推定される。

各部の比率は、石室全長を10とした場合、玄室長（玄門含む）：前室長（前門含む）：羨道長=4.7:3.7:1.6となる。また、30 cmを基準長とした方眼と各部位の適合状況を見ると、玄門を含む玄室は長さ8×幅6単位、前門を含む前室は長さ6×幅4.5単位、羨道は長さ3×幅4単位に復元され、比較的良好に合致している（第93図）。

こうした平面形態は、川田谷古墳群に特徴的な西台7号墳に始まる方形プランの玄室に短小な前

室を付設する複室構造石室の系列とは、別系譜に位置づけられる（草野2016）。現状では、岩殿丘陵以南の越辺川流域に特徴的な直線洞プラン複室構造石室（坂戸市大河原2号墳、毛呂山町鎌倉街道2号墳など）との関連性が想定される。

石室石材に使用されている硬砂層は、大宮台地の関東ローム層の下位に堆積する、良く締まった硬い砂層で、大宮台地北西部および中央部に広く分布している（硬砂固体研究グループ1984）。石材の乏しい大宮台地周辺では、縄文時代以来、硬砂層がさまざまな生活部材として、生業の一部に利用されている（杉山2015）。石室石材としては、蓮田市十三塚古墳や桶川市冰川神社裏古墳などで、硬砂層の使用が確認されている。

硬砂層は、第四紀層に見られるほかの砂層と比べると、大変硬く締まっており、灰白色ないし暗灰褐色を呈する細粒～中粒の砂層で、層中には直径1～3 mm程の白色管状物質（植物根様）や褐色球状物質など二次的生成物が形成されているのが特徴である。ただし、硬砂層は地層を指す名称であり、砂層が固着化したもので、結晶化していないため厳密には岩石ではないことは注意しておく必要がある。

石室の壁体は、軟質の硬砂層を刃付き工具で、直方体に削り整えた加工石材（切石）のみで構築されている。石室覆土を掘り下げていく過程で検出された大振りの石材はすべて同質の硬砂層であり、天井石も壁体同様に硬砂層を使用していたと想定される。石材の積み上げ方を見ると若干内側に傾いており、壁面全体を内側へ傾斜させる「転び」の構造で、壁面は約12～15°内傾している。石材の置き方は、平積みないし小口積みを基本とし、横積みや縦積みは小型石材に限られている。

石材加工の特徴としては、石材の隅角をL字形に切り欠いて組み合わせる「切組積」の工法が指摘できる。切組積は、玄室東側壁に1箇所、同西側壁に2箇所、前室東側壁に2箇所の計5箇所に



第92図 古墳跡石室確認状況図

確認された。失われた石室上半部も含めて壁面全体に切組積を多用していたと想定される。

奥壁は、中央に幅 90 cm の大型石材を置き、その両脇に幅 40 cm 前後の石材を配置した 3 石構成である。3 石とも上半部を欠失しており、本来の構成は不明である。中央の石材には、大きな亀裂が見られたが、使用石材の中では最も大きく、いわゆる「鏡石」であろう。奥壁と側壁の設置は、隅部を接するように配置され、石材の合わせ目の裏側に白色粘土を充填し、目張りが施されていた。

側壁基底石の配置は、基本的に玄室は 5 石、前室は 4 石、羨道は 3 石を配していた。

玄門および前門の立柱石は、縦長の大型石材を用いていたと想定される。基底部には、不動沈下を防ぐために白色粘土を敷き、栗石を介在させて傾きの微調整が施されていた。側壁石材端面との接合部は、裏側から白色粘土が充填されていた。

残存する壁石の表面は剥落・風化しているものが多く、全体的に明瞭な加工痕は観察できなかつた。加工痕の多くは、石材の接地面や背面などの見えない部分に良く残っていた。

石室の床面は、玄室・前室・羨道とともに概ね平坦で、玄門および前門には明確な段差や切石による樋石は設置されていなかった。当初、玄室と前室の床面は、河原石を全面に敷き詰めた礫床であったと考えられるが、攪乱により所々に欠落している部分が見られる。

床面には径 6 ~ 10 cm の拳大の円礫を主体とした敷石が、一重から二重に敷設されていた。敷石の形状は、球状や円盤状のものが多く、棒状を呈するものもある。岩石の種類は、チャートと砂岩を主体に、礫まじり砂岩、第三紀砂岩、緑色岩、結晶片岩なども見られる（第 16 表）。

玄室の敷石を除去した際、奥壁から入口に向かって 1.3 m の床面に、径 26 × 21 cm、深さ 32 cm のピット（H-8 グリッド P3）が検出された（第 94 図）。前述したように、このピットは墳丘築造

第 16 表 古墳跡敷石組成表

岩石種類	個数	比率 /%	重量 / kg	比率 /%
チャート	493	47.5	105.4	48.4
砂岩	506	48.7	102.4	47.0
礫まじり砂岩	35	3.4	9.4	4.3
第三紀砂岩	2	0.2	0.2	0.1
緑色岩	1	0.1	0.1	0.0
結晶片岩	1	0.1	0.2	0.1
合 計	1038	100	217.7	100

企画の中心点であった蓋然性が高い。

西側前門の入口側に接して、板状の切石の一部が検出された（第 92 図）。前門に 2 枚の板状の切石を立てかけた閉塞施設を想定することができる。

羨道から前庭部の床面には、硬砂層の小ブロックを含む土砂が面的に広がっていた。石室構築時に切石を加工する際にでた屑を、閉塞土に混ぜたものであろう。

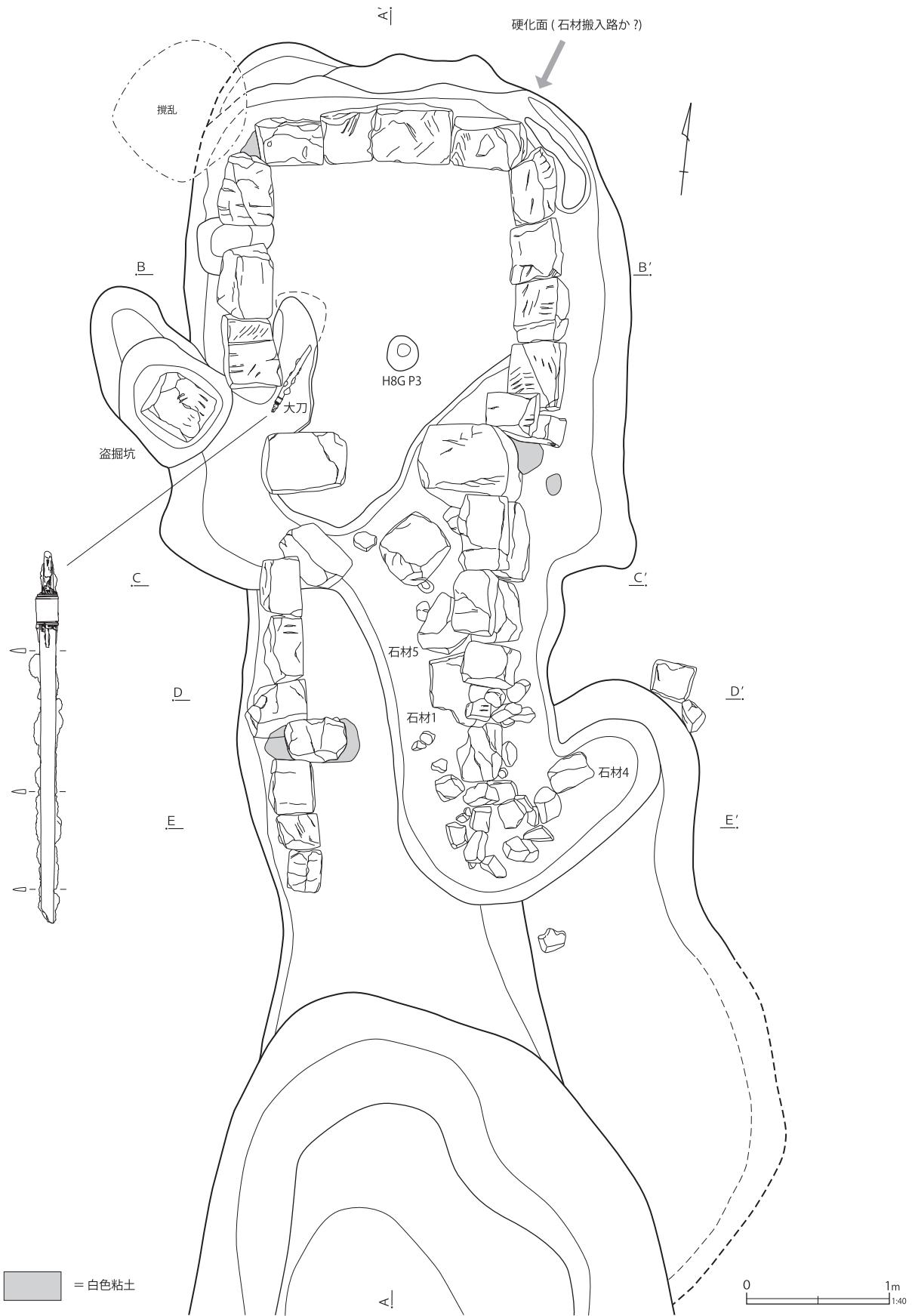
石室は、旧地表面を掘り込んだ半地下式の掘り方の中に構築されていた。石室の掘り方は、奥壁から前室の中央付近までを長方形に大きく掘り込み、それに幅を狭めた墓道状の掘り込みが接続して前庭部に至っている。掘り方の規模は、全長 6.67 m を測り、後半の本体部分が長さ 3.85 m、幅 3.08 m、前半の狭い部分が長さ 2.82 m、幅 2.13 m である。掘り方の内部は、石室の基底石を設置するために、壁沿いに溝状の掘り込みを巡らしている。奥壁と西側壁は、概ね石室の床面の高さに合わせて、地山の上に直接基底石を置いているのに対し、東側壁は奥壁際から羨道に向かって徐々に掘り込みを深くする特異な基礎構造であった。

ちなみに基底石の設置レベル（標高）を比較すると、奥壁は 15.84 m、東側壁側の玄門立柱石は 15.46 m、前門立柱石は 15.31 m で、奥壁との比高差は玄門で 38 cm、前門で 53 cm となる。これとは対照的に西側壁側では、玄門立柱石が 15.75 m、前門立柱石が 15.92 m と、概ね同じ高さに置かれていた。こうした基礎構造の差異について、石室構造上の問題なのか、明確にし得なかつた。

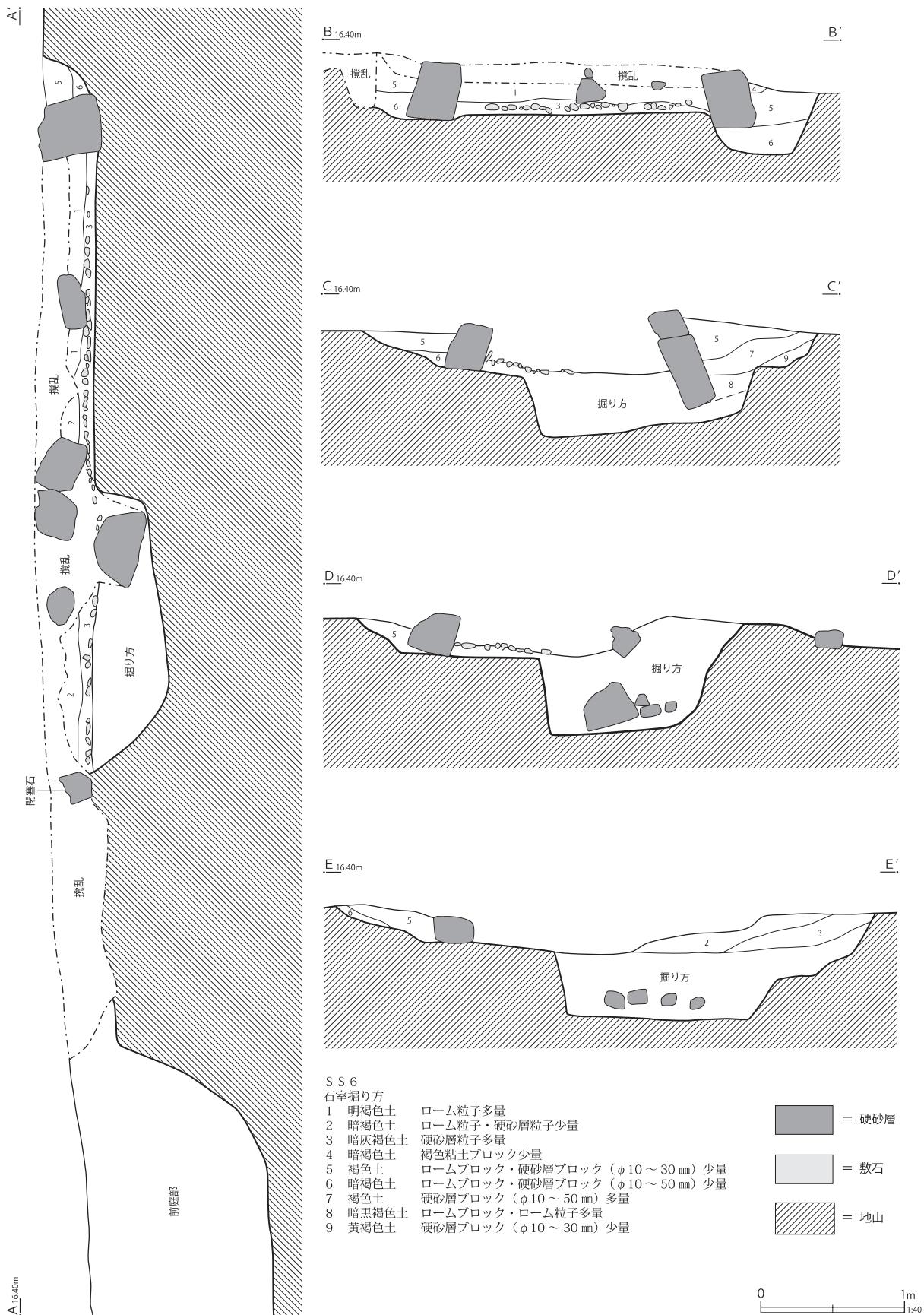
壁体と掘り方の間の裏込めは、ロームブロック



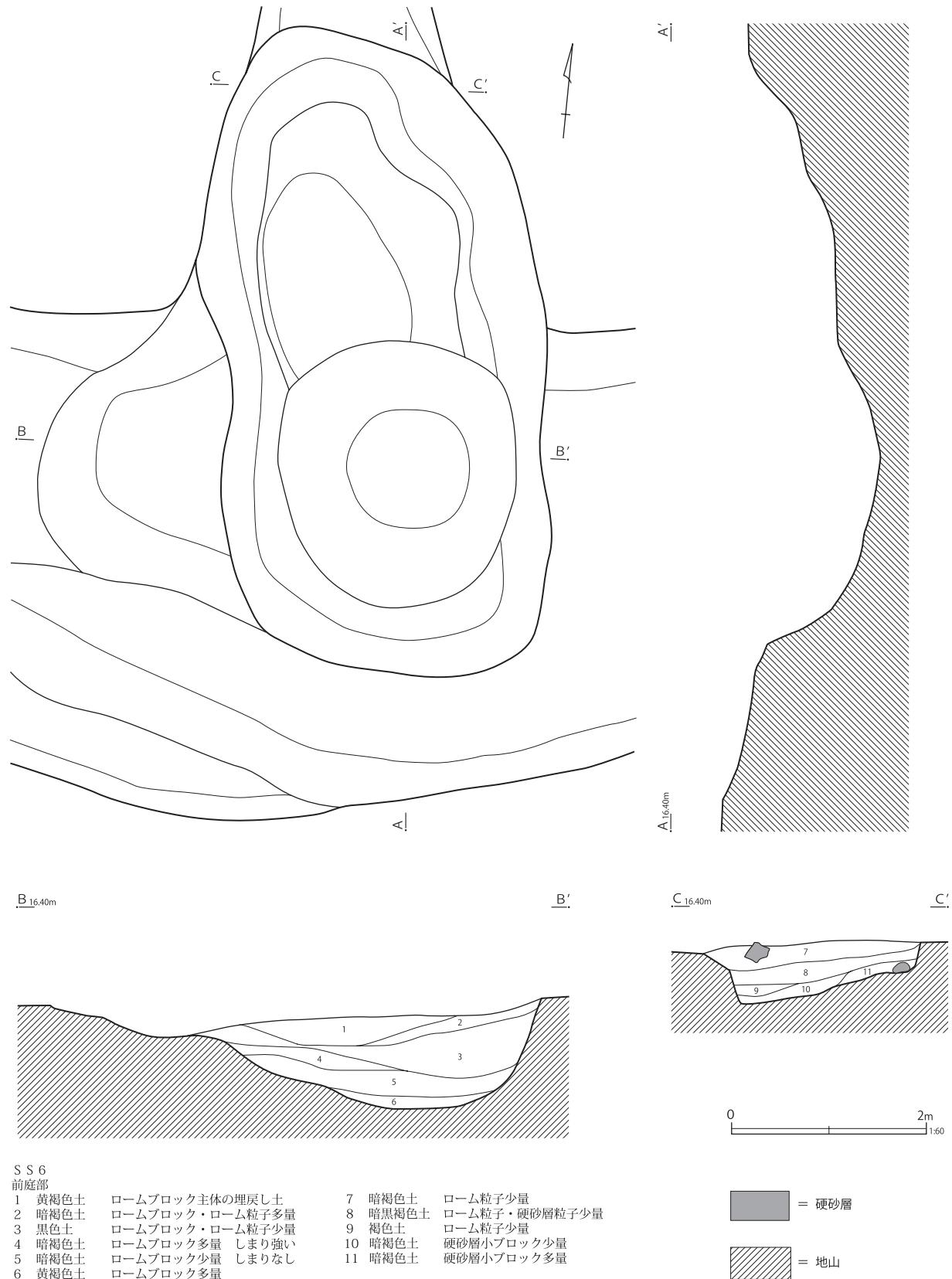
第93図 古墳跡石室



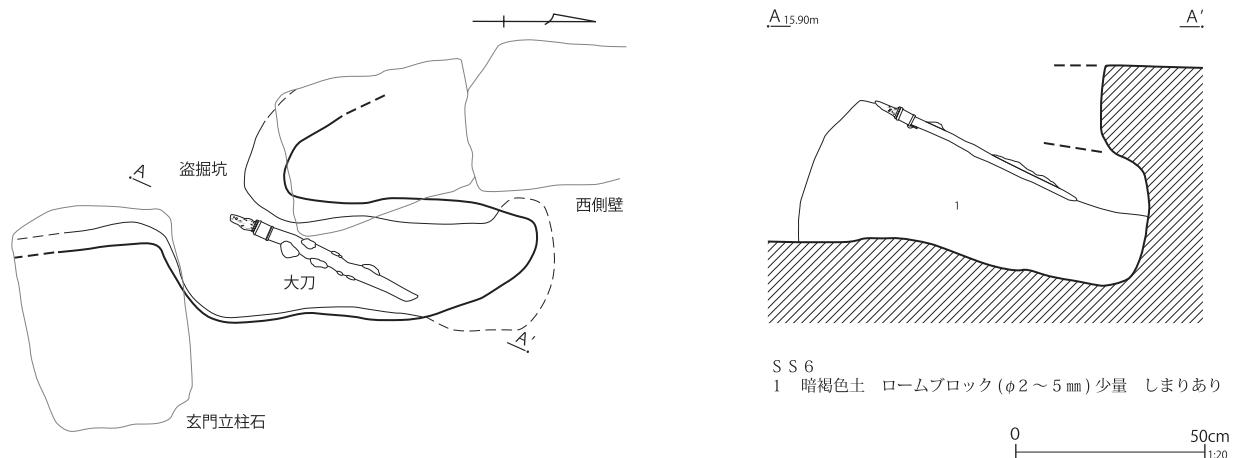
第94図 古墳跡石室基底石・掘り方 (1)



第 95 図 古墳跡石室基底石・掘り方 (2)



第 96 図 古墳跡前庭部



第97図 古墳跡遺物出土状況図

や硬砂層の削屑を含む土砂によって埋め戻されていた。なお、奥壁背面の掘り方の底面が全体に硬化面を形成していることから、奥壁後方に石材搬入路を想定することが可能であろう。

石室入口の手前には、周溝の底面を掘り込む大きな前庭部が造作されていた。前庭部の規模は、長さ 6.70 m、幅 3.12 m、深さ 1.25 mで、通常の前庭部よりも大規模な土壇状の掘り込みである。前庭部の最深部から見て、周溝側は急角度に立ち上がっているが、石室入口側は階段状の段差を造作している。土層断面の観察によると、ロームブロックを多量に含む暗褐色土や黄褐色土によって、周溝底面の高さまで埋め戻されたものと考えられる。おそらく石室掘り方の整地や裏込めを構築するため、旧表土の黒色土や多量のローム土を必要としたことから、当初は土取り穴として掘削され、最終的に埋め戻されたものと想定される。

石室内出土遺物

石室内は床面に至るまで後世の手が及んでいたため、副葬品は皆無であった。しかし、石室の解体作業中、玄室南西隅の盜掘坑の中から大刀 1 振が出土した（第97図）。この盜掘坑は、石室背面から玄門立柱石脇の石材を抜き取って、侵入した形跡を留めていた。大刀は、切先を奥壁側に向け、盜掘坑の底面から浮いた状態で、斜めになつて出土した。あたかも玄室の床面から盜掘坑の中

に落ち込み、盗掘の難を逃れたことを想像させる。

切石の加工痕

石室内部に崩落していた切石の加工痕について詳述する（第98図）。

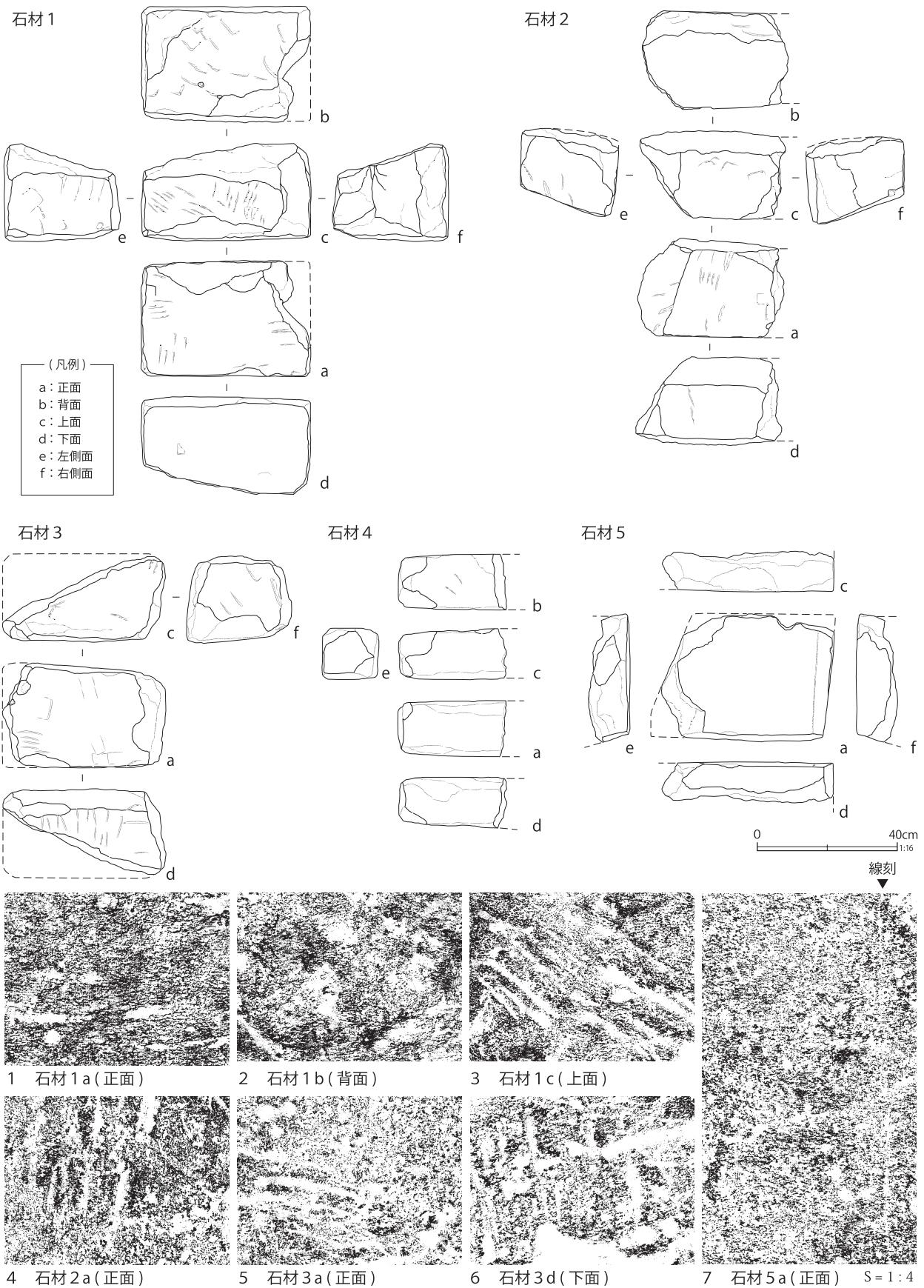
石材 1 は、前室東側壁の前門寄りから出土した。安定感のある大型の切石で、縦断面は台形を呈する。高さ 33.0 cm、幅 48.5 cm、厚さ 27.2 cmで、隅角の一部を欠損する。各面に加工度の違う工具痕が残る。上面には接地面を水平に整えるための線状の連続する工具痕が見られる。背面は掘り込みの深い工具痕が残る。工具幅は約 5 cmである。

石材 2 は、高さ 27.5 cm、幅 42.0 cm、厚さ 25.0 cmで、直方体に近い。正面に工具痕が見られる。

石材 3 は、玄室中央から出土した。後世の欠き取りにより、変形しているが、本来は直方体と考えられる。高さ 28.5 cm、幅 44.5 cm、厚さ 23.5 cmで、下面に連続した線状の工具痕が観察される。工具の刃幅は 4 ~ 6 cm 前後である。

石材 4 は、前室東側壁背面の石室掘り方内から出土した小型石材で、高さ 16.0 cm、現存幅 31.2 cm、厚さ 14.5 cmである。加工痕は残っていない。

石材 5 は、前室の東側壁付近から出土した板状の切石である。背面が剥離しているため本来の厚さは不明である。高さ 36.4 cm、現存幅 49.4 cm、厚さ 11.4 cm以上を測る。端面に沿って直線的な線刻が見られ、割り付け線の可能性も考えられる。

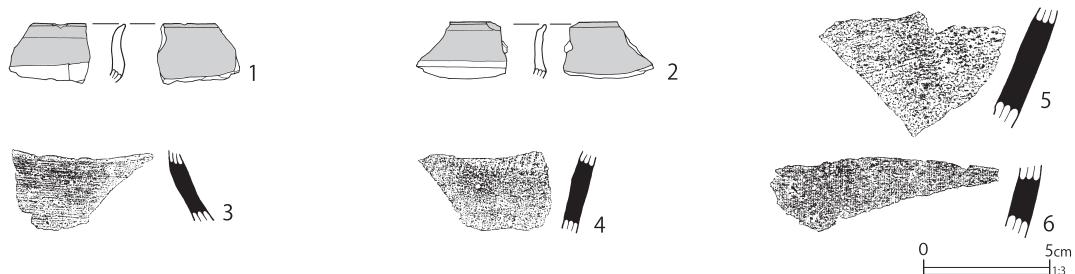


第 98 図 古墳跡石室石材・加工痕拓影図

出土土器（第99図）

古墳跡の周溝からは多くの土器が出土したが、大半は流入・攪乱によるものであった。このうち、古墳の造営とおおむね同時代と推定し得る6点を図示した。1・2・6は周溝、3・4は石室掘り方、5は羨道からの出土である。

1・2はいわゆる比企型壺の口縁部片である。口唇部内面に1条の沈線が廻り、内面および口縁部外面は赤彩される。2は胎土に小礫を含む。3～6は須恵器で、4～6は甕の胴部である。4は外面に斜位の平行タタキ痕が見られる。須恵器はいずれも南比企産である。



第99図 古墳跡出土遺物（1）

第17表 古墳跡出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[2.3]	—	AEHIK	5	普通	灰黄褐	G-9 比企型壺 内外面赤彩	25-2
2	土師器	壺	—	[2.2]	—	ACHIK	10	普通	にぶい黄褐	G-9 比企型壺 内外面赤彩	25-2
3	須恵器	壺か	—	[2.8]	—	AEJ	10	普通	明赤褐	石室掘り方 南比企産	25-2
4	須恵器	甕	—	[3.2]	—	AEJ	5	普通	灰	石室掘り方 外面斜位平行タタキ 南比企産	25-2
5	須恵器	甕	—	[5.0]	—	AEJ	10	良好	灰	羨道 8区 南比企産	25-2
6	須恵器	甕	—	[2.9]	—	EJ	5	良好	暗赤灰	H-10 南比企産	25-2

出土大刀（第100図）

刀装具がついた大刀である。現状では5つに分離し、図上で復元すると全長は58.8 cmになる。刀装具は、柄縁・鐔・鞘口・鍔・責金物・佩用金具がある。このうち鞘口と鍔は鉄製で、他は銅もしくは金銅製である。

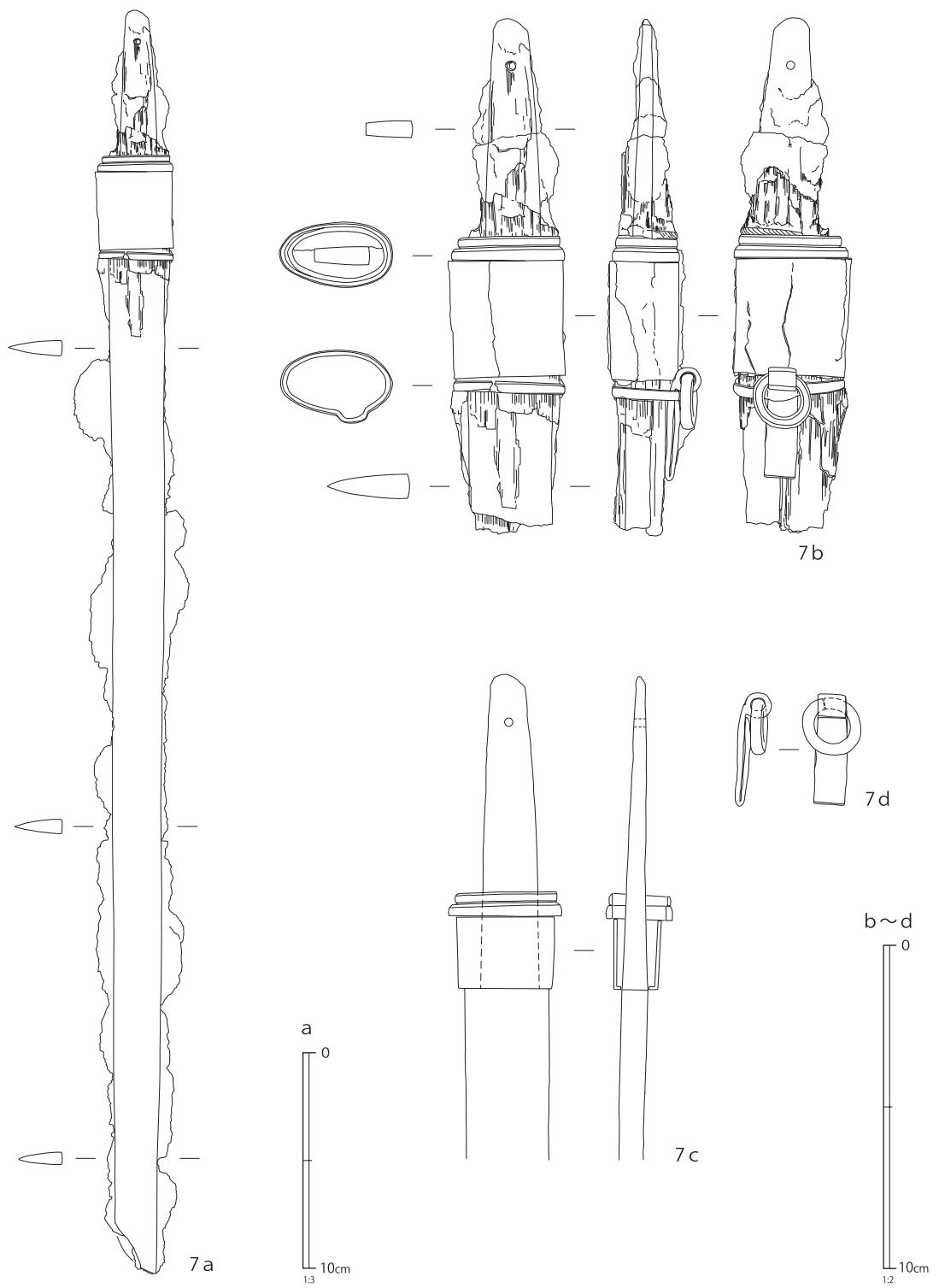
柄縁は径3.2×1.9 cm、厚さ約0.1 cmで、断面形は蒲鉾形となる。鐔は喰出鐔で、径3.5×2.6 cm、厚さ約0.3 cmで、鞘口に接する側には稜を持たない。わずかに鍍金の痕跡が見られる。鞘口は長さ3.6 cm、幅3.5×2.6 cm、厚さ約0.15 cmである。1枚の鉄板を回して、刃側で鍛接していると考えられる。佩用金具が接する部分に、切込みなどの加工があるかどうかは現状では判断できない。鍔は長さ2.2 cm、幅は推定で3.0×1.5 cmである。鞘側を堰板で塞ぐ閉塞式の鍔と推定される。

佩用金具は遊環付佩用金具、いわゆる「環付足金物」である。環は径1.7 cm、厚さ約0.3 cm、

環との接合部を含めた脚部の長さは3.5 cm、幅0.9～1.1 cmで、全体を真中から上側に折り返しており、折り返した端部は責金物の内側に入り込む。接合部の環径は0.7 cmである。責金物は、径3.5×2.2 cm、厚さ約0.1 cmで、断面形は蒲鉾形である。部分的に鍍金の痕跡がある。凸状の盛り上がりを有し、その部分で佩用金具の脚部を押さえ固定している。

柄は大半が失われているが、部分的に木質（柄木）が残る。柄木はおそらく2枚合わせであったと考えられる。柄縁に接してわずかではあるが柄巻の紐が残っている。鞘も鞘口周辺に鞘木の痕跡が見られるにすぎない。

刀身は鏽の浸食が著しく、遺存状況は良好でない。茎長は9.7 cmで、茎尻寄りに目釘孔が1箇所設けられている。刃長は49.1 cm、背幅0.6～0.7 cm、刃幅2.0～2.5 cmである。切先が一部欠損している。平造り・両闘の鉄刀である。



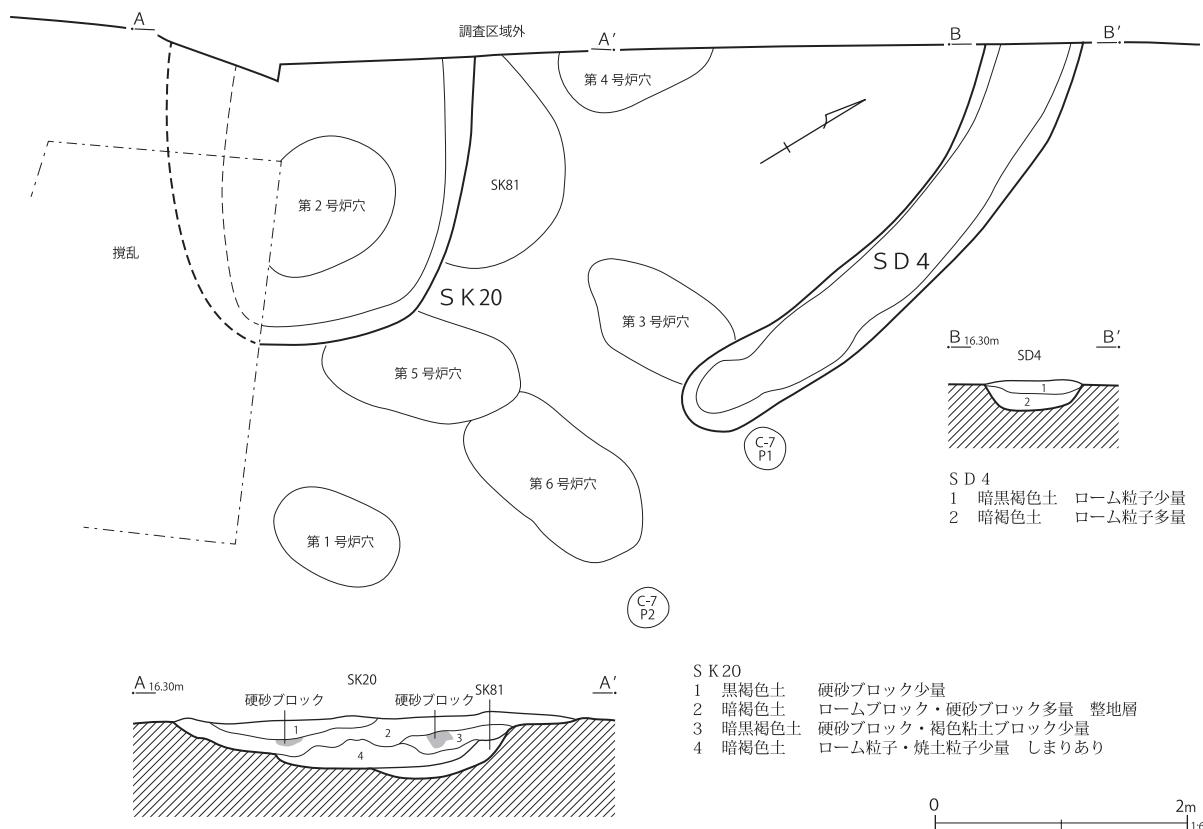
第100図 古墳跡出土遺物（2）

(3) 溝跡

第4号溝跡（第101図）

調査区北側のC-7グリッドに位置する。南北方向に走向する溝跡であるが、緩やかな弧を描き、調査区域外へ延びている。重複する縄文時代早期の第3号炉穴に後続する。検出長は4.2m、幅

は0.6～0.76m、深さは0.17～0.18mを測る。古墳跡や第20号土壙との位置関係、また第20号土壙周辺に硬砂ブロックが散在していたことも併せて、小規模な古墳跡の周溝である可能性がある。遺物は細片かつ僅少であり、図示できるものはない。



第101図 第4号溝跡・第20号土壙

(4) 土壙

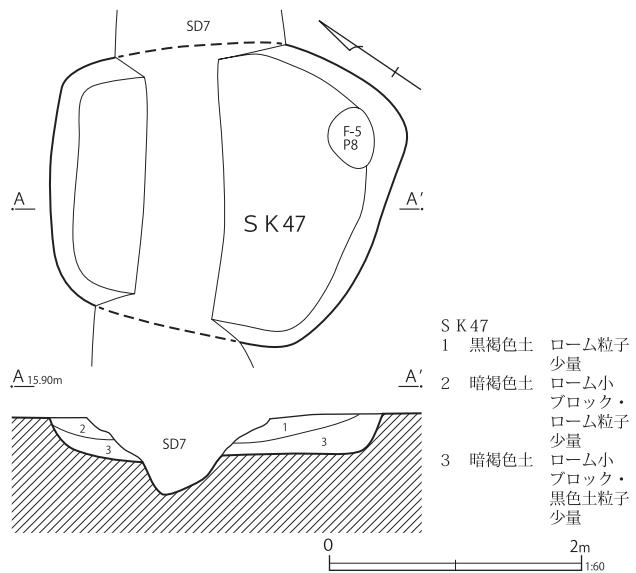
第20号土壙（第101図）

調査区北部のC-D-7グリッドに位置する。北西側は調査区域外へ延びており、全容は不明である。隅丸方形が想定され、長軸方位はN-55°-Wである。検出長2.4m、幅2.22m、深さ0.38mを測る。第4号溝跡を古墳跡の周溝と捉えると、第20号土壙は横穴式石室の掘り方と想定できる。

第47号土壙（第102図）

調査区北西部のF-5グリッドに位置する。重複する第7号溝跡に先行する。隅丸方形で、長軸2.62m、幅2.40m、深さ0.34mを測る。

両土壙の遺物は細片かつ僅少で、図示できない。



第102図 第47号土壙

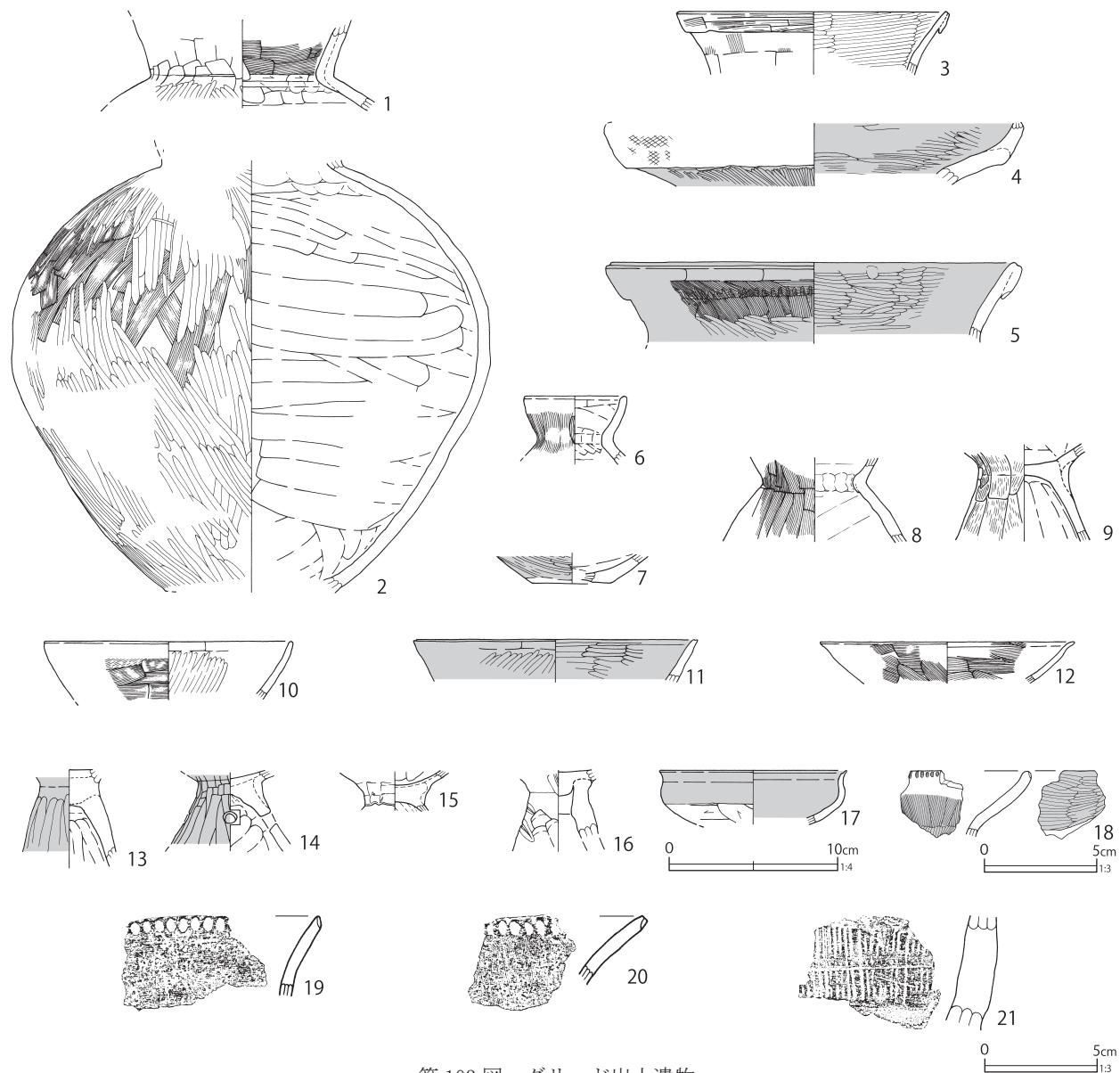
(5) グリッド出土遺物 (第 103 図)

遺構外から出土した遺物のうち 21 点を図示した。1 ~ 20 は土師器、21 は埴輪片である。

1・2 は壺の頸部および胴部片である。同一個体と思われるが接合せず、別掲した。口縁部は縦位のハケ後、下からナデ。胴部は軽いナデ後、縦位のハケが施される。底部～胴部最大径付近にヘラミガキが 3 段にわたって斜位に施され、肩部も斜位～縦位にヘラミガキされる。さらに、より細いヘラ状工具によるミガキが肩部から放射状に施される。また内面は肩部に残る輪積み痕を指頭で

オサエ、屈曲部分以上に横位のハケが施される。さらに口縁部との接合部分には横位のナデが施される。また内面には煤が付着している。胎土は雲母を非常に多く含み、在地のものとは異質である。

3～5 は壺の口縁部である。3 は広口壺で、内面に横位のハケ後、再び横位にヘラミガキが施される。4 は口縁部外面の損耗が著しいが、一部に網目状撚糸文を模した櫛状工具痕が見られる。外面頸部以下および内面は赤彩される。第 4 号住居跡の第 76 図 1 に類似するが、口縁部のつくりは異なる。5 は広口壺と思われる。口縁部は縦位の



第 103 図 グリッド出土遺物

第18表 グリッド出土遺物観察表（第103図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[5.2]	—	ACEHIK	40	普通	にぶい褐	SD1 内面上部煤付着	25-4
2	土師器	壺	—	[25.6]	—	ACHIKL	45	普通	にぶい黄橙	J-11 外面煤付着 内面上部煤付着	25-5
3	土師器	壺	(15.6)	[3.7]	—	AEHIKL	20	普通	にぶい黄褐	SS6 3区 I-9	25-6
4	土師器	壺	—	[3.65]	—	AEHIKL	15	普通	灰オリーブ	SS6 H-7 内外面赤彩	25-6
5	土師器	壺	(23.4)	[4.7]	—	AEHIKL	15	普通	にぶい黄橙	SS6 I-8 内外面赤彩	25-6
6	土師器	小型壺	(5.8)	[4.0]	—	ACEIK	25	普通	にぶい褐	SS6 I-8	25-6
7	土師器	小型壺	—	[1.7]	(4.6)	AHIK	20	普通	にぶい褐	SD1 G-9 外面赤彩	25-6
8	土師器	小型壺	—	[5.0]	—	ACEIK	20	普通	にぶい黄橙	SS6 H-7	25-6
9	土師器	台付甕	—	[5.7]	—	AHIK	70	普通	にぶい黄褐	SS6 H-9 内面煤付着	25-6
10	土師器	高坏	(14.8)	[3.35]	—	AEHIK	10	良好	にぶい赤褐	F-7	25-6
11	土師器	高坏	(16.4)	[2.5]	—	AEIK	15	普通	にぶい黄	I-9 内外面赤彩	25-6
12	土師器	高坏	(15.0)	[2.4]	—	AEHIK	10	普通	にぶい黄褐	F-7	25-6
13	土師器	高坏	—	[5.7]	—	ACEGHIK	35	普通	明赤褐	SD1 外面赤彩 杯部内面赤彩	25-6
14	土師器	高坏	—	[4.8]	—	AEHIK	60	普通	にぶい黄橙	SD1 二次被熱あり 4孔 外面赤彩・煤付着	25-6
15	土師器	高坏	—	[2.3]	—	ADEHIKL	65	普通	明赤褐	K-9	25-6
16	土師器	高坏	—	[4.8]	—	AEHIK	70	普通	にぶい黄橙	SK66 刀物痕	25-6
17	土師器	坏	(10.9)	[3.2]	—	EHIK	10	普通	にぶい黄橙	J-11 内外面赤彩 比企型坏	25-6
18	土師器	小型壺	—	[2.9]	—	AEHIK	10	普通	にぶい黄褐	SS6 I-9 内外面赤彩	25-6
19	土師器	甕	—	[3.5]	—	AEHIK	5	普通	橙	表採 内外面煤付着	25-6
20	土師器	甕	—	[3.1]	—	AEHIK	5	普通	橙	SS6 前庭部	25-6
21	埴輪	円筒形埴輪	—	[5.1]	—	CEHIK	5	普通	橙	SS6 H-8	25-6

ハケ後、粘土紐が貼付される。貼付された箇所は斜位～横位のハケで調整され、上端は強く摘みながら横位にナデられる。外面頸部以下は斜位に、内面は横位にヘラミガキされる。口縁貼付け部下端には木口状工具によるキザミが左方向から入る。内外面とも赤彩される。

6～8は小型壺である。6は口縁端部を摘むように成形したため、内面に稜がつくられる。7の底面には円形の凹みが見られる。外面赤彩される。6・8は頸部内面の接合部分を指頭でオサエている。

9は台付甕の脚台部である。胴部の内面には煤が見られるが、脚部には内外面とも見られない。

10～16は高坏で、11～12は口縁部、13～16は脚部である。11は口縁端部を摘むように成形し、内面に稜がつくられるが、端部上面に皺が生じ、外面上部が凹む。内外面とも赤彩される。12は口縁端部を強く摘み、外反させる。内外面とも横位のハケである。13は坏部内面、脚部外表面が赤彩される。坏部外表面は劣化が著しい。胎土に粗砂が混ざる。14は四方に円形透かしが穿たれる。外面に細かいヘラナデが施される。坏部・脚部とも外面は赤彩される。破損後に被熱し、煤が付着している。15は作成した脚部の括れに粘

土を巻き付け、坏部と接合したと思われる。内面に化粧土が施される。16は柄結合で、10～15よりも新しい。外面には後世のものと思われる刃物傷が6箇所に見られる。

17はいわゆる比企型坏である。口唇部内面に1条の沈線が廻る。底部は反時計回り方向にヘラケズリされる。内面と口縁部外面は赤彩されている。

18は小型壺の口縁部片と思われる。口唇端部に木口状工具によるキザミが施される。外面は細かいハケ後に化粧土を施している。外面頸部には赤彩を確認できる。内面は口縁部以下、横位のヘラミガキが施され、赤彩される。

19～20は甕の口縁部片である。19は外面を横位にナデ、端部に棒状工具によるキザミが左方向から施される。20は内面に横位のハケ目、外面は縦位のハケ後に化粧土を施す。端部に面を作りハケで整えた後、ヘラ状工具によるキザミが左方向から施される。

21は埴輪片である。円筒埴輪の一部と見られ、外面を縦位のハケで調整されている。古墳跡の周溝(H-8グリッド)からの出土であるが、古墳跡の造営される時期には既に埴輪は用いられないため、周辺に存在した他の埴輪をもつ古墳からの流入と判断される。

4. 中・近世の遺構と遺物

溝跡 11 条、土壙 19 基、不明遺構 1 基、炉跡 2 基、ピット 94 基が検出された。

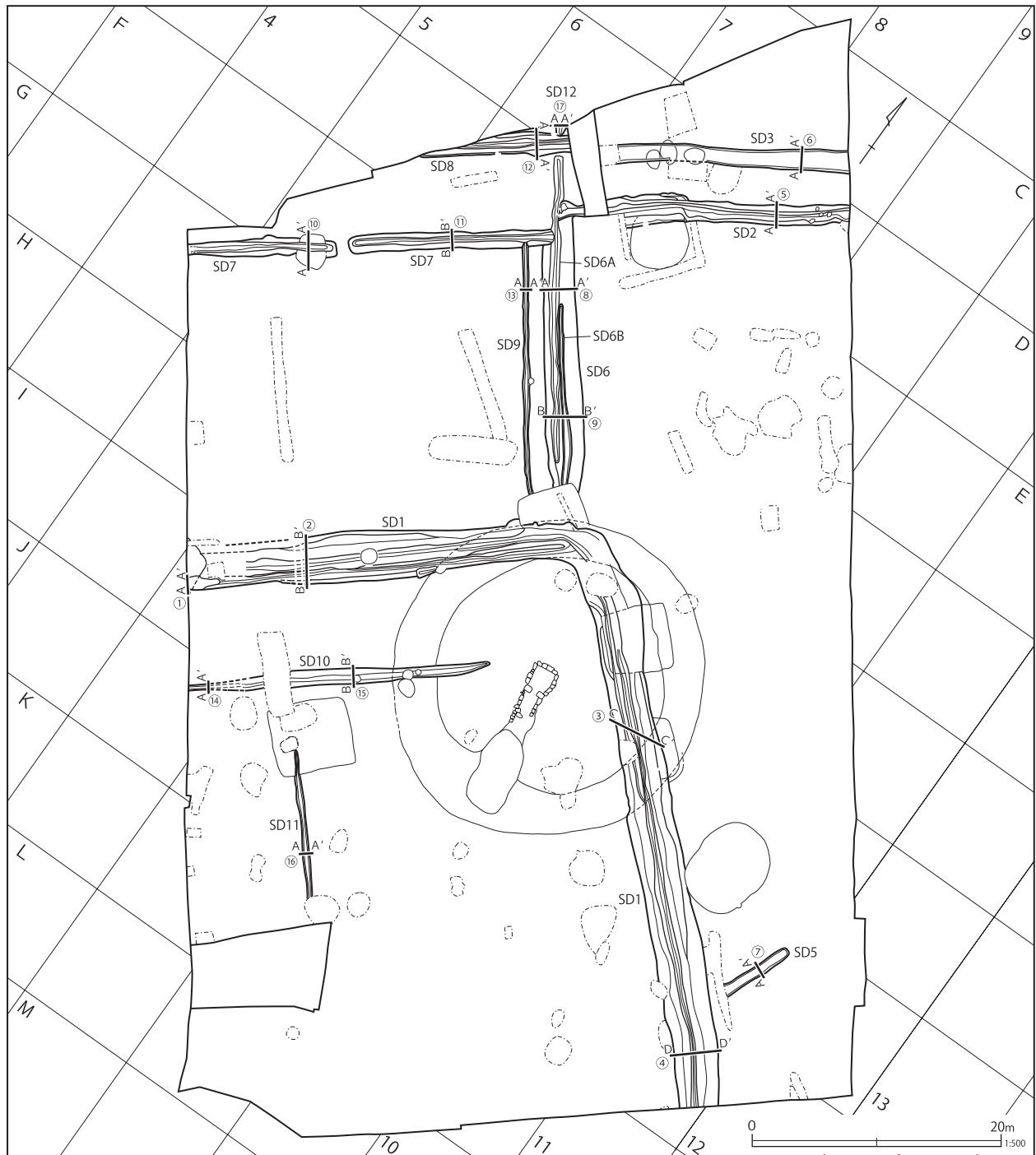
(1) 溝跡

溝跡は調査区の長軸及び短軸に沿って走向し、北西側に密な分布が見られた。第 1 ~ 3 · 6 ~ 8 · 12 号溝跡は現在の土地割にも連なる区割溝

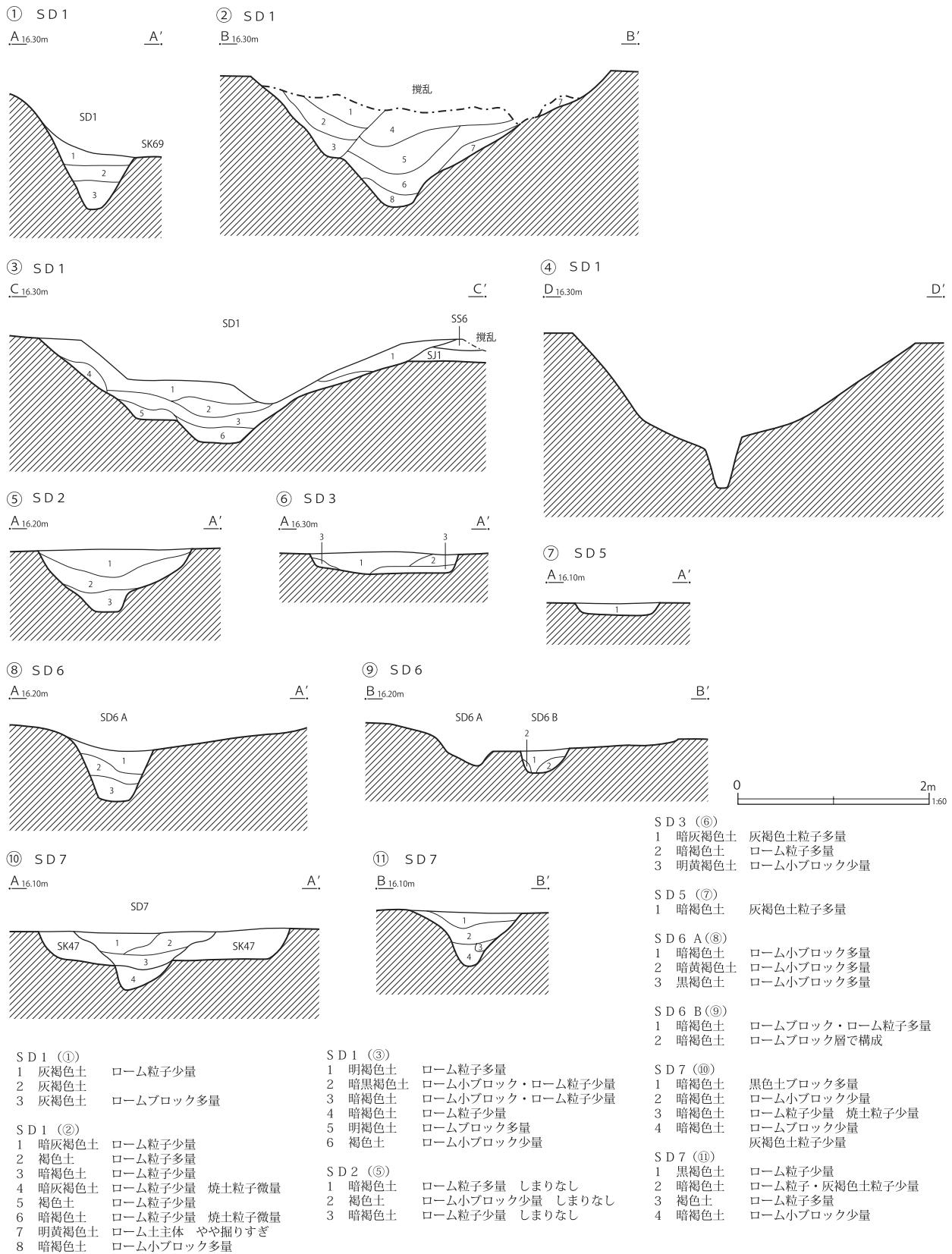
と思われる。出土遺物は第 106 ~ 109 · 111 図及び第 19 · 20 表に示した。

第 1 号溝跡（第 104 · 105 図）

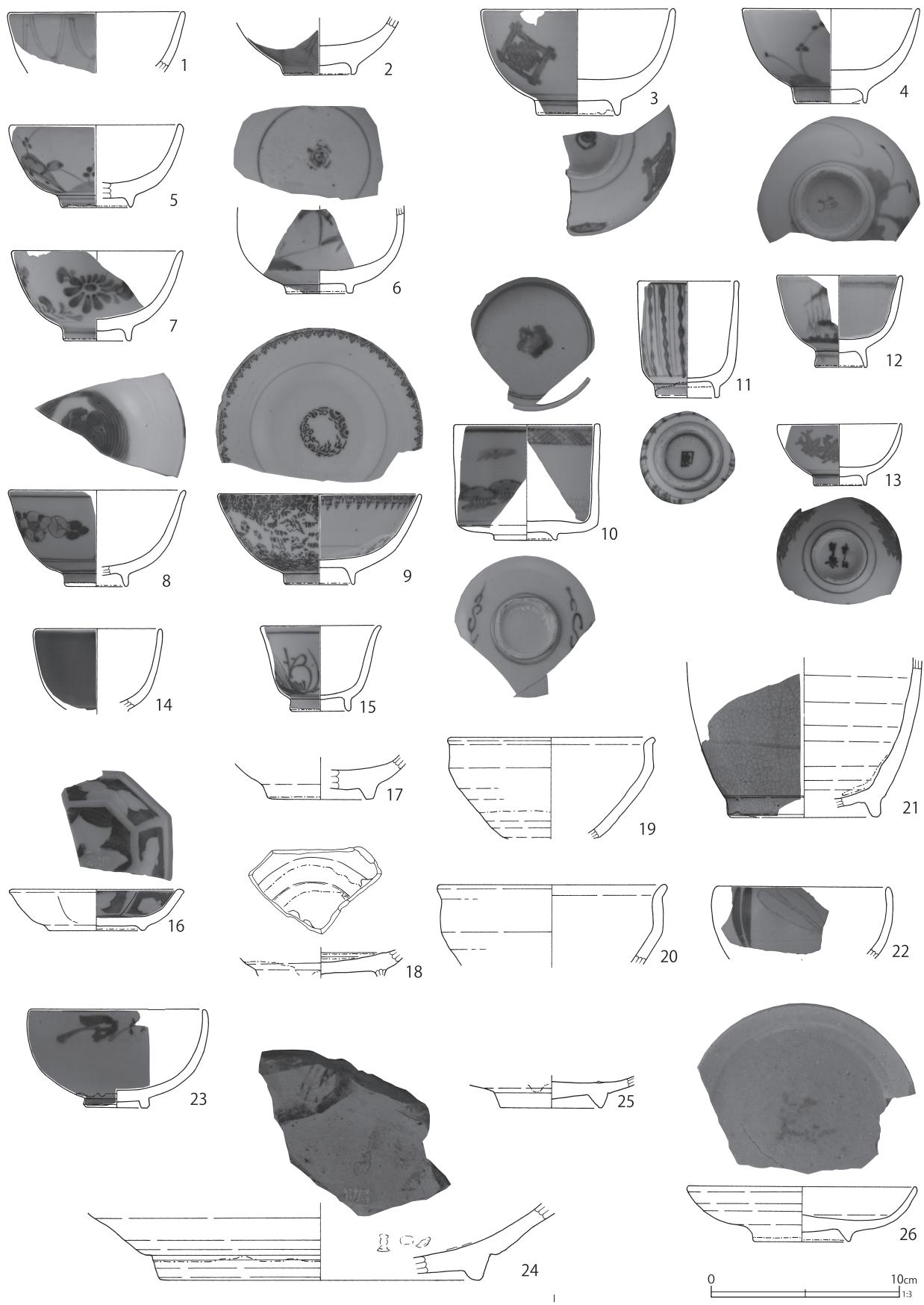
J - 11 グリッドから北西方向に走向し、G - 8 グリッドで南西方向に直角に屈曲し、I - 6 グリッドに達する。調査区を四分割するように掘削される。



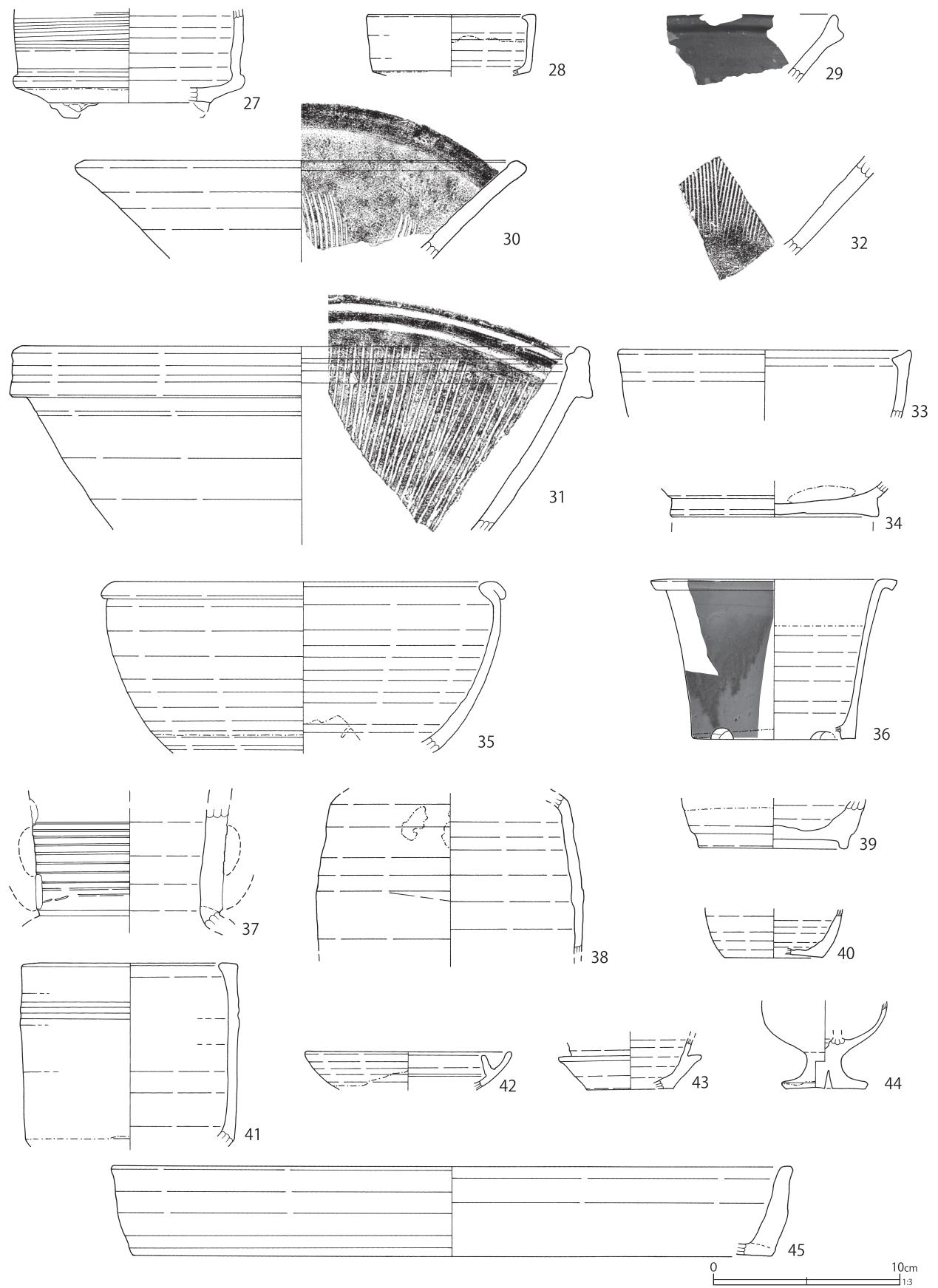
第 104 図 溝跡断面位置図



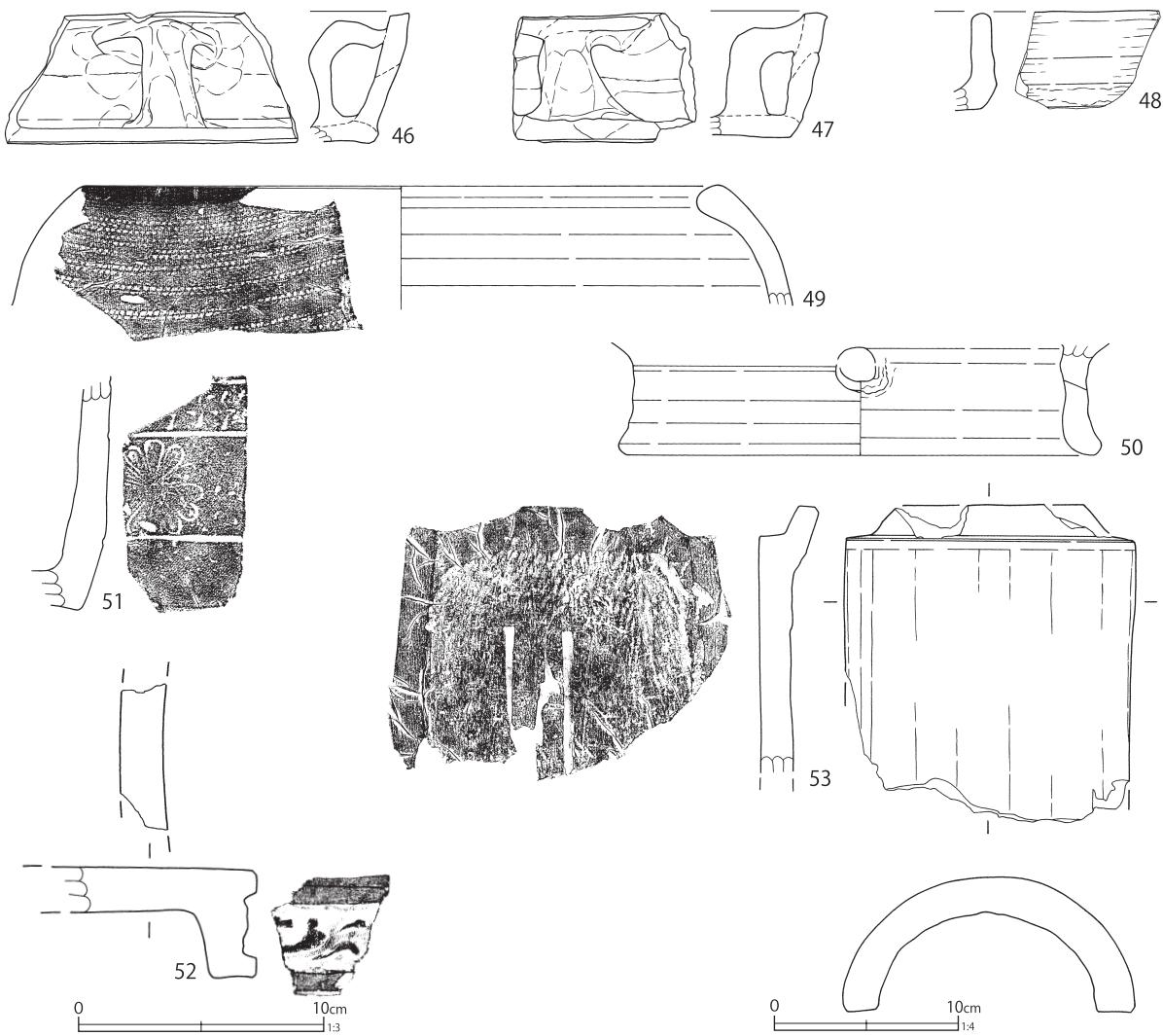
第 105 図 溝跡 (1)



第106図 第1号溝跡出土遺物（1）



第107図 第1号溝跡出土遺物（2）



第108図 第1号溝跡出土遺物（3）

重複する多くの遺構に後続するが、第69号土壙には先行する。溝跡のコーナー内側には古墳跡の墳丘部が溝跡に接するように位置し、第6号溝跡も墳丘部へ走向することを併せれば、第1号溝跡の掘削時には墳丘盛土が一部残存していた可能性がある。断面は薬研形で、底面にはさらに一段階掘り下げた溝が確認できる。溝跡の検出長79.0m、幅2.95～3.90m、深さはほぼ一定して1.45mを測る。溝跡はほとんど埋まった状態から一度掘り直された（第105図断面②、③）。中・近世の溝跡の中では早い段階に掘削され、後続する他の溝跡は第1号溝跡を基準に掘削されたと思われる。

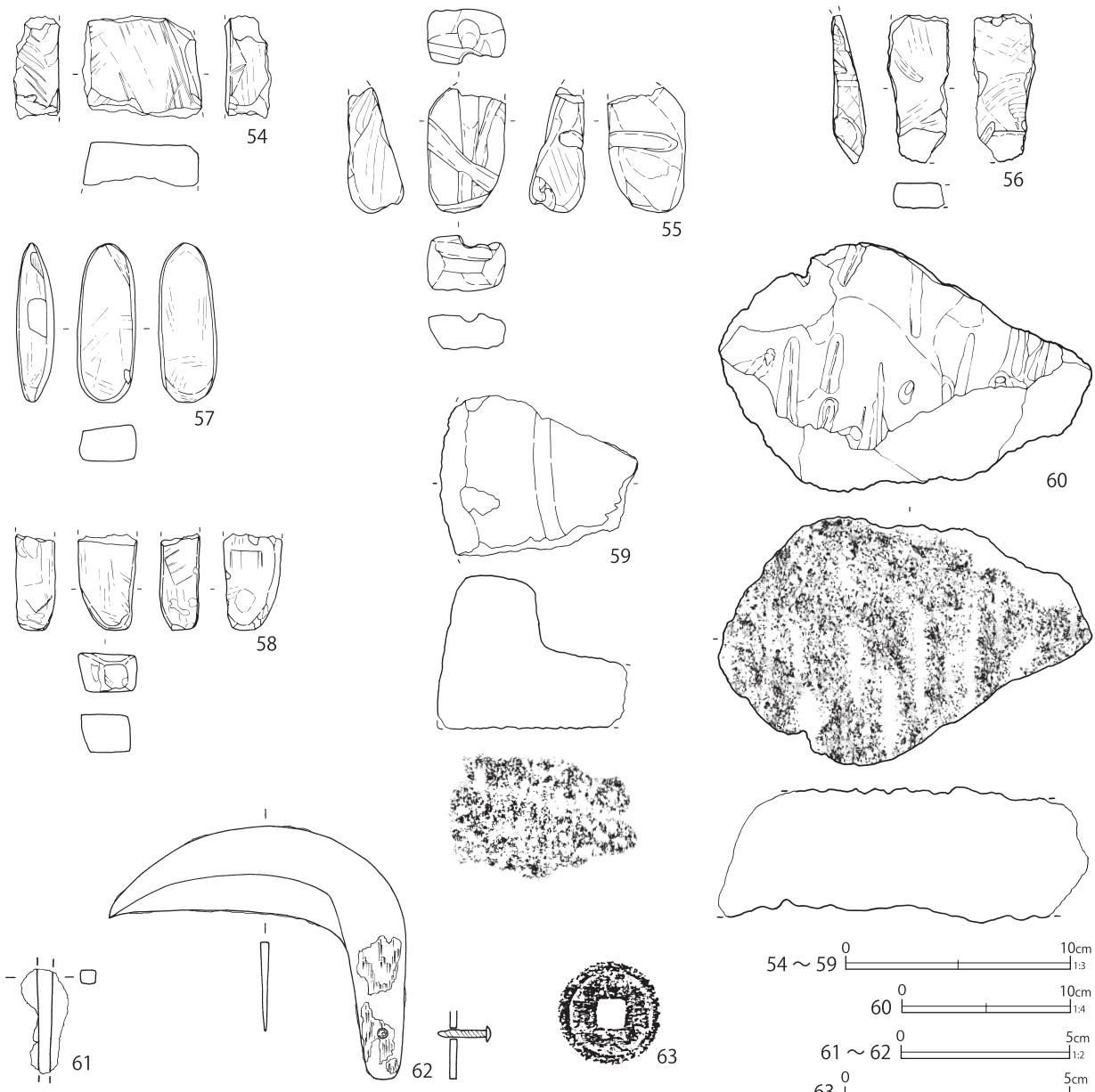
溝跡からは多量の陶磁器・石製品等が出土した。古いものでは16世紀に遡るもののが一定量見られ、

一方で19世紀後葉に位置づけられる遺物も出土した。これらの遺物が直截的に遺構の時代的な幅を示すとすれば、掘削された16世紀から埋没した19世紀後葉まで、三世紀にわたる期間機能していた溝と考えられる。

図示した他に、輔羽口の破片が21点出土した。重複する第69号土壙で大量に見つかった鉄滓等に関わるものと思われる。

第2号溝跡（第104・105図）

調査区北側のD-8～E-6グリッドに位置する。調査区域外からN-56°-Eへ直線的に延び、第3号溝跡と並行し、第6号溝跡に直交するよう接続される。このため、第6号溝跡に後続する可能性が高い。断面は薬研形で、検出長は23.34m、



第109図 第1号溝跡出土遺物（4）

幅は0.8～2.4m、深さは0.48～0.81mを測る。

遺物は出土していない。

第3号溝跡（第104・105図）

調査区北側のC-8～D-6グリッドに位置する。調査区域外からN-53°-Eへ第2号溝跡と並行し、第6号溝跡に直交するように接続されている。断面は逆台形で、検出長は18.4m、幅は1.2～1.8m、深さは0.12～0.21mを測る。

遺物は出土していない。

第5号溝跡（第104・105図）

調査区東側のI-11グリッドに位置する。N-15°-W方向に走向する。重複する遺構はない。断面は逆台形で、検出長は6m、幅1.0～0.72m、深さ0.10～0.13mを測る。

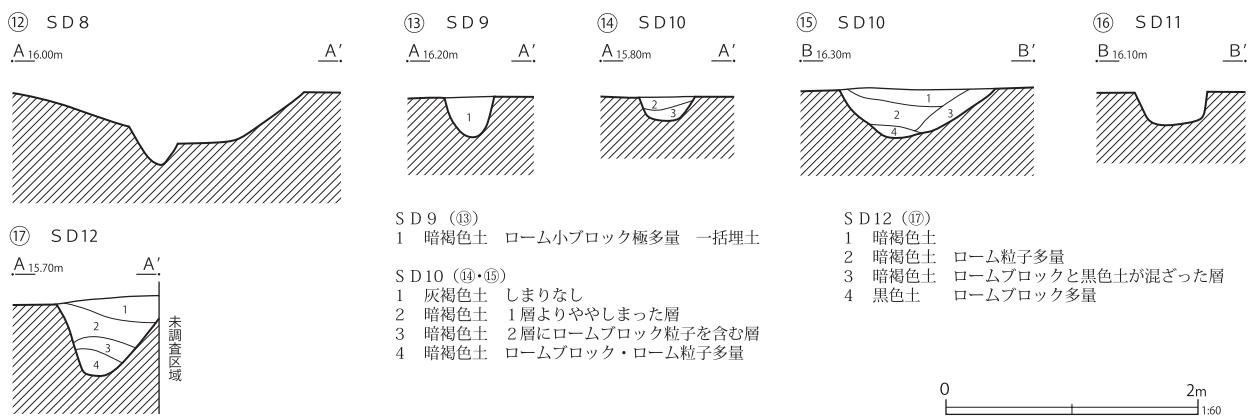
遺物は出土していない。

第6号溝跡（第104・105図）

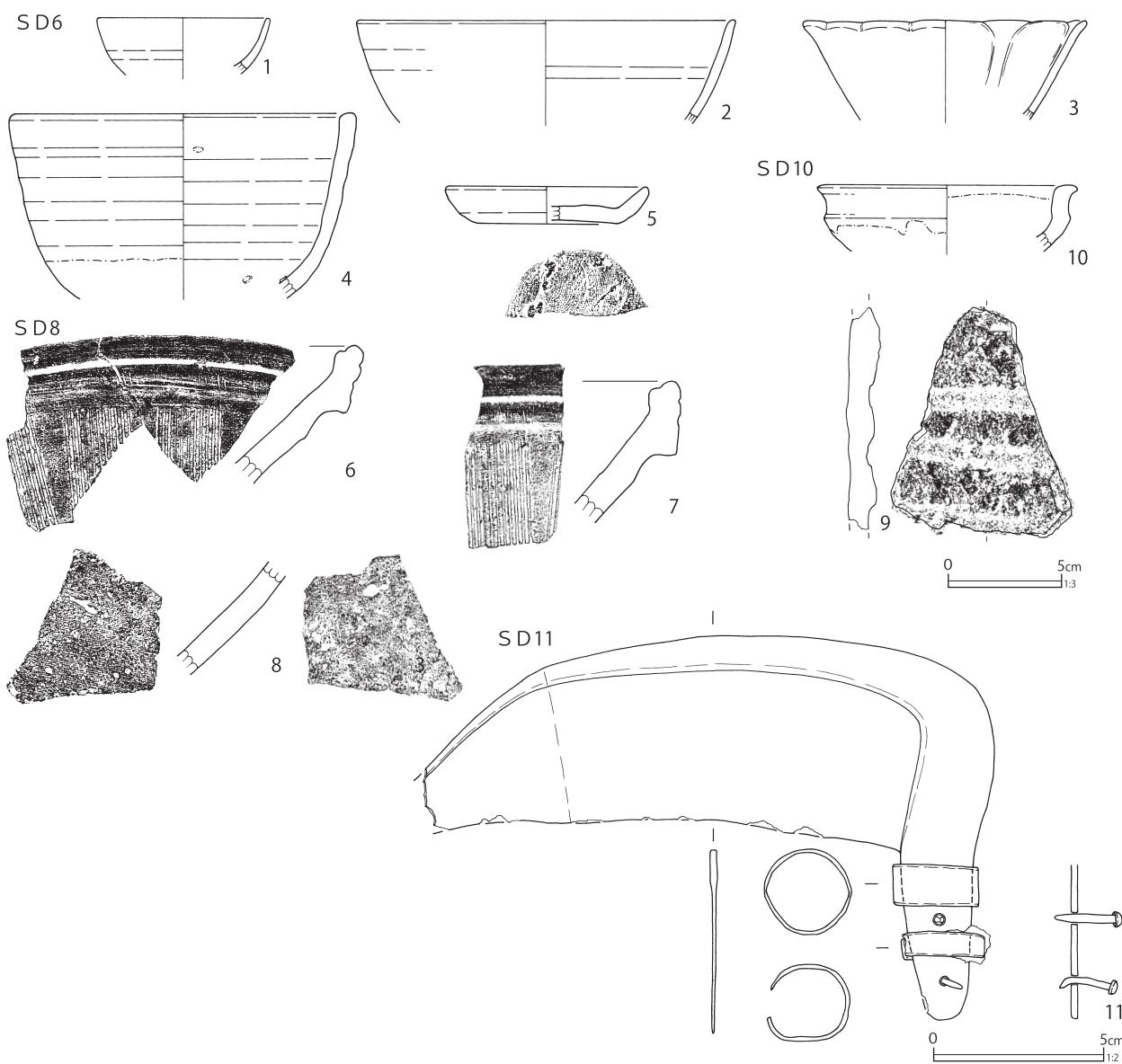
調査区北西側のE-6～G-8グリッドに位置する。N-35°-W方向に走向し、第1号溝跡に接続されると見られる。第2・3・7・8号溝跡がそれぞれ垂直に接続される。F-G-7・8

第19表 第1号溝跡出土遺物観察表（第106～109図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
1	磁器	碗	(9.2)	[3.2]	—	I	15	普通	白	J-11 肥前 内外面施釉 外面染付(二重網目文) 17c後～18c前	26-1	
2	磁器	碗	—	[3.0]	3.7		55	普通	白	J-11 肥前 内外面施釉 外面染付(二重網目文) 17後～18c前	26-2	
3	磁器	碗	(10.1)	5.6	(4.2)		30	普通	白	J-11 肥前系 内外面施釉 外面染付(コンニヤク判) 18c前～中	26-3	
4	陶器	碗	(9.2)	4.9	3.7		45	普通	白	J-11 肥前系 内外面施釉 外面染付 18c	26-4	
5	磁器	碗	(9.0)	4.3	(3.6)		45	普通	白	J-11 肥前 内外面施釉 外面染付 18c	26-5	
6	磁器	碗	—	[4.6]	(3.4)		35	普通	白	I-11 肥前 内外面施釉 外面染付 18c後	26-6	
7	磁器	碗	(9.0)	4.8	3.4	I	55	普通	白	I-10 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付 19c前	26-7	
8	磁器	碗	(9.2)	5.1	(3.2)		20	普通	白	G-9 濑戸美濃系 内外面施釉 外面色絵 内面染付 19c後	26-8	
9	磁器	碗	10.6	4.8	3.6		60	普通	白	I-6 濑戸美濃系か 内外面施釉 型紙摺絵 19c後	26-9	
10	磁器	碗	(7.6)	6.1	(3.3)		40	普通	白	G-8 肥前系 内外面施釉 染付 18c後	26-10	
11	磁器	碗	(5.2)	6.1	3.2		40	普通	白	I-8 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付(酸化コバルト)	26-11	
12	磁器	小坯	6.5	4.8	2.6		70	普通	白	I-10 肥前 内外面施釉染付 17c中～後	26-12	
13	磁器	小坯	6.5	3.2	(2.6)		70	普通	白	I-8 肥前 内外面施釉 外面染付 高台内銘あり 18c前	26-13	
14	磁器	小坯	(6.6)	[4.3]	—		30	普通	白	I-10 濑戸美濃系 内外面施釉 外面コバルト釉 19c前	26-14	
15	磁器	小坯	(6.4)	4.5	3.1	I	55	普通	白	G-7 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付(手描き) 19c後	26-15	
16	磁器	変形皿	(8.8)	2.2	(5.0)	I	25	普通	白	H-7 濑戸美濃系 八角形 高台円形 内外面施釉 内面染付 19c前	26-16	
17	陶器	碗	—	[2.4]	(5.6)	HI	45	普通	浅黄橙	G-8 肥前系か 内外面乳白色の不透明施釉	26-17	
18	陶器	皿	—	[1.5]	—	HIK	20	普通	灰白	J-11 濑戸美濃系 内外面鉄釉 内底面輪禪げ 16c	27-5	
19	陶器	天目茶碗	(10.8)	[5.4]	—	I	5	普通	灰白	H-7 濑戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第2段階	26-18	
20	陶器	天目茶碗	(11.9)	[4.3]	—	K	15	普通	灰白	G-9 濑戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第4段階	27-1	
21	陶器	瓶類	—	[8.4]	(7.8)	EIK	20	普通	白	I-10 肥前系 外面施釉 染付 内面酸化	27-6	
22	陶器	碗	(9.0)	[3.8]	—		20	普通	灰白	I-10 京都信楽系 内外面灰釉 外面色絵(赤) 18c中	27-2	
23	陶器	碗	(9.2)	5.2	3.3		45	普通	灰白	J-11 京都信楽系 内外面灰釉 外面鉄絵 18c	27-3	
24	陶器	大皿	—	[4.0]	(17.0)	HIK	10	普通	灰白	J-11 濑戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵 目跡 17c(太平鉢)	27-4	
25	陶器	皿	—	[1.6]	5.4	I	80	良好	黄灰	I-10 濑戸美濃系か 胎土柘器質 内外面灰釉 直重ね焼き痕 17c中～後	27-7	
26	磁器	皿	(11.9)	2.9	5.0		65	普通	白	J-11 濑戸美濃系 内外面灰釉 内底面摺り絵(青) 18c後	27-8	
27	陶器	香炉	—	[5.7]	—	I	20	普通	浅黄	G-9 濑戸美濃系 内外面鉄釉 18c中	27-9	
28	陶器	香炉	(8.9)	[3.3]	—	I	20	普通	灰黄	I-10 濑戸美濃系 内面上位～外面灰釉	27-10	
29	陶器	擂鉢	—	[3.7]	—	HI	5	普通	浅黄	I-10 濑戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第1段階 16c前	27-11	
30	陶器	擂鉢	(23.0)	[5.3]	—	GI	20	普通	灰白	J-11 濑戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目	27-12	
31	陶器	擂鉢	(29.4)	[9.8]	—	GI	15	普通	明赤褐	I-10 堆明石系 内外面擂目 一単位6本 断面・内外面煤付着	27-13	
32	陶器	擂鉢	—	[5.3]	—	I	5	普通	浅黄	H-7 益子系 内外面鉄釉 内面擂目 19c中～後	27-14	
33	陶器	片口鉢	(15.5)	[3.6]	—	IK	20	普通	灰白	I-10 濑戸美濃系 内外面灰釉 口縁部一部煤付着 18c	27-15	
34	陶器	こね鉢	—	[2.4]	(14.8)	EI	30	普通	灰白	H-10 濑戸美濃系 内外面灰釉 底内面目跡 高台内墨痕あり(判読不能)	27-17	
35	陶器	こね鉢	(27.0)	[12.3]	—	HI	20	普通	灰白	H-10 濑戸美濃系 灰外面灰釉	27-16	
36	陶器	植木鉢	(17.6)	11.4	(11.6)	HIK	25	普通	灰白	I-10 濑戸美濃系 内外面灰釉 高台部にU字状切れ込み	28-1	
37	陶器	花瓶	—	[6.3]	—	H	20	良好	灰白	J-11 美濃系 外面鉄釉(柿鉢) 双耳部欠失 内面煤付着	28-2	
38	陶器	徳利	—	[8.5]	—	I	20	普通	灰白	J-11 濑戸美濃系 内外面灰釉 18c	28-3	
39	陶器	徳利	—	[2.6]	(7.8)	I	30	普通	黄灰	H-7 濑戸美濃系 外面鉄釉 18c中	28-4	
40	陶器	徳利	—	[3.4]	(7.0)		35	普通	灰黄	G-9 美濃系 外面鉄釉 19c前	28-5	
41	陶器	半胴甕	(15.1)	[13.1]	—	HI	15	普通	淡黄	J-11 濑戸美濃系 内外面鉄釉	28-6	
42	陶器	燈明皿	(10.9)	[2.1]	—	I	20	普通	灰白	J-11 濑戸美濃系 内外面鉄釉 18c後～19c前	28-7	
43	陶器	玩具類	—	[2.6]	(4.6)		25	普通	橙	H-9 施釉土器 内面透明釉 外面鉄釉 外面下位白色塗布物あり	28-9	
44	陶器	秉燭	—	[4.7]	4.6	HI	90	良好	灰白	G-8 濑戸美濃系 内外面鉄釉 底部糸切痕(右)	28-8	
45	瓦質土器	焙烙	(35.9)	4.8	(34.0)	CHI	5	普通	灰白	J-11 体部下面下位ヘラケズリ 底部シワ状痕 体部外面煤付着	28-10	
46	瓦質土器	焙烙	—	[5.3]	—	IK	5	普通	にぶい黄橙	J-11 体部下位狭いケズリ 底部シワ状痕 体部外面煤付着	28-11	
47	瓦質土器	焙烙	—	[5.1]	—	CEIK	5	普通	浅黄橙	J-11 体部下位狭いケズリ 底部シワ状痕 体部外面煤付着	28-12	
48	土師質土器	焙烙	—	3.8	—	CHI	5	普通	にぶい黄橙	J-10 内外面横ナデ 底部シワ状痕 煤付着	28-13	
49	瓦質土器	火鉢	(25.6)	[4.9]	—	I	10	普通	浅黄	G-8 外面ローラーによる文様 いぶした後ミガキ	28-14	
50	土師質土器	火鉢	—	[4.5]	(19.0)	CEHIK	25	良好	にぶい橙	J-11 高台部内外面強いヨコナデ 外面からの穿孔一箇所遺存	29-2	
51	瓦質土器	火鉢	—	[9.5]	—	HI	5	普通	灰	H-9 外面菊花文スタンプ	29-3	
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	備考	図版
52	瓦	軒棧瓦	[8.4]	[5.7]	—	I	5	普通	灰白	G-8 瓦当面均整唐草文	29-4	
53	瓦	丸瓦	[14.6]	6.4	13.9	K	85	普通	灰白	H-10 凸面側面ナデ 四面型痕跡	29-1	
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	石材	重さ/g			備考	備考	図版
54	石製品	砥石	[4.6]	5.3	2.0	流紋岩(砥沢か)	61.9			表・側縁部にV字状刃物痕		52-1
55	石製品	砥石	[5.6]	3.4	2.4	砂岩	47.5					52-1
56	石製品	砥石	6.6	2.7	1.5		32.4			前面に平タガネ痕跡		52-1
57	石製品	砥石	7.1	2.6	1.6	流紋岩(砥沢か)	42.8					52-1
58	石製品	砥石	[4.3]	2.6	1.8	流紋岩(砥沢)	29.2			表・裏・側縁部に櫛歯タガネ痕跡		52-1
59	石製品	石臼(下臼)	[7.2]	[8.7]	6.9	安山岩	400.0			下面に摺目残る		52-1
60	石製品	加工石材	22.3	14.7	7.7	砂岩	2170.8					52-1
61	鉄製品	棒状品(釘か)	[3.1]	0.45	0.4		2.56					53-2
62	鉄製品	鎌	長さ8.8cm 刃幅2.6cm 背幅0.2cm				34.5					53-2
63	錢貨	寛永通寶	径2.3	厚さ0.11			2.1					53-2



第110図 溝跡(2)



第111図 第6・8・10・11号溝跡出土遺物

第20表 第6・8・10・11号溝跡出土遺物観察表（第111図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	小壺	(7.4)	[2.4]	—		20	普通	白	SD6 肥前系 内外面施釉 外面染付	29-6
2	磁器	鉢	(16.4)	[4.5]	—		20	普通	白	SD6 肥前系 内外面施釉	29-5
3	磁器	鉢	(12.1)	[4.3]	—		20	普通	白	SD6 肥前系 内外面施釉 口縁部輪花状	29-7
4	陶器	鉢	(14.8)	[8.1]	—	IK	20	普通	灰白	SD6 潤戸美濃系 内外面灰釉 外面緑釉流し掛け 18c	29-8
5	土器	かわらけ	(8.6)	1.6	(6.1)	CHIK	45	良好	浅黄橙	SD6 底部糸切痕(左) 胎土砂質	29-9
6	陶器	擂鉢	—	[6.1]	—	HI	5	普通	にぶい橙	SD8 塙明石系 内面擂目(1単位11本)	29-10
7	陶器	擂鉢	—	[4.8]	—	EI	5	普通	にぶい赤褐	SD8 塙明石系 内面擂目	29-11
8	陶器	片口鉢	—	[5.8]	—	EHI	5	普通	褐灰	SD8 常滑 内面使用により摩耗 破損後側縁部二次利用(転用砥具)	29-12
9	石製品	板碑	長さ12.0cm 幅7.8cm 厚さ1.5cm 重さ137.8g 緑泥片岩						SD8 裏面押削り痕(幅9mm) 表面は剥離	52-1	
10	陶器	香炉	(10.5)	[2.9]	—		15	普通	灰白	SD10 古瀬戸 内外面上位灰釉 後IV期	29-13
11	鉄製品	鎌	長さ[16.8]cm 刃幅5.4cm 背幅0.2cm 重さ129.5g						SD11	53-2	

グリッドでは掘り直しと見られる並走した2条の溝となる。南西側を第6号溝跡A、北東側を第6号溝跡Bと呼称する。Bが掘り直された溝である。断面はA・Bともに逆台形、検出長は27m、幅2.48～3.00m、深さはAとBで異なり、Aは0.31～0.83m、Bは0.37～0.43mである。

第7号溝跡（第104・105図）

調査区西側のE-6～G-4グリッドに位置する。N-53°-E方向に走向し、第6・9号溝跡に接続される。重複する第47土壙に後続する。第6号溝跡には後続するか、ほぼ同時期と思われる。F-5グリッドでは幅1mの陸橋状に掘り残されている。断面は薬研形で、検出長は29.4m、幅1.3～1.4m、深さ0.6～0.7mを測る。

遺物は出土していない。

第8号溝跡（第104・110図）

調査区北西のD-6～E-5グリッドに位置する。N-51°-E方向に走向し、西側は調査区域外へ延びる。第6・12号溝跡に接続される。第7号溝跡に並行し、かつ同様の規模であり、同時期と思われる。断面は薬研形で、検出長は12.1m、幅1.30～1.98m、深さは0.58mを測る。

第9号溝跡（第104・110図）

調査区北西側のE-6～G-8グリッドに位置する。N-41°-W方向に走向し、第7号溝跡に垂直に接続される。第1・6・7号溝跡によって区画される空間にヤドロが敷かれ（第3図①）、

耕作地が想定できることから、根切り溝の可能性がある。断面形は「U」字状で、検出長は20.2m、幅0.32～0.50m、深さは0.27～0.31mを測る。遺物は出土していない。

第10号溝跡（第104・110図）

調査区南西側のH-8～J-6グリッドに位置する。N-50°-E方向に走向する。断面は逆台形で、検出長は24.2m、幅0.44～1.24m、深さは0.20mを測る。

出土遺物は第111図10に示した。古瀬戸の後IV期段階（15世紀中葉～末葉）の香炉であるため、中・近世の遺構の中で最も古い溝跡となる可能性がある。一方で第1号溝跡を契機とする土地区画の方向と合致しているため、混入の可能性もある。

第11号溝跡（第104・110図）

調査区南西側のJ-7～K-8グリッドに位置する。N-41°-W方向に走向する。重複する遺構はない。断面は逆台形で、検出長は11.9m、幅0.24～0.60m、深さは0.05～0.31mを測る。

第12号溝跡（第104・110図）

調査区北西側のD-6グリッドに位置する。N-25°-W方向に走向し、北西へ延びると思われるが、大半は調査区域外である。第8号溝跡に接続される。第6号溝跡Aの延長線上に位置するが、接続はされないため別遺構とした。断面は薬研形で検出長は0.86m、幅1m、深さは0.57mを測る。

遺物は出土していない。

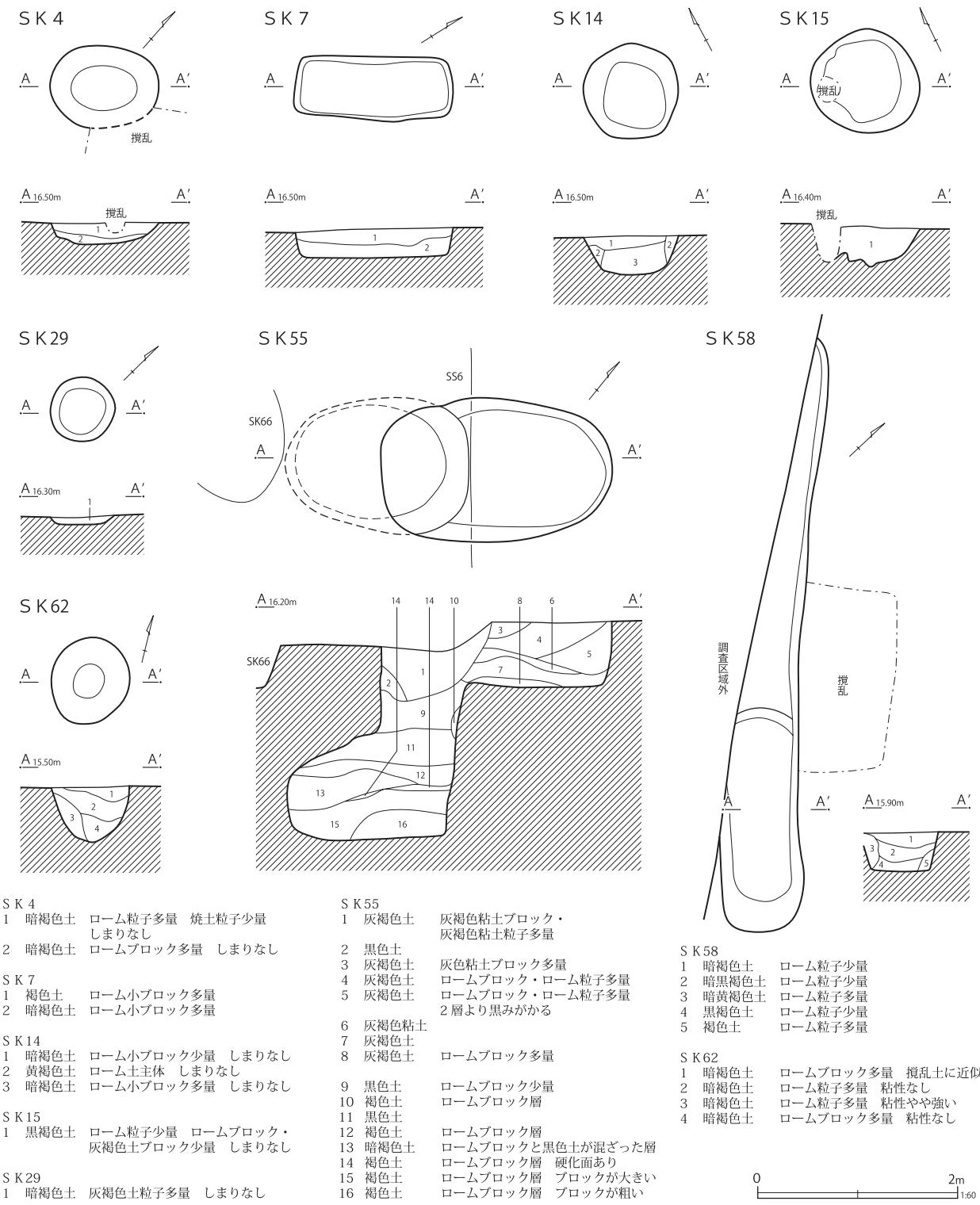
(2) 土壙

D-7、E・F-8・9、I-8グリッドなどで数基の集中がみられたが、規則性が捉えられなかったため、それぞれ単独の遺構と判断した。各土壙の規模等詳細については第21表に記載し、土

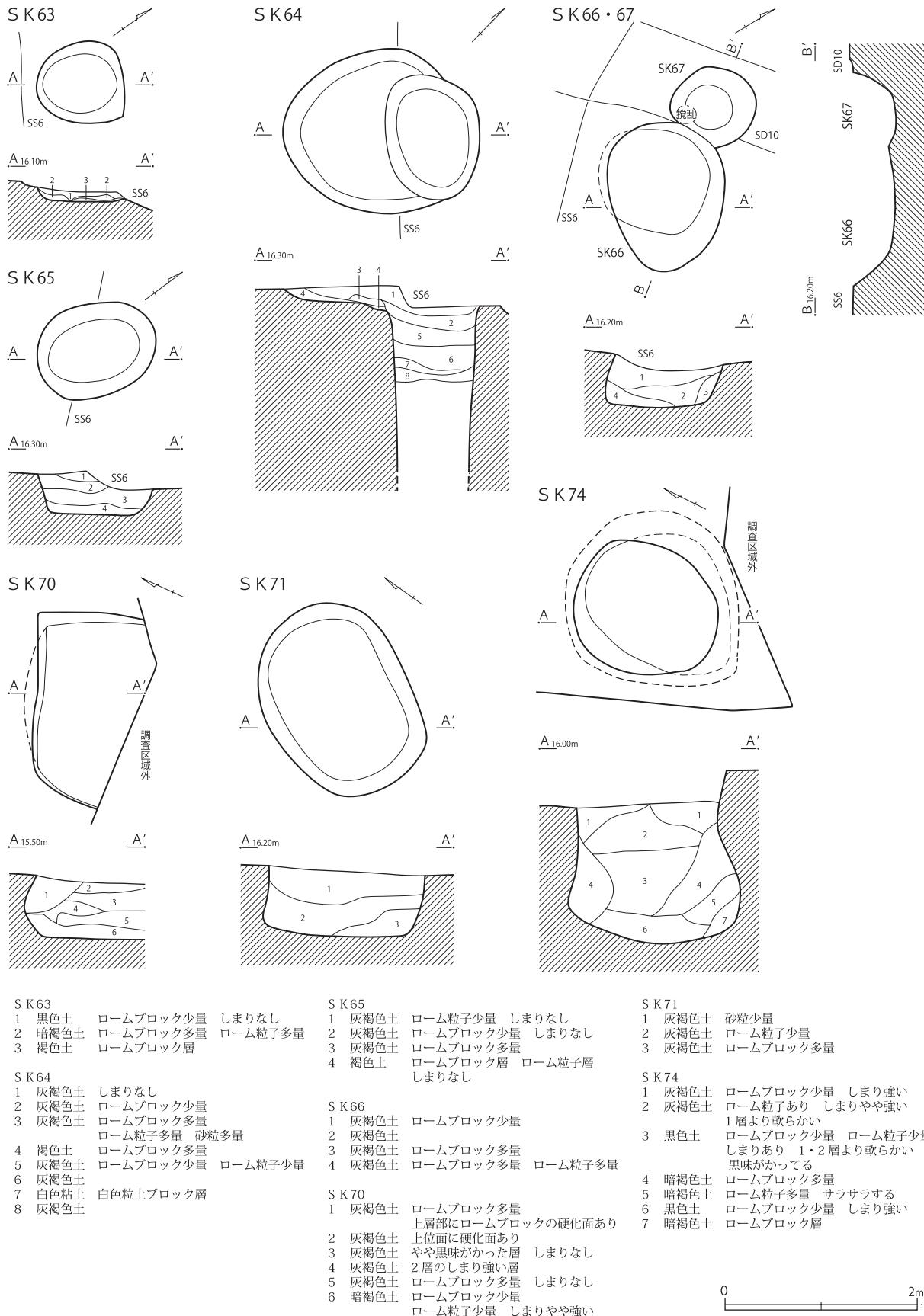
壙の形状・出土遺物の特徴的なものについてのみ記述する。また、出土した遺物は第115～121図に示した。

第7号土壙 (第112図)

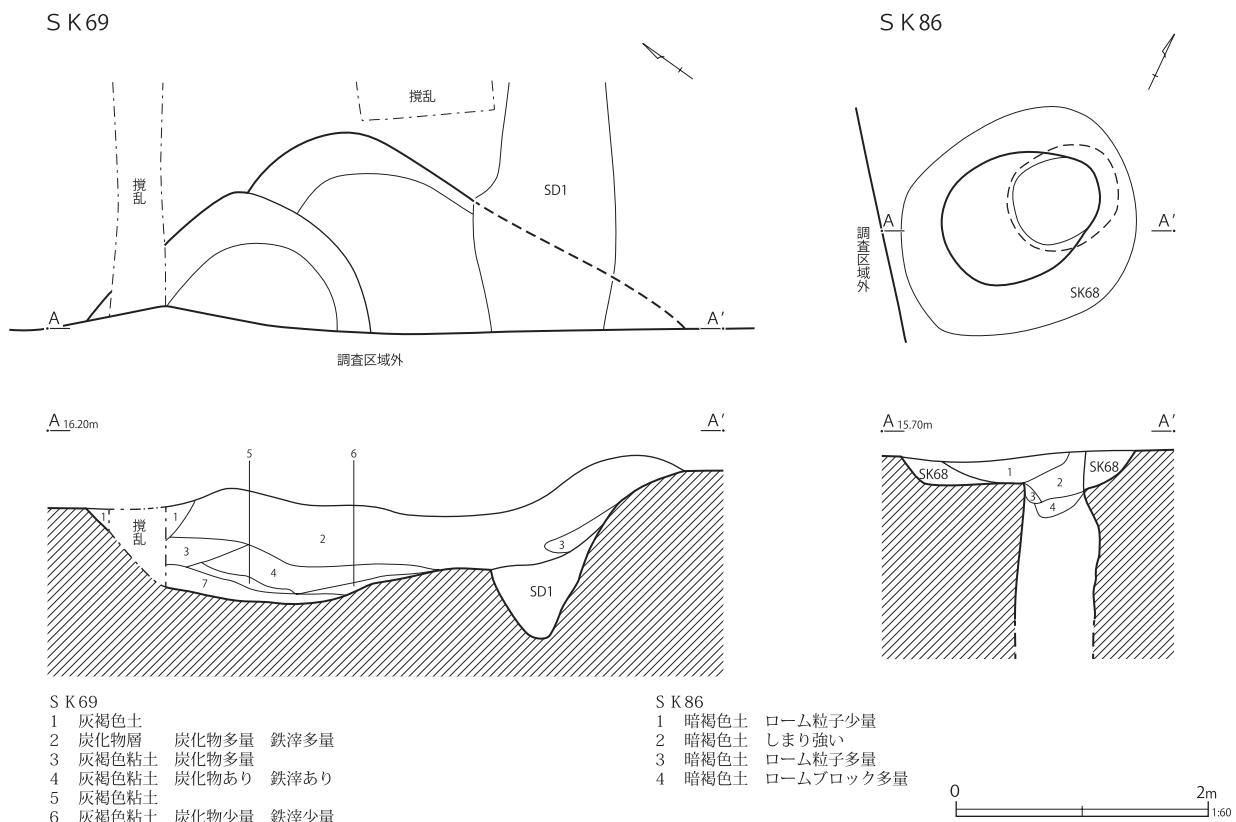
調査区北側のE-9グリッドに位置する。長方



第112図 土壙 近世 (1)



第 113 図 土壌 近世 (2)



第114図 土壌 近世（3）

第21表 土壌一覧表

遺構名	グリッド	重複	平面形	長軸方位	長軸/m	短軸/m	深さ/m	遺物	図版
4号土壙	F-9		楕円形	N- 49° -E	1.08	0.80	0.23		
7号土壙	E-9		隅丸方形	N- 30° -E	1.58	0.64	0.3		
14号土壙	E-8		円形	N- 62° -W	0.94	0.94	0.39		
15号土壙	E-8		円形	N- 64° -W	1.10	1.03	0.32		
29号土壙	F-8		円形	N- 43° -E	0.64	0.64	0.1		
55号土壙	I-8	SS 6 (旧)	楕円形	N- 53° -E	3.57	1.62	1.92	第115図 1~3	29-14・15 53-3
58号土壙	H-5		隅丸方形	N- 47° -W	6.00	0.80	0.39		
62号土壙	K・L-9		楕円形	N- 2° -W	0.88	0.97	0.55		
63号土壙	I-8	SS 6 (旧)	楕円形	N- 35° -E	0.90	0.85	0.15		
64号土壙	I-8	SS 6 (旧)	楕円形	N- 45° -E	2.02	0.72	(1.82)	第115図 4~8	30-1~4 52-2
65号土壙	I-8	SS 6 (旧)	楕円形	N- 18° -E	1.26	0.96	0.42	第115図 9・10	30-5~6 63-3
66号土壙	I-8	SS 6 (旧)	楕円形	N- 61° -W	1.54	1.22	0.56	第116・117図 1~35	30-7~31-13 52-2 54-1
67号土壙	I-8	SS 6(旧)・SD10(新)	円形	N- 30° -E	0.90	0.82	0.46		
69号土壙	I-5・6		不明	N- 54° -E	5.05	1.54	0.62	第118~121図 1~61	31-14~33-2 52-2 54-2 55~56
70号土壙	L-9		不明	N- 70° -E	2.04	1.10	0.65		
71号土壙	I-7・8		楕円形	N- 33° -E	2.04	1.50	0.69	第115図 11~14	30-5・6 52-2 53-3
73号土壙	欠番		—	—	—	—	—		
74号土壙	L-8		不明	N- 24° -W	1.60	1.18	1.44		
84号土壙	H-8	SS 6~統合(旧)	楕円形	N- 2° -E	1.00	0.32	0.61		
86号土壙	I-6	SK68 (旧)	円形	N- 36° -E	0.91	0.80	(1.31)		

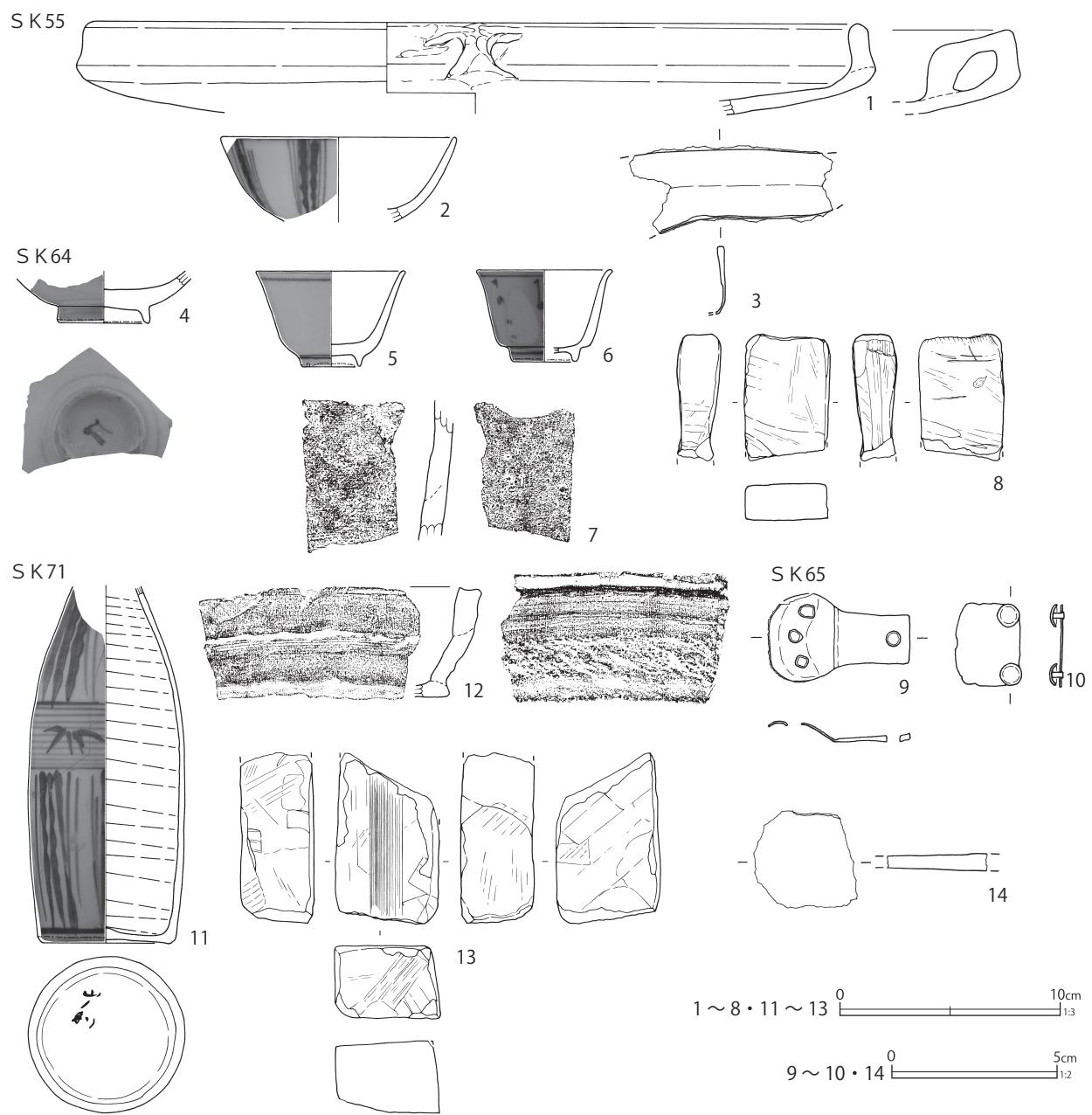
形に掘削され、覆土にはロームブロックが多量に含まれることから、遺構の埋め戻しが想定できる。薬師堂遺跡など近隣の遺跡の調査事例からは土壙墓の可能性が考えられるが、周囲に同様の遺構は検出されていない。

遺物は出土していない。

第55号土壙（第112図）

調査区中央のI-8グリッドに位置する。地下

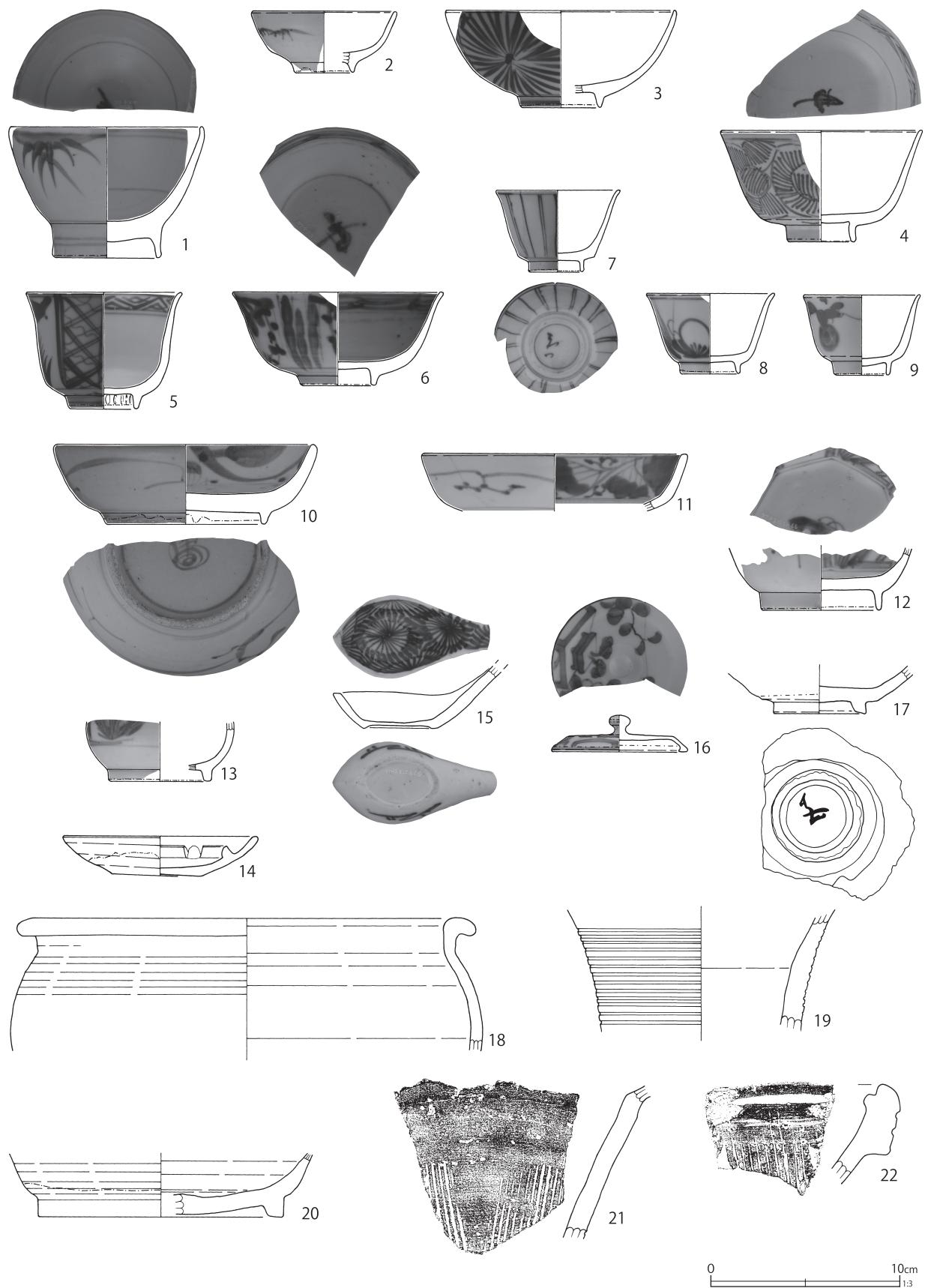
式坑と思われる。1~7層は別遺構の可能性があるが、層序から同一遺構とした。平面はI字状を呈する。開口部は長軸2.3m、幅1.45m、深さ0.65mを測り、楕円形の土壙状に落ち込む。堅坑は確認面から1.1mまでほぼ垂直に下がり、以下は急激にオーバーハングする。主室の規模は長軸1.6m、幅1.35m、底面から天井までは約1m、確認面から底面までは2.14mを測る。



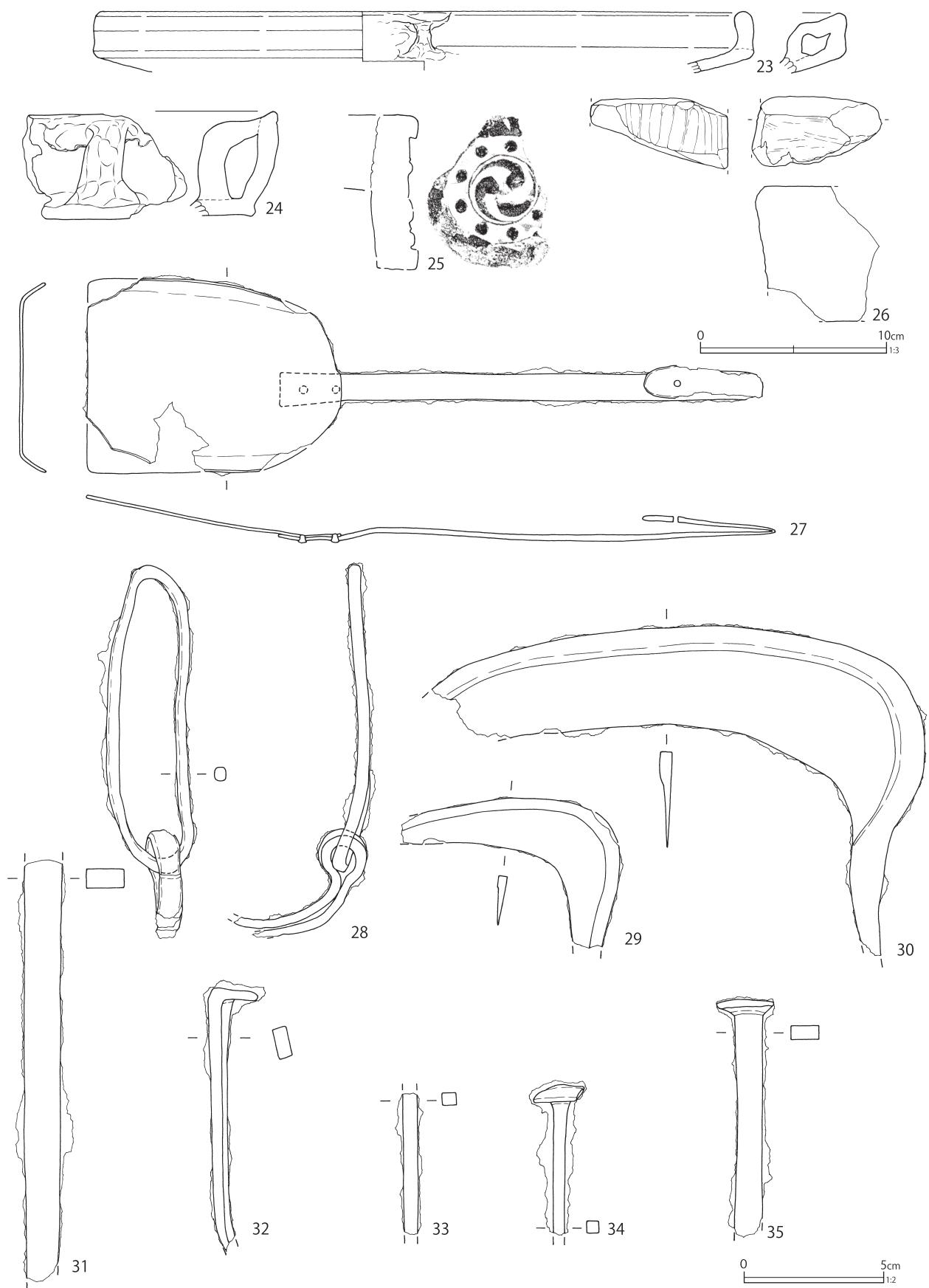
第115図 第55・64・65・71号土壤出土遺物

第22表 第55・64・65・71号土壤出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	備考		図版
									重さ/g		
1	土師質土器	焰烙	(34.4)	[4.1]	—	HIK	15	普通	にぶい橙	SK55 内耳一遺存 体部内外面煤付着	29-15
2	磁器	碗	(10.5)	[3.8]	—	I	20	普通	白	SK55 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付 (酸化コバルト)	29-14
4	磁器	碗	—	[2.3]	(4.0)	IK	50	良好	白	SK64 肥前系 内外面施釉 外面染付 18c	30-1
5	磁器	小壺	6.6	4.3	7.5	—	95	不良	白	SK64 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付 (酸化コバルト)	30-2
6	磁器	小壺	(6.0)	4.1	(2.8)	I	25	普通	白	SK64 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付 (酸化コバルト)	30-3
7	陶器	甕	—	[6.4]	—	HI	5	普通	褐灰	SK64 常滑 外面タテヘラナデ	30-4
11	磁器	徳利	—	[6.1]	5.7	K	95	普通	白	SK71 濑戸美濃系 内外面施釉 外面染付 (手描き) 底部墨書 19c 後	30-5
12	瓦質土器	焰烙	—	4.9	—	HI	5	普通	灰白	SK71 外面下位 底部シワ状痕 外面煤付着	30-6
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	石材	重さ/g		備考		図版
8	石製品	砥石	5.8	3.9	2.0	流紋岩	65.9		SK64 ノコギリ痕か		52-2
13	石製品	砥石	7.7	4.8	3.3	凝灰岩	181.0		SK71 ノコギリ痕		52-2
3	鉄製品	容器の口縁か	[6.1]	2.3	0.2		9.8		SK55		53-3
9	銅製品	不明銅金具	4.2	2.6	0.15		6.8		SK65		53-3
10	銅製品	不明銅金具	2.5	[1.9]	0.05		1.7		SK65		53-3
14	鉄製品	のべ板状品	[2.9]	(3.0)	0.5		14.3		SK71		53-3



第 116 図 第 66 号土壤出土遺物（1）



第 117 図 第 66 号土壤出土遺物（2）

第23表 第66号土壌出土遺物観察表（第116・117図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.0)	[6.9]	(5.3)	HK	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 染付（広東碗）	30-7
2	磁器	碗	(7.5)	[3.2]	(3.0)	K	25	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 19c 前	30-8
3	磁器	碗	(11.9)	5.1	(4.0)	K	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付(酸化コバルト)	30-9
4	磁器	碗	(10.5)	[5.8]	3.5	IK	25	良好	白	内外面施釉 染付	30-10
5	磁器	碗	(8.0)	6.1	(3.4)	K	40	良好	白	内外面施釉 染付（酸化コバルト）	30-11
6	磁器	碗	(11.0)	[4.9]	(4.0)	IK	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 染付（端反碗）	30-12
7	磁器	小杯	6.5	4.3	2.4	HK	60	良好	白	内外面施釉 外面染付 上絵付(緑) 体部下位面取り	30-13
8	磁器	小杯	6.7	4.2	3.1	HIK	99	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付(酸化コバルト)	30-14
9	磁器	小杯	(6.1)	4.2	(2.9)	K	50	良好	白	外面クロム青磁釉 上絵付（緑・茶）	30-15
10	磁器	皿	(13.4)	[4.2]	(8.3)	IK	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 染付 18c	30-16
11	磁器	皿	(13.8)	[3.0]	—	K	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 染付 18c 後～19c 前	30-17
12	磁器	鉢	—	[3.3]	(6.0)	K	30	良好	白	肥前系 内外面施釉 染付（八角鉢） 19c 中	30-18
13	磁器	瓶類	—	[3.1]	(5.4)	K	20	良好	白	肥前系 外面施釉 染付	31-1
14	陶器	灯明皿	(10.0)	2.1	4.7	IK	80	良好	にぶい赤褐	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 外面煤付着 19c 前	31-5
15	磁器	蓮華	—	[3.3]	—	K	80	良好	白	内外面施釉 染付（酸化コバルト）	31-2
16	磁器	蓋	—	1.8	7.1	IK	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	31-3
17	陶器	碗	—	[2.5]	4.7	IK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面緑釉 高台内墨書	31-4
18	陶器	甕	(24.0)	[7.0]	—	IK	20	良好	暗赤褐	瀬戸美濃系 内外面柿釉	31-6
19	陶器	花瓶	—	[6.4]	—	IK	20	良好	灰白	美濃系 外面鉄釉（柿釉） 内面煤付着	31-7
20	陶器	徳利	—	[3.3]	(12.7)	HIK	45	普通	灰黄	瀬戸美濃系 外面灰釉 下部ふき取り 18c	31-8
21	陶器	擂鉢	—	—	—	IK	10	良好	にぶい褐	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目 18c	31-9
22	陶器	擂鉢	—	—	—	HIKL	10	良好	暗赤	堺明石系 内面擂目	31-10
23	瓦質土器	焰烙	(34.4)	[3.2]	—	HK	25	普通	にぶい褐	内耳遺存 外面煤付着	31-11
24	瓦質土器	焰烙	—	5.5	—	HIK	5	普通	黄灰	体部外面下位ケズリ 内耳遺存	31-12
25	瓦	軒瓦	—	—	—	CHIK	80	良好	にぶい黄橙	軒桟瓦 瓦当面珠文・三巴文	31-13
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	石材	重さ/g		備考	図版	
26	石製品	砥石	3.8	6.9	7.3	粘板岩	196.0		側縁部波板状の削り	52-2	
27	鉄製品	～ラ	3.8	6.9	7.3		196.1			54-1	
28	鉄製品	不明品	[13.4]	1.0	0.5		41.3			54-1	
29	鉄製品	鎌	[7.8]	—	—		20.7		刃幅1.8cm 背幅0.3cm	54-1	
30	鉄製品	鎌	[17.7]	3.4	0.4		103.1			54-1	
31	鉄製品	棒状品	[15.0]	1.4	0.7		59.8			54-1	
32	鉄製品	釘	[9.3]	1.1	0.5		30.8			54-1	
33	鉄製品	棒状品	[5.0]	0.5	0.5		3.1			54-1	
34	鉄製品	釘	[5.0]	0.5	0.5		3.1			54-1	
35	鉄製品	釘	[8.5]	1.0	0.5		27.5			54-1	

出土遺物から、時期は近世末と思われる。

第64号土壌（第113図）

調査区中央のI-8グリッドに位置する。井戸跡もしくは貯蔵穴の可能性があり、底面は確認できない。覆土は薄く平らに堆積している層が多く、自然堆積したものと思われる。

出土遺物から、時期は近世末と思われる。

第66号土壌（第113図）

調査区中央のI-8グリッドに位置し、重複する第67号土壌に後続する。平面形態は不整円形で、底面は平坦である。18世紀から19世紀中葉にかけての陶磁器類・鉄製品等が多量に出土している。遺物量が多く、ほとんどが破損していることから、廃棄土壌と思われる。

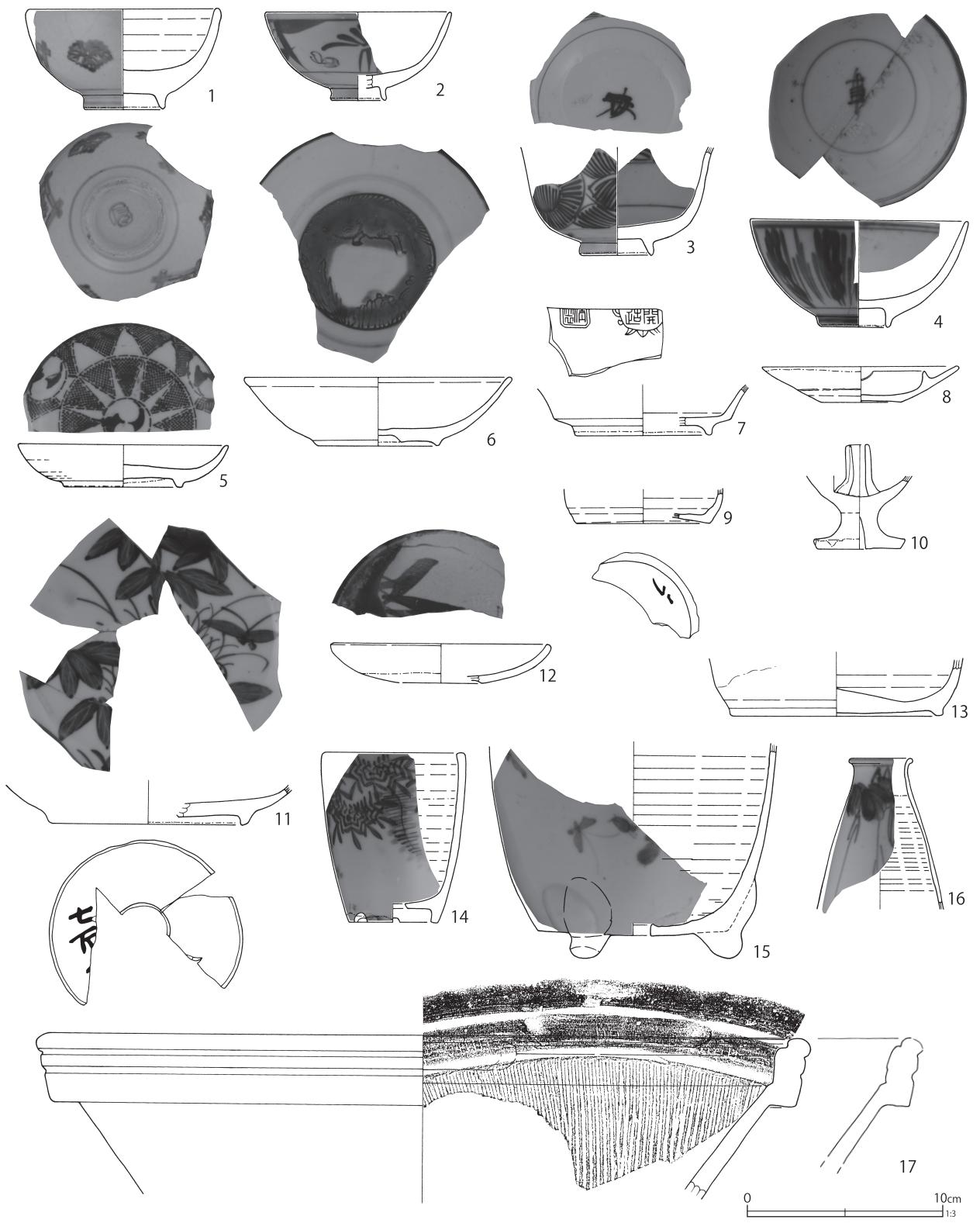
第69号土壌（第114図）

調査区南西のI-6グリッドに位置し、南西側

は調査区域外に延びている。重複する第1号溝跡に後続する。鍛冶関連の廃棄物が多く見られ、廃棄土壌と思われる。

第118～121図に出土遺物を図示した。

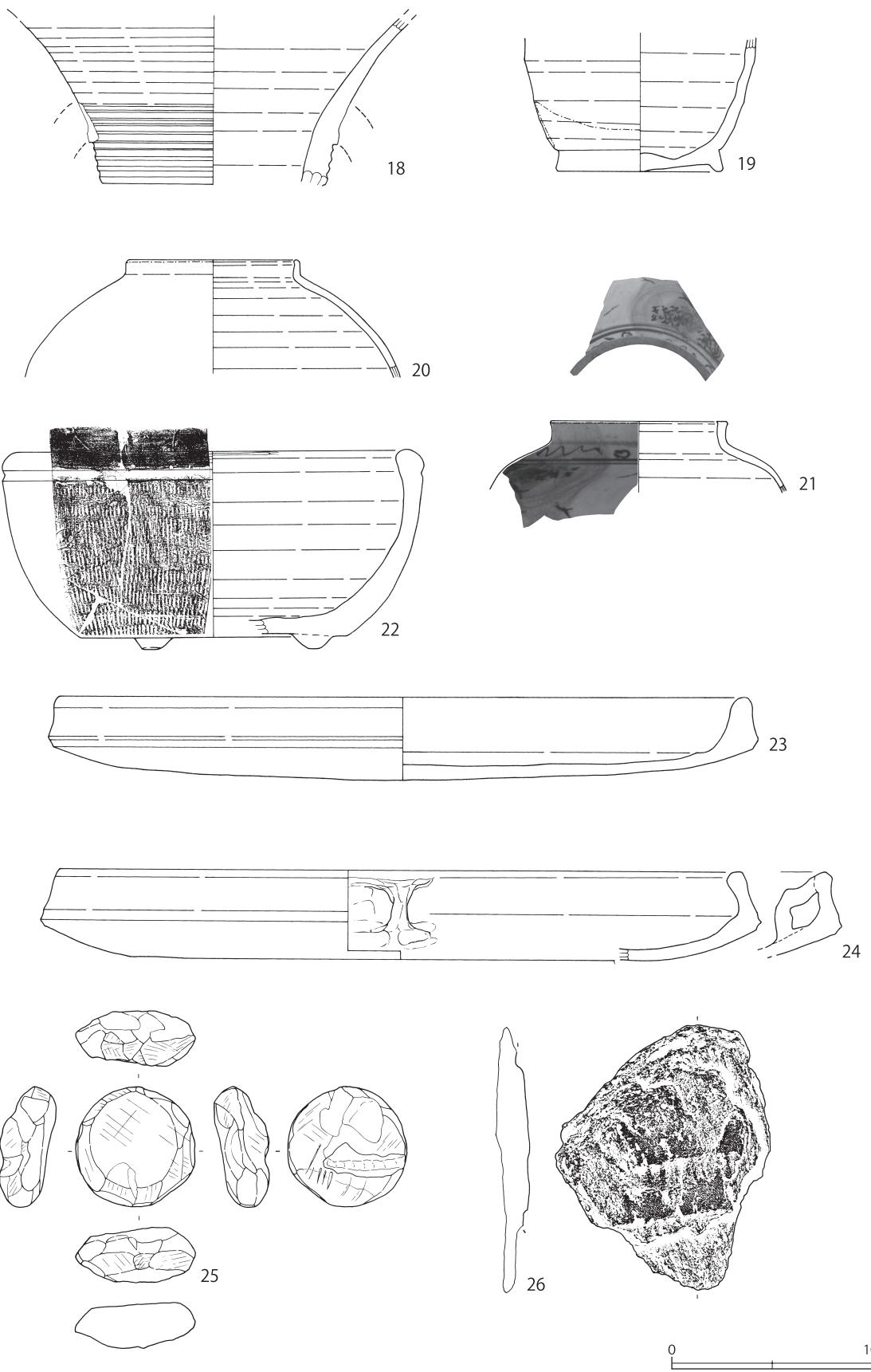
27～61の鍛冶関連遺物が注目される。27～32は轆羽口で、内面に皺状の痕が見られるから、棒状製品に板状の粘土を巻き付けて成形すると思われる。粘土の繋ぎ目から破損するのを恐れてか、巻き付ける粘土は複数枚の可能性がある。轆羽口は総計76点が出土した。33・34は鍛冶炉の炉壁の一部で、33には胎土に苟（スサ）が含まれていた痕跡が見られる。炉壁は総計57点が出土した。37～39は銚（ズク）の可能性がある。42～61は鉄滓で、鍛冶炉の底部に蓄積する椀形滓の一部である。総計261点の椀形滓と、219点の滓が出土し、これらの総重量は48.69kgに及ぶ。



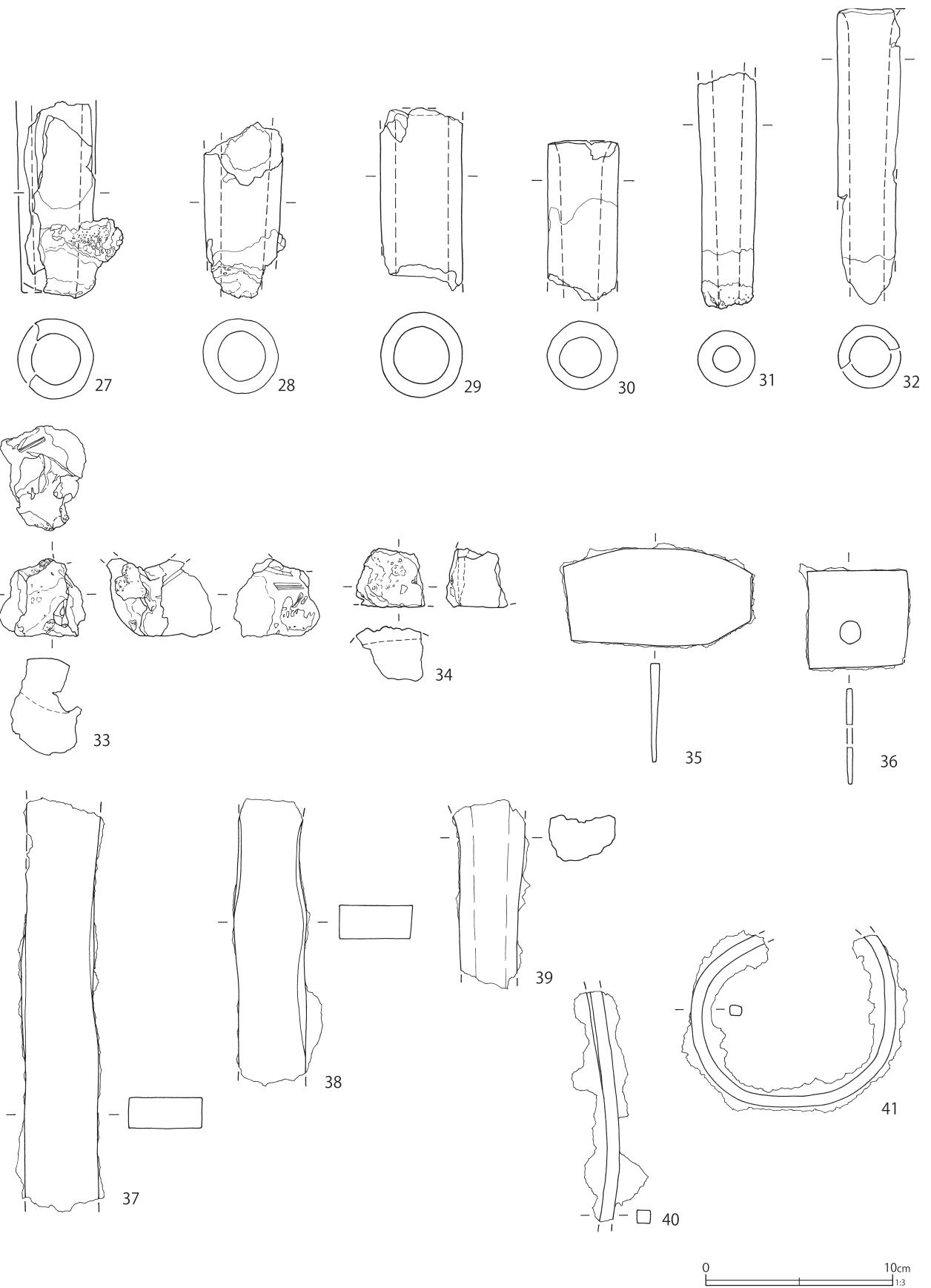
第 118 図 第 69 号土壙出土遺物（1）

また、楕形滓上部には、鍛造の際に飛び散る鉄片（鍛造剥片や粒状滓）が付着していた。これを抽出して篩にかけたところ、5mm大までの鍛造剥片

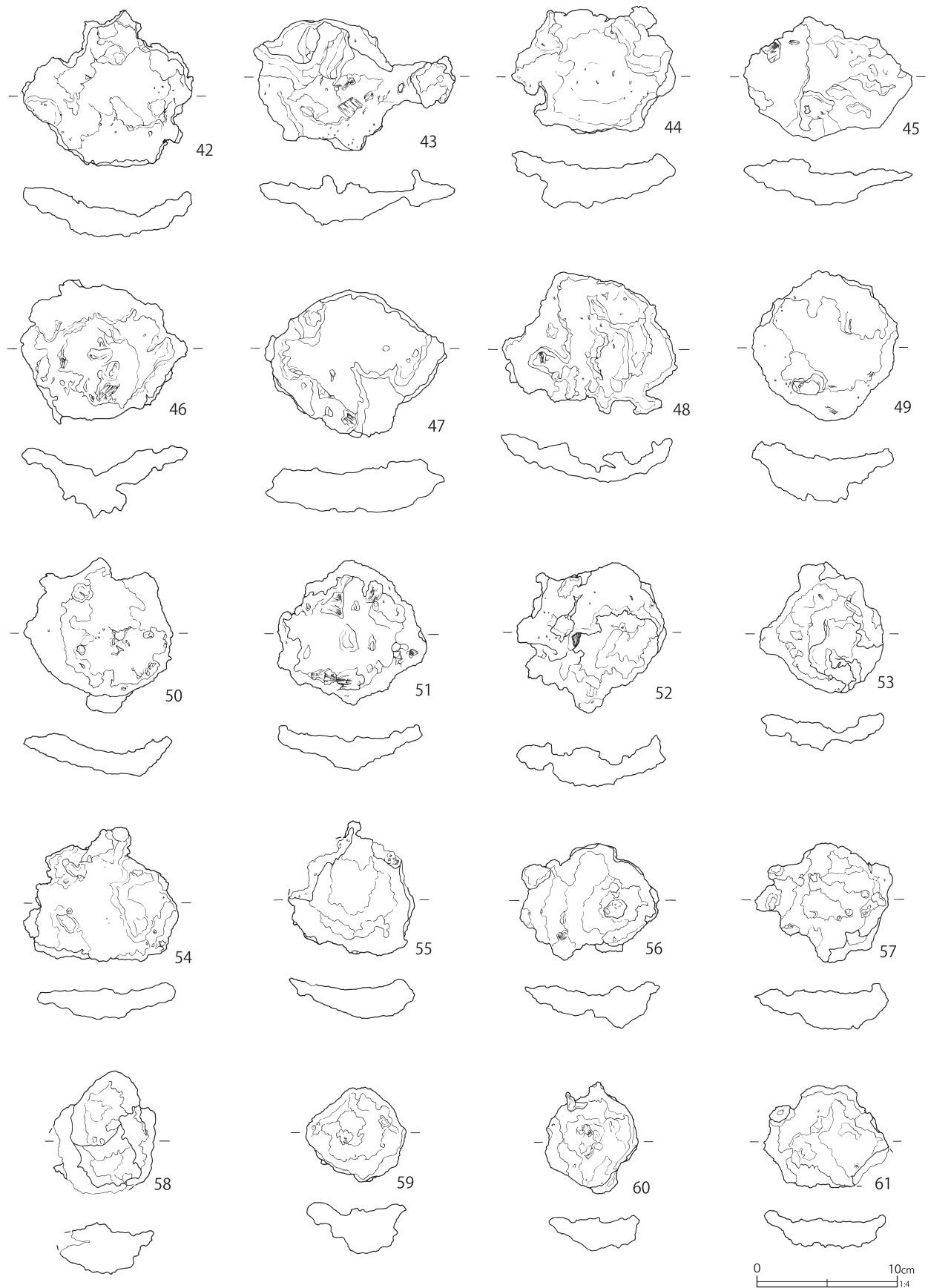
及び粒状滓が得られ、一部を図版 56-2～6 に示した。抽出した鍛造剥片は総計で 531.6g で、粒状滓は総計で 3.7g を量る。



第 119 図 第 69 号土壤出土遺物（2）



第120図 第69号土壤出土遺物（3）



第 121 図 第 69 号土壤出土遺物 (4)

第24表 69号土壙出土遺物観察表（第118～121図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
1	磁器	碗	9.6	5.1	3.9	I	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付(コンニヤク印判)	31-14	
2	磁器	碗	(9.6)	4.5	(2.7)		40	普通	白	高台内銘(渦福) 18c 内外面施釉 外面上絵付 口紅	31-15	
3	磁器	碗	—	[5.5]	3.5	I	55	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施 染付(酸化コバルト)	31-16	
4	磁器	碗	11.1	[5.4]	3.7	I	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付(酸化コバルト)	32-1	
5	磁器	皿	(10.6)	2.1	(5.9)		45	普通	白	内外面施釉 内面染付(型紙摺絵)	32-2	
6	磁器	皿	(13.6)	[3.4]	6.2	IHK	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付 口紅	32-3	
7	磁器	皿	—	[2.5]	(7.0)	IK	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押文	32-4	
8	陶器	灯明皿	10.0	1.8	4.0	HIK	55	良好	にぶい黄橙	京都信楽系 内面灰釉	32-5	
9	陶器	急須	—	[1.8]	(6.8)	I	30	普通	黄灰褐	常滑系か ロクロ成型 底部墨書	32-8	
10	陶器	秉燭	—	5.3	4.2	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系か 内外面鉄釉 底部糸切り痕(右) 穿孔	32-9	
11	磁器	皿	—	[20]	9.6		50	普通	白	瀬戸美濃系 底部蛇の目状高台 墨書	32-6	
12	陶器	皿	(10.7)	[2.0]	(4.2)	IHK	45	良好	灰白	内外面施釉 内面染付(酸化コバルト) 瀬戸美濃系 灰釉施釉後銅緑釉流し掛け	32-7	
13	陶器	徳利	—	[2.9]	(10.8)	HIK	50	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面上位灰釉 下部～底部ふき取り 18c	32-10	
14	磁器	植木鉢	(6.9)	8.6	4.5		40	普通	白	瀬戸美濃系 内面上位～外面施釉 外面染付 底部露胎 烧成前穿孔	32-11	
15	陶器	植木鉢	—	[10.9]	(9.6)		25	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面施釉 染付 底部露胎 烧成前穿孔	32-12	
16	磁器	爛徳利	(3.2)	[7.6]	—	HK	45	良好	白	瀬戸美濃系 内面上位～外面施釉 外面染付(酸化コバルト)	32-13	
17	陶器	擂鉢	(38.0)	[8.2]	—	I	5	普通	明赤褐	堺明石系 内面擂目(一单位10本) 片口部遺存	32-14	
18	陶器	花瓶	—	[8.3]	—	I	15	普通	にぶい黄橙	美濃 内外面鉄釉(柿釉) 双耳部欠失	32-15	
19	陶器	半胴蓋か	—	[6.6]	(8.2)	IK	40	良好	明赤褐	瀬戸美濃系 外面鉄釉(柿釉) 外面下位～底部鋳化粧	32-16	
20	陶器	土瓶	(8.6)	[5.8]	—	HK	20	良好	灰白	外銅緑釉 破損後煤付着 19c	32-17	
21	陶器	土瓶	(8.6)	[3.5]	—		20	普通	浅黄橙	京都信楽系 外面施釉 鉄絵	32-19	
22	瓦質土器	火鉢	(19.6)	9.8	(13.2)	CHK	50	普通	褐灰		32-18	
23	土師質土器	焙烙	(33.9)	4.1	—	EHIK	40	良好	橙	体部外面煤付着 内底面鉄塊2箇所付着	33-1	
24	土師質土器	焙烙	(33.4)	4.3	—	EHIK	20	普通	にぶい橙	内耳遺存 内外面体部煤付着 内底面に鉄分付着	33-2	
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	石材	重さ/g			備考		図版
25	石製品	砥石	6.0	5.9	2.6	砂岩	92.3			サキノミ状工具痕	52-2	
26	石製品	板碑	13.3	10.6	1.7	緑泥片岩	271.3			裏面押削り痕(幅12mm)	52-2	
番号	種別	器種	口径/cm	内径/cm	外径/cm	胎土	重さ/g	色調		備考		図版
27	土製品	輪羽口	[14.0]	3.5	5.7	I H	219.2	浅黄橙				56-1
28	土製品	輪羽口	[12.5]	3.5	5.3	I	161.4	灰黄				56-1
29	土製品	輪羽口	[12.2]	4.0	6.0	I	216.2	にぶい黄橙				56-1
30	土製品	輪羽口	[11.3]	2.9	5.0	I H	186.6	灰黄				56-1
31	土製品	輪羽口	[16.5]	1.9	4.0	I	202.9	灰黄				56-1
32	土製品	輪羽口	[21.0]	2.9	4.4	I H	135.1	にぶい黄橙				56-1
番号	種別	器種	口径/cm	幅/cm	厚さ/cm	胎土	重さ/g	色調		備考		図版
33	炉壁	炉壁	[5.4]	[6.0]	[7.0]	A	123.2	浅黄橙		スサ跡あり		56-1
34	炉壁	炉壁	[4.2]	[4.9]	3.6	A	52.6	浅黄橙				56-1
35	鉄製品	のべ板状品	[7.0]	3.5	0.3		26.9					54-2
36	鉄製品	のべ板状品	3.5	3.4	0.2		14.5					54-2
37	鉄製品	棒状品	[14.8]	2.6	1.1		184.0					54-2
38	鉄製品	棒状品	[10.2]	2.6	1.2		147.4					54-2
39	鉄製品	棒状品	[6.7]	2.5	1.7		75.7					54-2
40	鉄製品	棒状品	[8.2]	0.5	0.5		20.5					54-2
41	鉄製品	不明品	7.3	0.4	0.4		26.2					54-2
42	鉄滓	椀形滓	11.1	12.0	2.3		304.0					55-1
43	鉄滓	椀形滓	9.1	14.0	3.5		263.3					55-2
44	鉄滓	椀形滓	8.8	11.5	3.2		179.5					55-3
45	鉄滓	椀形滓	8.7	11.9	2.7		435.8					55-4
46	鉄滓	椀形滓	9.8	11.7	3.0		412.5					55-5
47	鉄滓	椀形滓	10.5	12.9	3.5		657.8					55-6
48	鉄滓	椀形滓	9.4	12.2	2.1		264.1					55-7
49	鉄滓	椀形滓	10.6	10.2	3.3		335.2					55-8
50	鉄滓	椀形滓	11.0	10.6	2.0		298.2					55-9
51	鉄滓	椀形滓	10.2	10.2	2.4		252.9					55-10
52	鉄滓	椀形滓	10.0	10.6	2.7		313					55-11
53	鉄滓	椀形滓	9.1	8.8	1.8		160.2					55-12
54	鉄滓	椀形滓	9.4	10.8	2.1		328.1					55-13
55	鉄滓	椀形滓	9.4	8.9	2.3		290.5					55-14
56	鉄滓	椀形滓	7.6	9.7	2.9		228.6					55-15
57	鉄滓	椀形滓	8.5	9.5	2.7		239.1					55-16
58	鉄滓	椀形滓	8.7	[7.1]	3.5		259.9					55-17
59	鉄滓	椀形滓	6.7	7.1	3.2		189.6					55-18
60	鉄滓	椀形滓	7.9	6.3	2.2		134.6					55-19
61	鉄滓	椀形滓	7.2	[8.8]	2.0		177.5					55-20

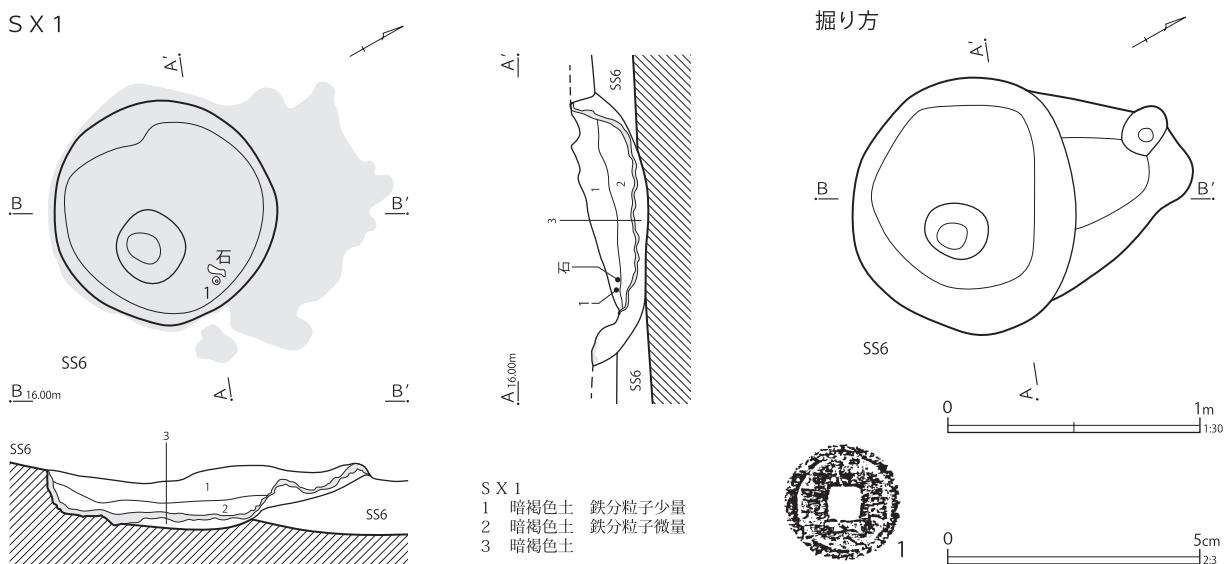
(3) 不明遺構

第1号不明遺構（第122図）

調査区中央のI-8グリッドに位置する。平面形態円形で径約0.8mを測る土壌状の掘り込みと、掘り込みから北方に舌状に延びる落ち込みが検出された。掘り方の上方約5cmには、酸化鉄を含んだ厚さ約3cmの硬化面を持つ。硬化面は掘り込みの底面及び側面に沿って円筒状に見られた。

硬化が重量物によるものとすれば、硬化面上には径約0.75mの円筒状の物体を設置していたと思われるが、舌状の落ち込み上にも硬化面は広がって検出されており、詳細な性格は不明である。関連する遺構は周囲には検出されていない。

遺物は硬化面上から銭貨が1点出土し、第122図1に示した。直径2.5cm、厚さ0.15cm、重さ2.5gを測る。寛永通寶である。



第122図 第1号不明遺構・出土遺物

(4) 炉跡

第1号炉跡（第123図）

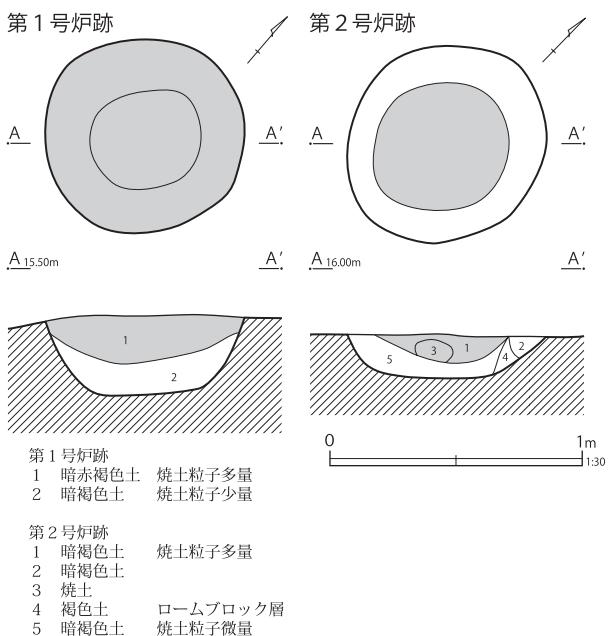
調査区南端のL-9グリッドに位置する。平面形態は円形で、南北0.8m、東西0.78m、深さ0.3mを測る。第1層に焼土塊が多く含まれており、下面が火床面であると思われる。

出土遺物がなく、時期は特定できない。

第2号炉跡（第123図）

調査区西側のG-6グリッドに位置する。平面形態は円形で、南北0.79m、東西0.77m、深さ0.18mを測る。第1層に焼土塊が多く含まれており、下面が火床面であると思われる。

出土遺物がなく、時期は特定できない。



第123図 炉跡

(5) ピット

ピットは94基確認され、J・K-10・11グリッド、F-5グリッドに集中が見られる。J・K-10・11グリッドにはグリッド境界を中心に27基、F-5グリッドには8基が検出された。しかし、いずれも建物跡や杭列などの規則的な配列は見られない。なお、K-8・9グリッドでは4基のピ

ットが一列に並ぶが、間隔が不定である。

各ピットからは遺物がほとんど出土しなかつたため、時期の特定は難しい。H-8グリッドP3については古墳跡の中央に位置し、古墳跡に伴う可能性がある。

各ピットの規模・深さについては、第25表に記載した。

第25表 ピット一覧表

グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm	備考
C-7	P1	34	32	18	
	P2	32	30	24	
D-6	P1	48	42	35	
D-7	P1	40	32	32	
	P2	56	(36)	17	
D-8	P3	40	24	25	
	P1	22	18	42	
D-9	P2	34	26	34	
	P3	38	28	50	
E-6	P4	60	38	48	
	P5	50	44	44	
E-8	P1	21	20	23	
	P2	16	16	25	
F-5	P1	34	30	54	
	P2	40	32	33	
F-6	P1	42	32	22	
	P2	64	58	34	
F-7	P3	44	34	25	
	P1	38	36	19	
F-8	P2	40	38	18	
	P3	32	30	18	
F-9	P4	40	40	30	
	P5	34	32	17	
G-5	P6	38	36	12	
	P7	36	28	23	
G-6	P8	50	35	11	
	P1	60	49	42	
H-5	P1	54	42	42	
	P2	52	52	25	
H-6	P1	32	22	18	
	P2	28	28	59	
H-8	P1	42	36	58	
	P2	39	37	15	
G-10	P1	50	(36)	21	
	P2	46	44	27	
G-9	P3	36	33	38	
	P4	31	30	13	
H-5	P5	16	14	42	新規
	P1	35	27	20	
H-6	P1	46	35	25	
	P2	54	44	21	
H-8	P1	37	31	17	
	P2	43	32	21	
L-8	P3	31	30	48	
	P4	26	21	32	古墳跡に関連か
L-9	P4	30	(21)	48	

グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm	備考
I-8	P1	34	32	20	
	P2	58	52	26	
	P3	40	40	30	
	P4	20	18	16	
	P5	38	36	55	
	P6	30	24	27	旧名 SJ20-P6
I-11	P1	36	34	30	
	P2	34	31	44	
	P3	38	32	60	
	P4	30	29	64	
	P5	30	24	36	旧名 SJ9-P10
	P1	31	30	-	
I-12	P2	43	43	21	旧名 SJ11-P3
	P1	59	55	64	
	P2	40	38	45	
	P3	30	28	33	
	P4	36	27	45	
	P5	30	28	23	
J-10	P1	66	54	94	
	P2	50	42	29	
	P3	40	38	21	
	P4	48	46	15	
	P5	44	39	34	
	P6	34	33	43	
J-11	P7	53	46	18	
	P8	44	42	36	
	P9	24	22	13	
	P10	41	37	45	
	P11	36	26	38	
	P12	34	31	22	
K-8	P13	36	34	19	
	P14	24	23	31	
	P15	37	33	36	
	P1	68	56	28	
	P2	50	38	11	列状を呈する
	P1	40	35	45	
K-10	P2	36	35	72	
	P3	49	36	38	
	P4	36	31	47	
	P5	40	37	6	
	P6	48	41	50	
	P1	50	38	71	
K-11	P2	66	43	82	
	P1	36	30	48	列状を呈する
	P2	42	38	14	列状を呈する
	P3	46	38	31	列状を呈する
	P1	36	36	13	
	P2	40	37	17	

(6) グリッド出土遺物 (第 124 ~ 126 図)

遺構外から出土した遺物のうち、中世～近世に位置づけられるものを図示した。

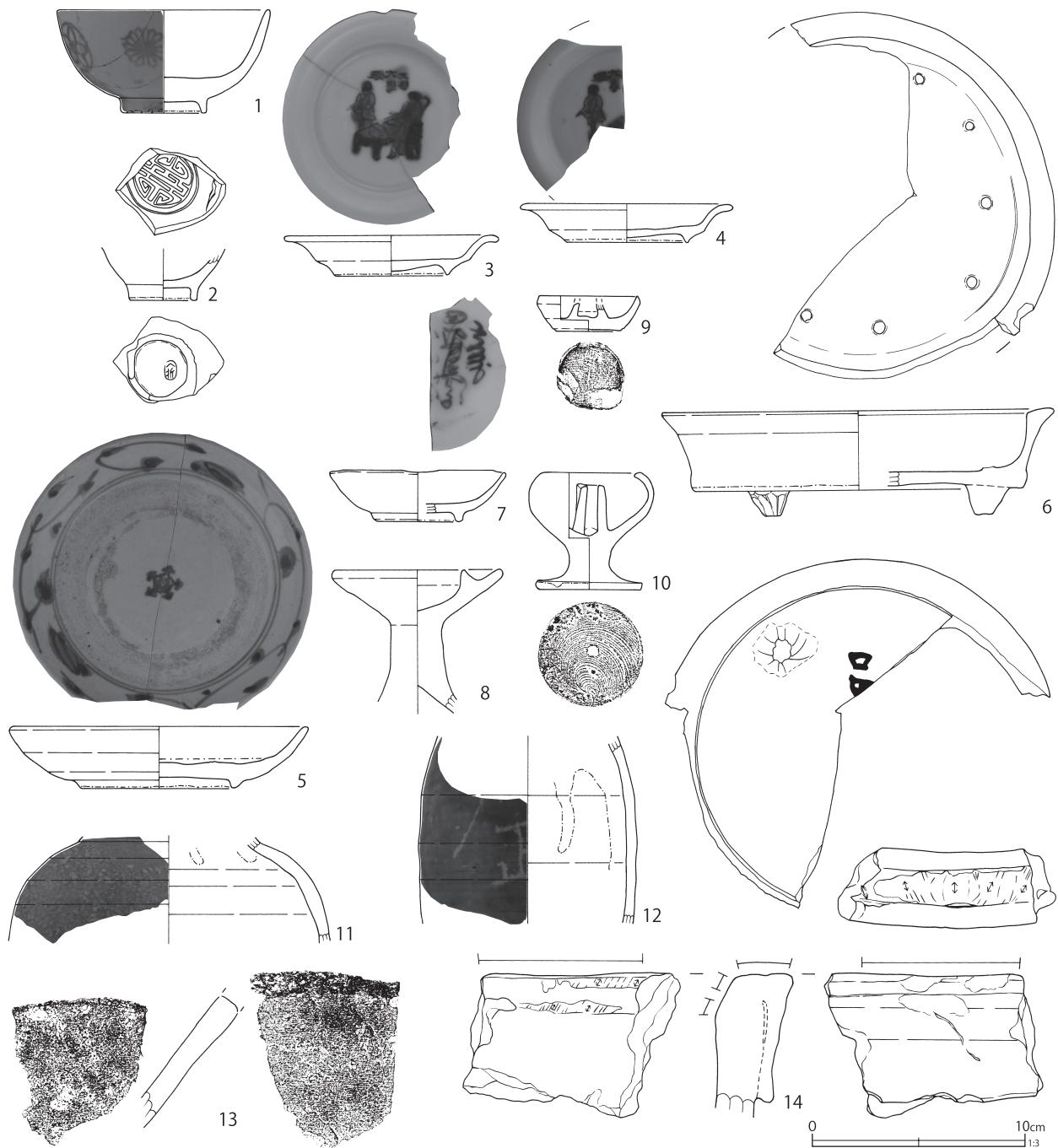
3・4は同一の製品で、上方に「大學」の字が見える。四書の一である大學と思われ、儒教的な図案が描写されている。

22～28 の鉄製品等は古墳跡からの出土であり、

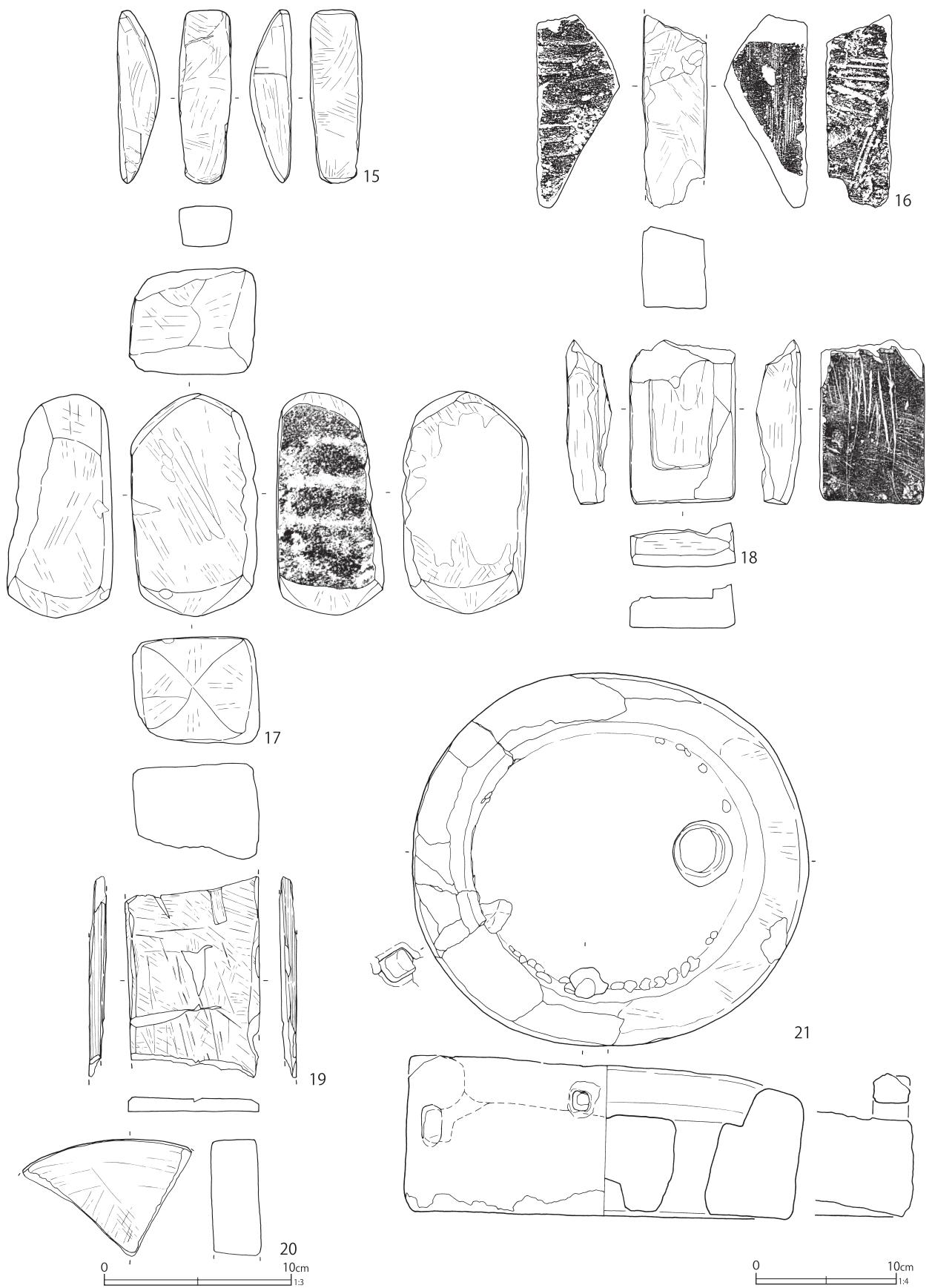
当初は古墳跡に伴う可能性も考慮したが、形状および酸化の進行程度から近世の所産と判断した。

32・33は古銭で、不明瞭であるが32は寛永通寶である。33は「寶」字部分以外は失われており、不明である。

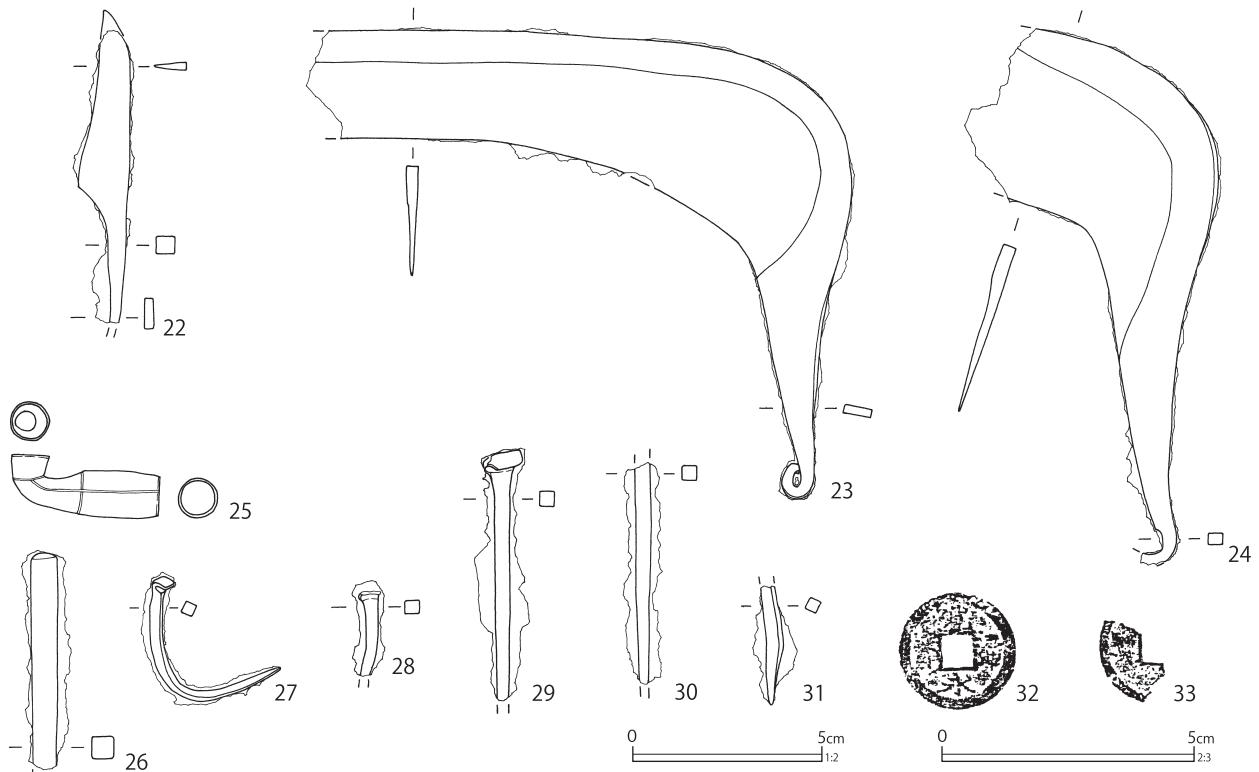
各遺物の詳細については、第 26 表に記載した。



第 124 図 グリッド出土遺物 (1)



第125図 グリッド出土遺物（2）



第126図 グリッド出土遺物（3）

第26表 グリッド出土遺物観察表（第124～126図）

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	磁器	碗	(9.9)	4.8	3.8		50	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付（コンニヤク判）18c前	33-3	
2	磁器	碗	—	[2.6]	(3.2)	K	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面陰刻文 高台内刻印	33-4	
3	磁器	皿	10.0	1.9	5.3	K	70	良好	白	I-8 瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	33-5	
4	磁器	皿	(10.0)	1.8	(5.6)	K	30	良好	白	H-8 瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	33-6	
5	磁器	皿	(13.7)	[2.9]	7.2	K	90	良好	白	I-8 肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥ぎ 染付 18c後	33-7	
6	陶器	香炉か	(18.4)	4.9	(15.4)	K	40	良好	灰白	J-8 地方窯 内外面灰釉 糖白釉 内面目跡6遺存	33-8	
7	磁器	杯	(8.1)	[2.3]	(4.2)	K	20	良好	白	J-8 瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	33-9	
8	施釉土器	灯明具	(7.8)	[6.7]	—	GHK	50	良好	橙	I-8 透明釉施釉 受皿 煤付着	33-10	
9	土師質土器	灯明具	(4.6)	[1.6]	(3.0)	AHIK	50	普通	橙	G-7 底部糸切痕（左）芯立て煤付着	33-11	
10	陶器	秉燭	4.5	5.5	5	HK	100	良好	にぶい黄澄	I-8 瀬戸美濃系か 内外面鉄釉 底部・内面煤付着	33-12	
11	陶器	土瓶	—	[4.9]	—	IK	20	良好	灰白	信楽系 外面灰釉 長石発泡目立つ	33-13	
12	陶器	徳利	—	[8.7]	—	H K	25	良好	灰白	I-8 瀬戸美濃系 外面灰釉 釘書き 18c	33-14	
13	陶器	鉢	—	[6.2]	—	EIK	5	良好	黄灰	常滑 破損後二次利用（砥具）15~16c	33-15	
14	陶器	甕	—	[6.8]	—	EIK	5	良好	灰	SD8 常滑 口縁上端、内面二次利用（砥具）	33-16	
番号	種別	器種	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	石材	重さ/g	備考				図版
15	石製品	砥石	9.3	2.8	2.0	流紋岩	76.5					52-3
16	石製品	砥石	[10.5]	3.6	4.4	流紋岩	188.9	ノコギリ痕あり				52-3
17	石製品	砥石	11.9	6.7	5.6	砂岩	675.4	ノミ痕あり				52-3
18	石製品	硯	8.8	5.7	2.4	粘板岩	146.6	裏面転用砥具				52-3
19	石製品	砥石	10.8	7.2	0.9	粘板岩	83.5	両側縁部ノコギリ痕あり				52-3
20	石製品	砥石か	6.2	9.0	—	砂岩	162.6					52-3
21	石製品	石臼(上臼)	径(28.2)cm	器高11.2cm	角閃安山岩		10981	供給孔あり 上端面を砥具に二次転用 挽手孔に二次穿孔し、2箇所の貫通孔を穿つ				53-1
22	鉄製品	和鉄	[7.1]	0.5	0.5		11.5					54-3
23	鉄製品	鎌	[14.5]	刃幅 2.9 cm	背幅 0.3 cm		74.6					54-3
24	鉄製品	鎌	[14.5]	刃幅 4.5 cm	背幅 0.4 cm		63.1					54-3
25	銅製品	煙管 駙首	[3.9]	吸口径 1.0 × 1.0	火皿径 1.0 × 1.0		8.1					54-3
26	鉄製品	棒状品	[5.7]	0.6	0.6		17.9					54-3
27	鉄製品	釘	[5.9]	0.3	0.3		3.7					54-3
28	鉄製品	釘	[2.2]	0.4	0.35		1.3					54-3
29	鉄製品	釘	[6.6]	0.4	0.4		6.1					54-3
30	鉄製品	棒状品	[5.8]	0.4	0.4		6.6					54-3
31	鉄製品	釘か	[3.1]	0.3	0.3		2.0	SJ2				54-3
32	銭貨	寛永通寶	径 2.35 cm	厚さ 0.12 cm			2.3	SS6石室掘り方				54-3
33	銭貨	不明	径 (2.4) cm	厚さ 0.12 cm			0.7	「寶」字のみ残る				54-3

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

楽中遺跡の調査では、竪穴住居跡 21 軒、竪穴状遺構 1 基、炉穴 6 基、埋甕 3 基、古墳跡 1 基、溝跡 12 条、土壙 85 基、集石遺構 1 基、不明遺構 1 基、炉跡 2 基が検出された。

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器と剥片が出土した。遺構には伴わず、原位置も留めていない。

縄文時代早期では、炉穴 6 基が検出された。炉穴は調査区北端に放射状に密集し、燃焼部分を外縁側に向いている。第 1 号炉穴からは条痕文系土器の底部が出土した。また、遺構に伴わないが、早期初頭の井草 I 式・夏島式・稻荷原式の撫糸文系土器が検出された。中葉の沈線文系土器も田戸下層式・田戸上層式が少量ながら確認され、後葉の条痕文系土器も野島式・鶴ヶ島台式が見られた。周辺の遺跡の中でも古い様相を呈し、特に早期初頭の遺物が確認されたことは成果の一つである。

続く縄文時代前期では、後葉の住居跡 4 軒、末葉の住居跡 1 軒、竪穴状遺構 1 基、土壙 64 基、集石土壙 1 基が検出された。第 6・9・11・20 号住居跡及び竪穴状遺構からは諸磯 a 式土器が多量に出土した。この中では、第 20 号住居跡が先行するようである。遺跡周辺では、江川を挟んだ対岸の小谷津遺跡（須田・山崎 1991）等で同時期の住居跡が検出されており、江川下流域の両岸に集落が存在した光景を窺わせる。また、第 3 号住居跡からは十三菩提式、集石土壙からは諸磯 c

2. 古墳時代前期の様相について

楽上遺跡や砂ヶ谷戸 I・II 遺跡など江川右岸の台地上には、弥生時代後期から古墳時代中期まで継続して遺構が認められる。楽上遺跡では、古墳前期を下限とした溝跡に環濠の可能性が指摘され、この地域における拠点的な集落と想定されている（橋本ほか 1984）。楽上遺跡では、平面円形の住居跡が散見される（吉川ほか 1977）。この形態の

式の前期末葉に位置づけられる土器片が出土した。この時期の遺構は県内でも類例が少ないが、在家遺跡（細田 1991）等周辺の遺跡では、住居跡が検出されている。在家遺跡と同様に、台地上からこの時期の遺構が検出された例として貴重である。

中期から後期にかけては、中期後半の住居跡 1 軒、後期初頭 1 軒、埋甕 3 基、後期前葉 2 軒が検出された。第 12 号住居跡からは中期後半の加曾利 E III～IV 式の土器が出土しており、中井遺跡など大規模遺跡の周辺に所在した小規模な集落の一つであったと思われる。後期初頭の第 16 号住居跡からは 2 基の埋甕が、また住居跡に伴わない単独の埋甕 3 基が検出された。後期前葉も中期後半同様に小規模な集落であったと思われる。

このほか、古墳時代以降の遺構覆土や遺構外からも多量の縄文土器が出土した。

古墳時代は、前期初頭の住居跡 11 軒、土壙 1 基が検出された。周辺では砂ヶ谷戸 II 遺跡（吉川ほか 1977）や楽上遺跡（同）などからも住居跡が確認されており、弥生時代終末期から江川中～下流域に展開する集落の一つを検出することができた。

古墳時代の後期は、住居跡 1 軒、古墳跡 1 基、溝跡 1 条、土壙 1 基が検出された。古墳跡は、川田谷古墳群樋詰支群の樋詰 6 号墳に比定される。なお、古墳時代後期の第 5 号住居跡は、古墳跡には先行するものと思われる。

住居跡は、江川流域では、楽中遺跡と宮前遺跡（粒良 1990）でも確認されている。一方、同時代に営まれた雲雀遺跡（小宮山ほか 1992）等の江川以南の集落跡では、平面円形の住居跡は検出されていない。江川右岸での集落の形成が弥生時代後期から見られ、以南の諸集落に比べてわずかに先行することは II-2 で述べたが、この先行する

集落の中に、古墳時代に入ってから円形住居を選択した住人が一定数存在したことは注目に値する。平面円形の住居跡は在地の集落には少ない。また宮前遺跡で検出された平面円形の住居跡からは、同時期の主に駿河地方に分布する「大廓式」の模倣とされる壺の口縁部が出土している。ここから、楽中遺跡第13号住居跡から出土したミニチュア壺（第81図2）の、強く外反する口縁、胴部最大径をやや下方にもつ器形などを南関東～東海系の要素と捉えることもできる。一方で、少ない資料から住居形態と在地・他地域の関係を論じるには難しく、今後の課題である。

今回の調査で出土した土器群には、復元個体が少なく、型式的な変遷を指摘することは難しい。しかし、比較的個体数の多い高坏から考えると、第4号住居跡出土資料（第76図5～9）は坏身がやや浅いことから新相を示し、第2・14・17号住居跡出土資料（第74図5・82図2・86図4）は坏身がやや深いことから古相を示していると言えよう。古墳時代の前期を表す代表的な編年案をいくつか用いて表現すれば、新・古相とともに、日本考古学協会による1993年の全国的な広域編年案（日本考古学協会 1993）では北武藏Ⅲ期に、あるいは南関東を中心とした編年案（比田井 1984）ではI（古）に相当すると思われ、また埼玉県内では反町遺跡の編年案（赤熊・福田 2013）のII-1よりやや古相を示す。これらの中でも、楽中遺跡に最も近い稻荷台遺跡の成果を基にした編年案（書上 1994）に照らすと、1段階（中）に捉えられるであろう。これは、土器

3. 古墳跡について

古墳跡から出土した大刀については、その刀装具（環付足金物）の形態から年代が推定できる。豊島直博の編年（豊島 2013）によれば短脚C式に分類され、編年では第3期と捉えられる。年代としては7世紀第2四半期が与えられる。

樋詰支群は調査事例が少なく、時期が確認でき

組成に小型器台形土器が見られ始める段階とされ、東海地方西部系を主体とする外来系土器群の波及が見られるとされている。楽中遺跡では小型器台形土器が確認されていないが、瓢形壺（第84図1）やパレス文を持つ高坏（第80図1）等の外来系土器が出土しており、土器組成からこの時期の特徴に合致する。なお、周辺地域との編年上の齟齬については、今後の課題である。

また、今回の出土遺物には、同時代に荒川右岸地域で衰退しつつも存続していた吉ヶ谷式系統の土器が含まれていなかった。大宮台地西岸の周辺遺跡でも、同様の傾向が見られ、吉ヶ谷式系統の土器は砂ヶ谷戸II遺跡等で出土しているが、江川流域の集落跡では客体的である。むしろ台原遺跡に見られる南関東系要素（台原遺跡発掘調査会 2000）、楽上遺跡の碧玉製管玉（吉川ほか 1977）、楽中遺跡の大宮台地南東部に頻出する甕（第74図3）、パレス文を持つ高坏片（第80図1）等、南関東や東海地方からの影響を見出すことができる。一方、弥生時代以来の技法（福田 2013）とされる甕の内面へのヘラミガキ（第86図1・2）は、大宮台地南東部に頻出する（柿沼 1989）輪積み痕を残す甕（第74図3）にも見られる。つまり、土器製作技法については、従来の在地の技法が継続されていたことになる。

前期の楽中遺跡は、壺・高坏などに南関東から東海地方の外来的要素が強く認められる。一方、甕等の什器の作製には在来の技術が用いられている。南関東から東海地方との交流が、短期間に活発化した結果として捉えられるだろう。

た古墳はほとんどない。前期古墳の熊野神社古墳の他は、宮前遺跡の7号墳の周溝から、6世紀後半の円筒埴輪の破片が出土した（関根ほか 1990）のみであった。今回の樋詰6号墳が7世紀第2四半期と考えられることから、他の支群同様に、樋詰支群も後期古墳を内包する古墳群と捉えられる。

4. 中・近世の土地利用について

調査区の中で第1号溝跡によって区分された箇所には、ヤドロが敷かれていません（第3図②）。また、他土壌との遺物出土量の差から第66号土壌を廃棄土壌とすれば、遅くとも18世紀後半から19世紀にかけては屋敷地であったと推定される。廃棄土壌が屋敷の裏手に位置していたと仮定すると、屋敷は江川方向に正面を向けていたことが推測される。これは現代の近隣の地割と概ね一致する。

第69号土壌出土の鍛冶関連遺物については、

楕形溝の数や鍛造剥片の大きさから、ある程度長期間にわたって操業された野鍛冶の存在が想定される。現在は、川田谷地区に野鍛冶の存在を窺わせるものは残されていません。近世以降の諸史料にも川田谷における野鍛冶の記録はない。わずかに昭和17年の「桶川野鍛冶工業小組合設立認可申請書」に、平方町・桶川町・大石村等に12軒の野鍛冶が見える。しかし、当時既に川田谷村に起居する野鍛冶の名は見られなくなっている。

引用・参考文献

- 赤熊浩一・福田聖 2011『反町遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
上尾市 2000『上尾市史 第6巻通史編（上）』
今井正文ほか 1989『平成元年度 桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会
桶川市 1990『桶川市史 第9巻補遺編』
書上元博 1994『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
柿沼幹夫 1989『上手遺跡発掘調査報告書』北本市遺跡調査会
硬砂団体研究グループ 1984「大宮台地に分布する硬砂層の性質と堆積環境」『地球科学』第38巻1号
小宮山克己ほか 1992『雲雀遺跡』上尾市文化財調査報告第38集
草野潤平 2016『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣
埼玉県教育委員会 1994『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』
埼玉県商工務部商工課 1942「桶川野鍛冶工業小組合設立認可申請書」（埼玉県文書 昭4214）
塩野博 1967『桶川町文化財調査報告I 川田谷の遺跡と遺物』埼玉県北足立郡桶川町教育委員会
杉山和徳 2015「大宮台地の硬砂層の利用について」『埼玉考古』第50号
須田均・山崎広幸 1991『小谷津遺跡－第2次調査－』上尾市遺跡調査会調査報告書第2集
関根訪 2001『桶川市内遺跡発掘調査報告書 砂ヶ谷戸I 遺跡第3次調査』桶川市教育委員会
関根訪ほか 1990『宮前遺跡』桶川市文化財調査報告書第20集
台原遺跡発掘調査会 2000『台原遺跡』台原遺跡発掘調査会
粒良紀夫 1990『平成2年度 桶川市遺跡発掘調査報告書』桶川市教育委員会
豊島直博 2013「環付足金具をもつ鉄刀の編年」『考古学研究』第60巻2号（239号）
日本考古学協会 1993『東日本における古墳出現期の再検討』
橋本富夫 2003『三ツ木遺跡』桶川市文化財調査報告書第25集
橋本富夫ほか 1984『昭和58年度 桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会
橋本富夫ほか 1987『昭和62年度 桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会
比田井克仁 1994「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究V』庄内式土器研究会
福田聖 2013「古式土師器における甕磨き手法」岡内三眞 編『技術と交流の考古学』同成社
藤沼昌泰ほか 2007『氷川神社裏古墳 宮遺跡第3次発掘調査』宮遺跡発掘調査会
細田勝 1991『在家』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第107集
森田安彦・永井智教 1999『塩古墳群・狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集
吉川國男ほか 1977『砂ヶ谷戸I・II遺跡 楽上遺跡』桶川市文化財調査報告書第9集